野田地区遺跡

—高速自動車国道近畿自動車道松原那智勝浦線建設に伴う発掘調査報告書—

2009年10月

財団法人　和歌山県文化財センター

1. Ⅰ－B区　遺構 10 木製品出土状況（南から）

2. Ⅰ－A区　陶質土器（36）

序

和歌山県のほぼ中央を東西に貫流する有田川の下流域は、温暖な気候に育まれて、原始以降の多くの遺跡が遺されています。中でも、野田地区遺跡が所在する流域最大の吉備平野周辺は、特に遺跡が集中する地域で、発掘調査によって数多くの成果が蓄積され、古より有田地方の中心地であったことがわかっています。

野田地区遺跡は、現在供用されている高速道路建設に伴って1980年度に発掘調査がおこなわれ、弥生時代末から中世にかけての土器や木製品をはじめとする膨大な遺物がみつかり、重要な遺跡であることが明らかになっていました。

このたび、高速道路の4車線化にともなって発掘調査が実施され、1980年度の調査区隣接地から前回同様に多くの遺構・遺物がみつかり、このうち低地部分を流れる溝からは、保存状態がよい木製品が多量に出土しました。木製品は生活のあらゆる分野で使われていますので、当時の生活の様子を復元するためのタイプカプセルのような遺跡であるといって過言ではないでしょう。また、出土した古墳時代の建築部材や家具・機織具、古代の犂、桧扇などは、どれをとっても県下唯一や県下でも数少ない資料といえます。

ここに、発掘調査の成果をまとめ、報告書を刊行いたします。本書が郷土の歴史を知る上で一資料となれば幸いかと存じます。

最後になりましたが、調査及び本書作成にあたりご指導・ご協力をいただきました関係各位の皆様方に深く感謝申し上げるとともに、今後とも当文化財センターへの一層のご理解とご支援を賜りますようお願いいたします。

平成21年10月30日

財団法人　和歌山県文化財センター

理事長　小関洋治

例　言

1．本書は、和歌山県有田郡有田川町野田に所在する野田地区遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、高速自動車国道近畿自動車道松原那智勝浦線建設に伴うもので、平成17・18・19年度の3箇年にわたって発掘調査を実施し、平成20・21年度に報告書作成に伴う遺物整理業務を実施した。

3．発掘調査及び遺物整理業務は、西日本高速道路株式会社の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。

4．発掘調査・整理業務の調査組織は下記の通りである。

事　務　局　長　熊崎訓自（平成17・18年度）
松田長次郎専務理事（平成19年度･平成20年度5月まで事務局長兼務）
酒部三依（平成20年度6月から　管理課長兼務）
田中洋次（平成21年度）

事務局次長　山本新平（平成19年度　管理課長兼務）
酒部三依（平成20年度6月まで　管理課長兼務）

管　理　課　長　西本悦子（平成17・18年度）
冨加見泰彦（平成21年度）

埋蔵文化財課長　渋谷高秀（平成17・18年度）
村田　弘（平成19・20・21年度）

発掘調査業務担当　平成17年度（第1次調査）：佐伯和也、川崎雅史
平成18年度（第2次調査）：佐伯和也、川崎雅史、北森さやか
平成19年度（第3次調査）：佐伯和也

遺物整理業務担当　平成20・21年度：川崎雅史

5．発掘調査及び整理作業には以下の者が従事した

調査補助員：山野晃司　／　整理補助員・整理作業員：和坂智子、稲田紗千、堀口歩、鳴神史乃、高橋亜紀、谷口悠紀代、山本昌見、杉本衣里、片山律子

6．本書の執筆はおもに川崎がおこない、佐伯との協議のもとに川崎が編集した。

7．遺構写真は調査担当者が、遺物写真は川崎が撮影した。

8．発掘調査及び遺物整理業務に際し、下記の方々からご協力･ご教示を得た。記して感謝を表します。

井藤徹（日本民家集落博物館）、上原真人（京都大学）、川口修実（有田川町教育委員会）、河内一浩（羽曳野市教育委員会）、北野隆亮（財団法人和歌山市都市整備公社）、黒須亜希子（財団法人大阪府文化財センター）、工楽善通（大阪府立狭山池博物館）、此松昌彦（和歌山大学）、

河野通明（神奈川大学）、酒井将史（奈良県立橿原考古学研究所）、辻裕司（財団法人京都市埋蔵文化財研究所）、坪之内徹（奈良女子大学）、中野咲（奈良県立橿原考古学研究所）、坂靖（奈良県立橿原考古学研究所）、東村純子（京都造形芸術大学）、前田敬彦（和歌山市立博物館）、森郁夫（帝塚山大学）

9．発掘調査及び遺物整理業務で作成した実測図・写真・台帳などの記録資料は、財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が保管している。

10．発掘調査および遺物の整理業務において、下記作業を委託業務により実施している。

平成17年度　航空写真撮影・基準点測量	：株式会社共和
平成18年度　航空写真撮影	：株式会社南紀航測センター
平成19年度　基準点測量	：和歌山航測株式会社
平成18・20～21年度　木製品の保存処理	：株式会社吉田生物研究所
平成21年度　植物珪酸体分析	：株式会社パレオ・ラボ

凡　例

1．調査ならびに本書で使用した座標値は、直角平面座標系（世界測地系）第Ⅵ系のもので、値はkm単位で使用している。図面に使用している北方位は座標北で、標高は東京湾標準潮位（T.P.＋）の数値である。

2．土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」に準じ、土質は調査担当者の任意の判断でおこなっている。

3．発掘調査においては、地区名並びに遺構番号は、各年度の調査ごとに個別に付していたが、煩雑さを避けるため本報告では新たに地区名・遺構番号を付している。なお．遺構番号は遺構の種類にかかわらず1からの通し番号である。

4．遺物図面の縮尺は木製品を除き原則として1/4で、サイズが大きい木製品は1/4のほかに1/6・1/8・1/12・1/16で掲載しているが、遺物写真については任意の大きさである。

5．遺物実測図に貼付したスクリーントーンは、①土器の焼成時に付いた黒斑、②土器の二次焼成時についたスス、③木製品の樹皮、④木製品の腐食部分、⑤木製品の炭化部分、⑥木製品への漆などの塗布をあらわす。

6．調査で使用した調査コードは第1次調査：05－21・38、第2次調査：06－21・38、第3次調査：07－21・38で、記録資料はこのコードを用いて管理している。

本文目次

序・例言・凡例
第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査の経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の方法と成果 …… 6
　第１節　既往の調査成果 …… 6
　第２節　調査の方法 …… 6
　　１．調査区 …… 6
　　２．地区割り …… 6
　第３節　基本層序 …… 8
　第４節　遺構と遺物 …… 11
　　１．Ⅰ区 …… 11
　　２．Ⅱ区 …… 38
　　３．Ⅲ区 …… 40
　　４．Ⅳ区 …… 44
第４章　考察 …… 45
　第１節　遺跡の性格 …… 45
　第２節　出土遺物の検討 …… 50
　　１．弥生時代末から古墳時代中期にかけての土器 …… 50
　　２．埠 …… 53
第５章　理化学的分析 …… 58
　第１節　植物珪酸体分析 …… 58
　第２節　木製品の樹種調査 …… 62
遺構一覧表 …… 68
出土遺物観察表 …… 70
木製品一覧表 …… 78
報告書抄録 …… 80
写真図版

挿図目次

図1　周辺の地形……3
図2　周辺の遺跡（S = 1/50,000）……4
図3　調査区位置図（S = 1/5,000）……7
図4　調査区地区割り図（1/1,600）……7
図5　基本層序……8
図6　調査区全体図……9・10
図7　Ⅰ－A区遺構……12
図8　Ⅰ－A区出土遺物（1）……13
図9　Ⅰ－A区出土遺物（2）……14
図10　Ⅰ－A区出土遺物（3）……15
図11　Ⅰ－A区出土遺物（4）……16
図12　Ⅰ－A区出土遺物（5）……17
図13　Ⅰ－B区遺構（1）……19
図14　Ⅰ－B区遺構（2）……20
図15　Ⅰ－B区出土遺物（1）……21
図16　Ⅰ－B区出土遺物（2）……22
図17　Ⅰ－B区出土遺物（3）……24
図18　Ⅰ－B区出土遺物（4）……25
図19　Ⅰ－B区出土遺物（5）……26
図20　Ⅰ区出土木製品（1）……27
図21　Ⅰ区出土木製品（2）……28
図22　Ⅰ区出土木製品（3）……29
図23　Ⅰ区出土木製品（4）……30
図24　Ⅰ区出土木製品（5）……31
図25　Ⅰ区出土木製品（6）……32
図26　Ⅰ区出土木製品（7）……33
図27　Ⅰ区出土木製品（8）……34
図28　Ⅰ区出土木製品（9）……35
図29　Ⅰ区出土木製品（10）……36
図30　Ⅰ区出土木製品（11）……37
図31　Ⅱ区遺構（1）……38
図32　Ⅱ区遺構（2）……39
図33　Ⅱ区出土遺物……39
図34　Ⅲ区遺構……40
図35　Ⅲ区出土遺物……41
図36　Ⅲ区出土遺物・銭貨……41
図37　Ⅳ区遺構……42
図38　Ⅳ区出土遺物……43
図39　天満1号墳墳丘・鈎帯……47
図40　1980年度調査出土遺物……49
図41　弥生時代末から古墳時代中期にかけての土器変遷…51
図42　犂の部分名称……53
図43　梶原遺跡出土犂……55
図44　野田地区遺跡の植物珪酸体分布図……59

表目次

表1　調査の工程表……2
表2　周辺遺跡一覧……4
表3　調査区新旧対照表……6
表4　犂の出土例……55
表5　試料1g当たりの機動細胞珪酸体個数……58
表6　樹種同定表……64

写真目次

写真1　Ⅰ－A区掘り下げ状況……1
写真2　整理作業風景……2
写真3　成果報告会……2
写真4　天満1号墳（泣沢女の古墳）……5
写真5　旧吉備中学校校庭遺跡……45
写真6　藤並神社……46
写真7　犂柄の枘穴（犂254）……53
写真8　犂255の犂先部分……54
写真9　野田地区遺跡の植物珪酸体……61
写真10　木製品の樹種調査（顕微鏡写真）……65
写真11　木製品の樹種調査（顕微鏡写真）……66
写真12　木製品の樹種調査（顕微鏡写真）……67

文献目次

文献1　在田郡司解・・・・・48

図版目次

巻頭図版1．Ⅰ－B区　遺構10木製品出土状況（南から）
　　2．Ⅰ－A区　陶質土器（36）
図版1　1．遺跡遠景（東上空から）
　　2．調査地近景（上空から）
図版2　1．Ⅰ－A区　第2層上面（北から）
　　2．Ⅰ－A区　第12層上面（北から）
　　3．Ⅰ－A区　第27層上面（南から）
図版3　1．Ⅰ－A区　遺構1（北西から）
　　2．Ⅰ－A区　遺構2（北から）
　　3．Ⅰ－A区　遺構3（南東から）
　　4．Ⅰ－A区　遺構4（南東から）
　　5．Ⅰ－A区　第13層土器出土状況
　　6．Ⅰ－A区　遺構4木製品出土状況（南東から）
　　7．Ⅰ－A区　第25層土器出土状況（北西から）
　　8．Ⅰ－A区　段丘崖（北から）
図版4　1．Ⅰ－B区　遺構5（南から）
　　2．Ⅰ－B区　遺構6（南から）
　　3．Ⅰ－B区　遺構7（北から）
図版5　1．Ⅰ－B区　遺構8（南から）
　　2．Ⅰ－B区　遺構9（北から）
　　3．Ⅰ－B区　遺構10（北から）
図版6　1．Ⅰ－B区　遺構8横槌出土状況
　　2．Ⅰ－B区　遺構8犂出土状況
　　3．Ⅰ－B区　遺構8土器出土状況
　　4．Ⅰ－B区　遺構9横槌出土状況
　　5．Ⅰ－B区　遺構10木製品出土状況（北東から）
　　6．Ⅰ－B区　遺構10土器・木製品出土状況（南西から）
　　7．Ⅰ－B区　遺構12木製品出土状況（南西から）
　　8．Ⅰ－B区　遺構10完掘状況（北東から）
図版7　1．Ⅱ－A区（北から）
　　2．Ⅱ－B区（北から）
　　3．Ⅱ－C区（北から）
図版8　1．Ⅱ－D区（北から）
　　2．Ⅱ－D区　遺構50（西から）
　　3．Ⅱ－E区（東から）
図版9　1．Ⅲ－A区（南から）
　　2．Ⅲ－B区（北から）
　　3．Ⅲ－A区　遺構36柱列（西から）
図版10　1．Ⅳ区北半（南から）
　　2．Ⅳ区南半（北から）
　　3．Ⅳ区北東部　柱穴群（西から）
図版11　Ⅰ－A区出土遺物
図版12　Ⅰ－A区出土遺物
図版13　Ⅰ－A区出土遺物
図版14　Ⅰ－A・B区出土遺物
図版15　Ⅰ－B区出土遺物
図版16　Ⅰ－B区出土遺物
図版17　Ⅰ－A・B区、Ⅱ区出土遺物
図版18　Ⅰ区出土木製品
図版19　Ⅰ区出土木製品
図版20　Ⅰ区出土木製品
図版21　Ⅰ区出土木製品
図版22　Ⅰ区出土木製品

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

高速自動車国道松原那智勝浦線（旧一般有料道路海南湯浅道路）の海南ＩＣ～有田ＩＣ（旧吉備ＩＣ）は暫定２車線対面通行となっており、また、区間内に長峰トンネル（3,831 m）をはじめとして長大なトンネルが連続していることもあって、通勤時間帯や行楽シーズンには渋滞が常態化していた。渋滞を解消するため、この区間の４車線化工事が実施されるのに伴い、野田地区遺跡の範囲内が開発されることになった。

野田地区遺跡[(1)]は、現在供用されている自動車国道建設の際におこなわれた発掘調査などで弥生時代末から中世にかけての自然流路や溝が検出され、多くの土器類や木製品が出土するなど遺構・遺物が豊富に遺されていることが明らかになっていた。

発掘調査は、高架となっている高速道路の橋脚（７箇所）と高速道路下に沿う側道部分が対象で、平成 17 ～ 19 年度の３箇年にわたっておこなった。

第２節　調査の経過

平成 17 年度の調査（第１次調査）　発掘調査は、平成 18 年１月から３月にかけておこなった。調査区は、橋脚部で沖積地に立地するＩ区と側道部で段丘上に立地するⅣ区（旧Ⅱ区）に分かれる。Ｉ区は、工事用に打設した矢板内で調査をおこなった。当初は、Ｉ－Ａ・Ｉ－Ｂの２箇所の橋脚部を調査することになっていたが、調査途中で設計段階より調査面積に加え掘削土量が増え、年度内に調査を終了することが困難であることが明らかになり、Ｉ－Ｂ区に関しては、機械掘削のみで人力掘削以降の作業は次年度に繰り越した。Ⅳ区は排土置き場が確保できなかったことから、南北に反転して調査をおこなった。Ｉ－Ａ区の調査面積は 73㎡、Ⅳ区の調査面積は 609㎡である。

写真１　Ｉ－Ａ区掘り下げ状況

調査は工事請負方式で実施し、掘削作業等は株式会社松村組に委託し、基準点測量・航空写真撮影は株式会社共和に委託した。また、発掘調査と並行し、応急整理として出土遺物の洗浄等をおこなっている。

平成 18 年度の調査（第２次調査）　発掘調査は、平成 18 年４月から７月にかけておこなった。調査区はＩ－Ｂ（旧Ｉ区）・Ⅱ・Ⅴ（旧Ⅲ区）の３つの区に分かれ、Ｉ－Ｂ区・Ⅱ区は橋脚建設に、Ⅴ区は側道建設に係る調査区である。また、Ｉ－Ｂ区とⅡ区は立地により分けたもので、Ｉ－Ｂ区が沖積地、Ⅱ区が段丘上になる。Ｉ－Ｂ区は前年度の調査で、表土の機械掘削は終了していた。

Ⅱ区は廃線となった有田鉄道の線路敷きで、A～Dの4つの小調査区に分かれる。Ⅴ区は大きく盛土され、その上に重厚な建物基礎が築かれていることが表土掘削途中に明らかになり、掘り下げが困難で危険が生じることから調査対象から除外した。発掘面積はⅠ区が92㎡、Ⅱ区が4箇所で363㎡、Ⅴ区が68㎡である。

調査は工事請負方式で実施し、掘削作業等は株式会社間組に委託し、航空写真撮影は株式会社南紀航測センターに委託した。また、劣化の恐れがある木製品7点については実測・写真撮影をおこない、保存処理を株式会社吉田生物研究所に委託した。このほか、発掘調査と平行して、応急整理として出土遺物の洗浄等をおこなっている。

写真２　整理作業風景

平成19年度の調査（第３次調査）　発掘調査は、平成19年5月から6月にかけておこなった。調査区は側道建設に係るⅢ区（旧Ⅰ区）と、橋脚建設に係るⅡ－E区（旧Ⅱ区）に分かれ、このうちⅢ区は構造物等によって分断された調査区となっており、北側をⅢ－A区、南側をⅢ－B区として調査をおこなっている。

調査は工事請負方式で実施し、掘削作業等は生駒建設に、基準点測量は和歌山航測株式会社に委託した。調査面積はⅢ区が208㎡、Ⅱ－E区が65㎡である。

写真３　成果報告会

遺物整理業務　平成21年3月から10月にかけておこなった。コンテナ（遺物収納箱）38箱の土器類と約100点の木製品について、登録･注記･接合･復元･実測・拓本・写真撮影などの作業を実施し、報告書用の原稿を作成した。また、植物珪酸体分析を株式会社パレオ・ラボに、木製品16点と鉄製品1点の保存処理を株式会社吉田生物研究所に委託した。

普及活動　第2次調査では希少価値の高い多くの木製品が出土したが、調査終了後に野田地区遺跡が所在する有田川町きびドームにおいて発掘調査の成果報告会をおこない45名の参加があった。

表１　調査の工程表

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

有田川町は、紀伊半島の西岸を占める和歌山県の中央北寄りに位置する。地勢は東が紀伊山地で奈良県に接し、北には長峰山脈、南には白馬山脈が横たわり、その間を高野山に源を発し、紀伊水道に注ぐ有田川が西流する。町域は有田川流域の下流付近から上流域を占め、東西に長い。平成18年に有田郡内の吉備町・金屋町・清水町がいわゆる「平成の大合併」によりできた町で、面積は約352ｋ㎡、人口は平成21年７月現在で28,523人を数える。

野田地区遺跡は、蛇行を繰り返してきた有田川が河口に向かって直流するようになる町西部の旧吉備町に位置する。周辺部には沖積平野と河岸段丘が発達し、流域では最も広い平野が広がっている。この平野部は有田市との市町界となっている岩室山と雲雀山によって扼され、盆地的な地形にある。遺跡は平野部の西端に位置し、沖積平野と河岸段丘が接する付近に展開している。

第２節　歴史的環境

野田地区遺跡（１）の周辺では、流域最大の平野部を基盤に先土器時代から中・近世に至る各時代の遺跡が集中する。

先土器時代の遺跡は、日高川下流域周辺、紀ノ川下流域左岸などとともに顕著な地域として周知されている。日高川下流域の遺跡とともに石材にサヌカイト以外に硬質頁岩を用いるのが当地方の特徴である。これまでの発掘調査では、キャンプ地など仮設的な居住施設に伴うと考えられ

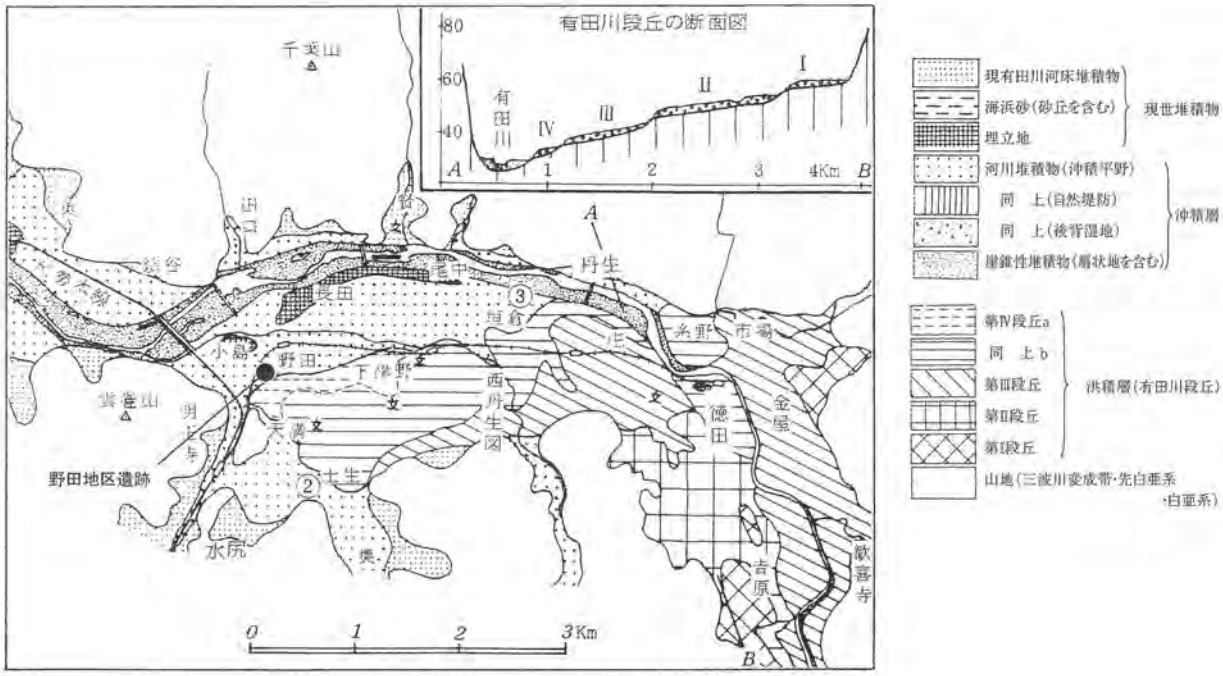


図１　周辺の地形[2]

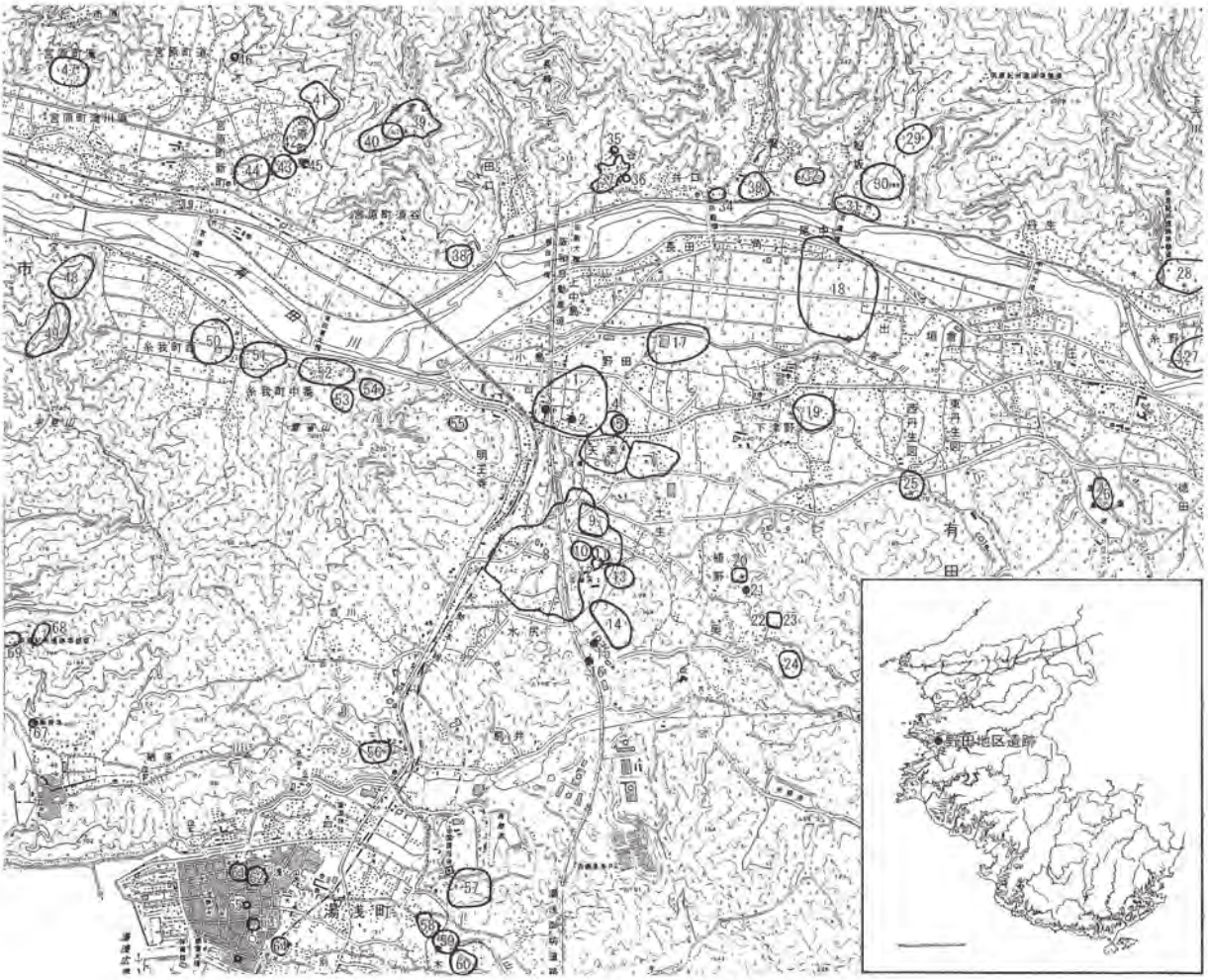


図２　周辺の遺跡（S＝1/50,000）

表２　周辺遺跡一覧（番号は図２に対応）

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	**野田地区遺跡**	**寺院跡ほか**	**先土器～中世**	24	奥Ⅰ遺跡	散布地	平安	47	多喜寺跡	寺院跡	
2	観音寺跡	寺院跡	平安～室町	25	石ヶ谷遺跡	集落跡	古墳～室町	48	崖の鼻遺跡	散布地	弥生
3	野田の宝篋印塔	石塔	南北朝	26	鷹巣池遺跡	散布地	先土器～縄文	49	星尾山遺跡	散布地	弥生
4	藤並遺跡	散布地	古墳	27	糸野遺跡	散布地	縄文	50	糸我鳥居遺跡	散布地	奈良～平安
5	天満古墳群	古墳群	古墳	28	旧成道寺遺跡	寺院跡	鎌倉	51	糸我中番遺跡	散布地	弥生
6	天満Ⅰ遺跡	集落跡	縄文～室町	29	最勝寺跡	寺院跡	平安～室町	52	糸我地蔵堂遺跡	散布地	弥生
7	天満Ⅱ遺跡	散布地	古墳、鎌倉	30	夏瀬の森祭祀遺跡	祭祀跡	弥生	53	雲雀山遺跡	散布地	弥生
8	藤並地区遺跡	散布地	先土器～鎌倉	31	夏瀬の森遺跡	散布地	弥生	54	城跡	城跡	中世
9	羽釜古窯跡	窯跡	中世	32	勝真山館跡	館跡	中世	55	小島遺跡	散布地	弥生・室町
10	城山窯後群	窯跡	古墳～平安	33	賢遺跡	散布地	奈良	56	広保山城跡	城跡	平安
11	地蔵山窯後群	窯跡	古墳～平安	34	崎山屋敷跡	館跡	鎌倉	57	湯浅城跡	城跡	中世
12	地蔵山遺跡	散布地	平安	35	大谷古墳	古墳	古墳	58	青木Ⅰ遺跡	散布地	弥生
13	風呂の谷窯跡群	窯跡	奈良～平安	36	大谷２号墳	古墳	古墳	59	青木Ⅱ遺跡	散布地	弥生
14	土生池遺跡	散布地	先土器、平安	37	築那院跡	寺院跡	平安～室町	60	青木Ⅲ遺跡	散布地	古墳
15	土生池南岸遺跡	出土地	古墳	38	田殿廃寺跡	寺院跡	奈良	61	湯浅屋敷跡	館跡	中世
16	土生池須恵器窯跡	窯跡	奈良	39	岩室城跡	城跡	中世	62	岩崎館跡	館跡	中世
17	旧吉備中学校校庭遺跡	集落跡	弥生～鎌倉	40	岩室遺跡	散布地	弥生	63	畠山館跡	館跡	中世
18	田殿尾中遺跡	集落跡	弥生～室町	41	奥の谷遺跡	散布地	弥生	64	白樫城跡	城跡	中世
19	藤並城後	城跡	鎌倉～室町	42	里神原遺跡	散布地	弥生	65	道町道標	道標	
20	長楽寺跡	寺院跡	平安～鎌倉	43	旧円満寺跡	寺院跡	奈良	66	島の内古井戸	古井戸	
21	奥Ⅱ遺跡	出土地	縄文	44	宮原上居跡	館跡	中世	67	石造宝篋印塔	石塔	室町
22	八幡神社板碑	碑	室町	45	円満寺古墳	古墳	古墳	68	明恵上人遺跡	碑	鎌倉
23	八幡神社宝篋印塔	石塔	室町	46	辻貝古墳	古墳	古墳	69	明恵上人遺跡	碑	鎌倉

る土坑群が検出された土生池遺跡[3]（14）や藤並地区遺跡[4]（８）でナイフ形石器や掻器・削器・石核などが発見されており、過去に野田地区遺跡からも石核・掻器・削器が出土している。

縄文時代の遺跡は、平野部より上流の狭小な河岸段丘上や谷あいに多く存在するが、平野部周辺では比較的少ない。草創期の遺跡として有舌尖頭器などが出土した奥Ⅱ遺跡（21）や土生池遺跡・藤並地区遺跡がある。平野の最奥部にある糸野遺跡（27）からは縄文時代後期の土器や土製耳飾が、野田地区遺跡からは後期・晩期の土器のほかに石棒が出土している。また、野田地区遺跡に隣接する天満Ⅰ遺跡[5]（６）からも後期・晩期の土器が出土している。

弥生時代前期の遺跡としては天満Ⅰ遺跡があり、遠賀川系の弥生土器と縄文土器の系譜にある突帯文土器が伴出する住居[6]が検出されている。中期には沖積平野部に田殿尾中遺跡[7]（18）が営まれるようになる。直径150m程度の環濠集落で、当地域の拠点的な集落であったと考えられている。この集落は中期末葉から後期に途絶え、後期末葉には再び集落が形成されるようになり、この間断期に対応するように岩室遺跡（39）や小島遺跡（55）などの高地性の遺跡が出現する。また、後期になると平野部においても旧吉備中学校校庭遺跡[8]（17）が活況を呈するようになる。農耕祭祀に使われたとされる銅鐸は下流域の山上から３箇所４個出土しており、有田市千田からは銅鐸とともに６個の大阪湾型銅戈が見つかっている。

弥生時代後期から継続する旧吉備中学校校庭遺跡や田殿尾中遺跡は古墳時代初頭頃には廃絶し、集落の主体は沖積地から段丘上に移り、野田地区遺跡や天満Ⅰ遺跡周辺に広く展開するようになる[9]。周辺部には古墳の数は少ないものの、隣接して４基の古墳からなる天満古墳群が築かれている。１号墳[10]（泣沢女の古墳）は終末期に築造された大型円墳で、巨石積みの横穴式石室をもつ。

奈良時代に有田川流域は、阿提（安諦・安氐）郡と称したが、大同元年（806）に「在田」に改称された。在田郡には吉備・英多などの郷があり、野田地区周辺は吉備郷に属していたと考えられる。古代の役所である郡衙は、在田郡では明らかになっていないが、これまでの調査成果などから吉備郷の野田地区遺跡周辺に存在した可能性がある。瓦や須恵器を焼成した窯跡も多く土生池窯跡[11]（16）などが明らかにされており、平野部の川向には古代在田郡唯一の田殿廃寺（38）がある。平安時代後半頃から皇族・貴族を中心におこなわれるようになる熊野参詣の道は、平野部の西側を通り、それと十字に交わる有田高野街道が平野部を横切っている。中世では野田地区遺跡で護岸を伴う溝、天満Ⅰ遺跡で和鏡や刀子を副葬した土壙墓[12]が見つかっている。このように周辺部は原始・古代より有田地方の中心的な地域であったと言える。

写真４　天満１号墳（泣沢女の古墳）

第３章　調査の方法と成果

第１節　既往の調査成果

野田地区遺跡はこれまで1980年度と1985年度に発掘調査されている。1980年度の調査は一般有料道路海南湯浅道路（現高速自動車国道松原那智勝浦線･阪和自動車道）建設に伴うもので、沖積地に相当する４区で弥生時代末から中世にかけての流路が検出され、多くの土器類や木製品が出土した。低湿地という条件から木製品の遺存状態がよく、往時の生活を復元できる資料が提示された。また、各期の流路から出土する土器は、有田地方における各種土器編年の基準資料となりうるものであった。このほか、段丘部に相当する５区・６区・７区でも中世の遺構・遺物が見つかっている。

1985年度の調査は地方改善施設整備事業の道路建設に伴うもので、1980年度の調査区（４区・５区）の西隣でおこなわれ、溝の延長部分などが確認され、中世を中心として多くの遺物が出土した。

第２節　調査の方法

１．調査区

調査区名・遺構番号は調査年度ごとに名称を与えているが、近接して同じ調査区名や遺構番号が存在することから、混乱をさけるため当報告書では新たに地区名・遺構番号を付した。各地区は、立地や現況を考慮して振り分けたもので、遺構番号はⅠ～Ⅳの調査区ごとで、できるだけ前番号を踏襲するように１から順に付した。調査区の対照表は以下のとおりである。

表３　調査区新旧対照表

本報告書	Ⅰ区		Ⅱ区					Ⅲ区		Ⅳ区	Ⅴ区
	A	B	A	B	C	D	E	A	B		
平成17年度	Ⅰ－A									Ⅱ	
平成18年度		Ⅰ	Ⅱ－１	Ⅱ－２	Ⅱ－３	Ⅱ－４					Ⅲ
平成19年度							Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ南		

２．地区割り

調査地の地区割は国土座標第Ⅵ系（世界測地系）を使用し、野田地区遺跡を網羅する範囲の北東に基点（X＝－214.0ｋｍ、Y＝－73.3ｋｍ）を設けた。この基点から西方向と南方向にそれぞれ一辺100ｍの正方形区画を１単位とした大区画を設定した。これの呼称は東西方向をＡ～Y、南北方向を１～25として、アルファベットと算用数字を組み合わせてＡ１･Ｂ２などとする。次にこの大区画を４ｍ毎に割り、東西方向をａ～ｙ、南北方向を１～25とし４ｍの正方形区画を１単位とした小区画を設定し、同大区画と同様に縦横の組み合わせでｃ３・ｄ４などとし、小区画の名称は大区画名と併用してＡ１・ｃ３、Ｂ２・ｄ４のように表す。

図３　調査区位置図（S＝1/5,000）

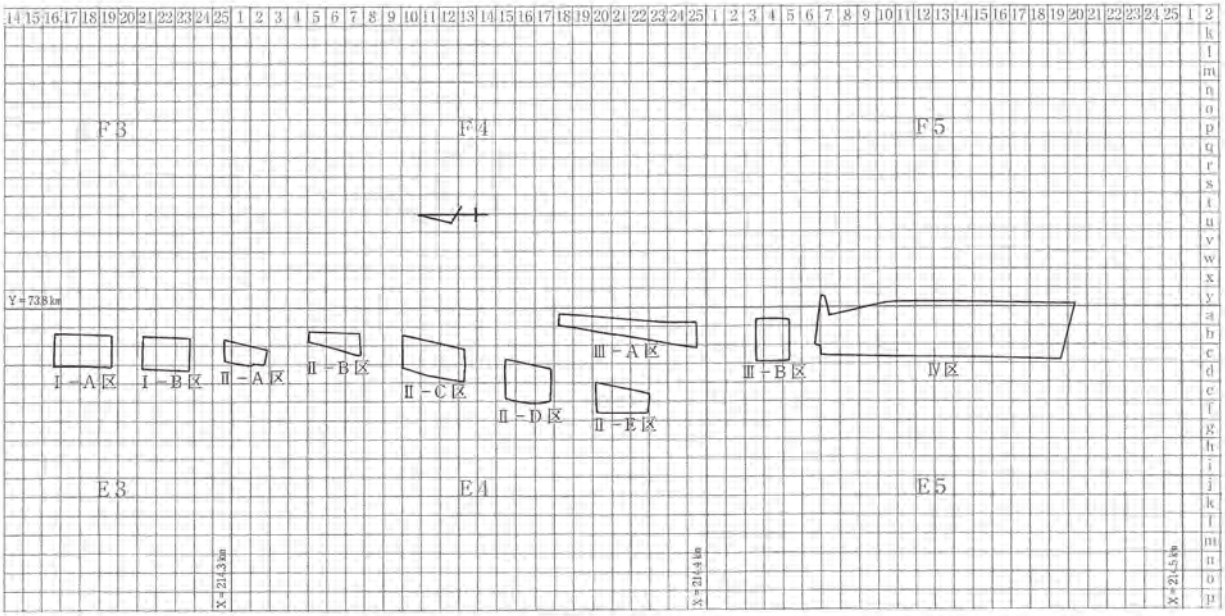


図４　調査区地区割り図（S＝1/1,600）

第３節　基本層序

調査地の立地は、大きくＩ区の沖積地とⅡ～Ⅴ区の段丘上に分けることができる。各調査区は少なくとも江戸時代以降、水田として利用されていたと考えられるが、調査時の現況はＩ区が水田からの転作畑、Ⅱ区が廃線となった有田鉄道の線路敷き、Ⅲ・Ⅴ区が住宅で、Ⅳ区のみが水田のまま利用されていた。また、Ⅱ区では昭和 28 年の 7.18 水害の時に堆積したシルトが線路脇に盛り上げられていた。

調査区のベースは段丘礫層で、Ｉ区では南端で段丘崖が検出でき、一気に落ち込んでいる。Ｉ区は、段丘礫層直上までの層位が明らかにされておらず、また、Ⅴ区も調査対象地から除外されたことから、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区の基本層序として説明をおこなう。ただ、３つの調査区の北端と南端では約 200 m隔たることもあって、各区共通の同色・同質の層序を抽出することが困難なので、各区の代表的な断面を提示することで、基本層序としたい。

これらの調査区では、ベースである段丘礫層は一様な高さでは検出できず、周辺には浅い開析谷がひだ状に展開していると考えられる。谷状地形となる箇所には、江戸時代以降の水田がかさ上げされながら営まれたことが、数多く存在する水田面から窺うことができる。耕作土下の２層は、シルト（粘土）層が厚く重なるⅣ区南以外で確認できる。３層は中世包含層でⅡ区北側にのみ存在し、Ⅱ－Ｄ区では、３層を４つに分層することができる。検出したほとんどの遺構は、３層の下面に掘削されていることになる。4・5層はⅢ－Ａ区の南でのみ確認している整地層で、３層との前後関係は明確でない。６・７層は中世の遺物を少量含むが、これらの層位の下面で検出できる遺構は少ないが、唯一Ⅲ－Ａ区南で、６・７層下面で遺構を検出している。８・９層は

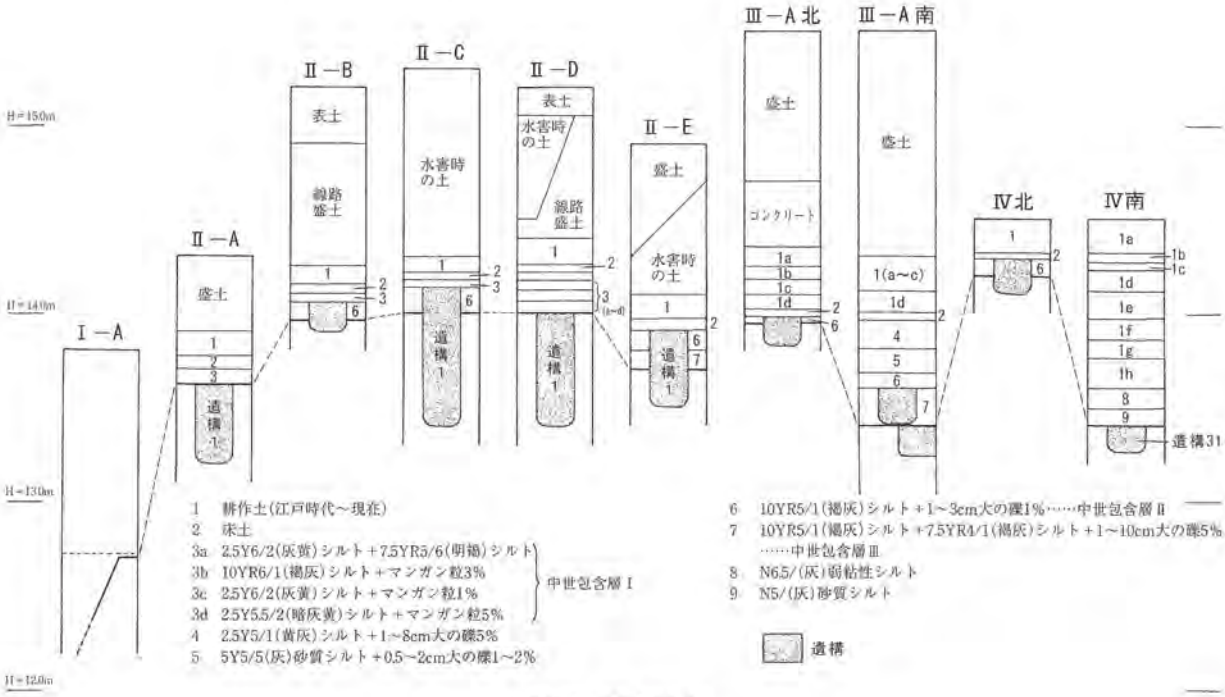
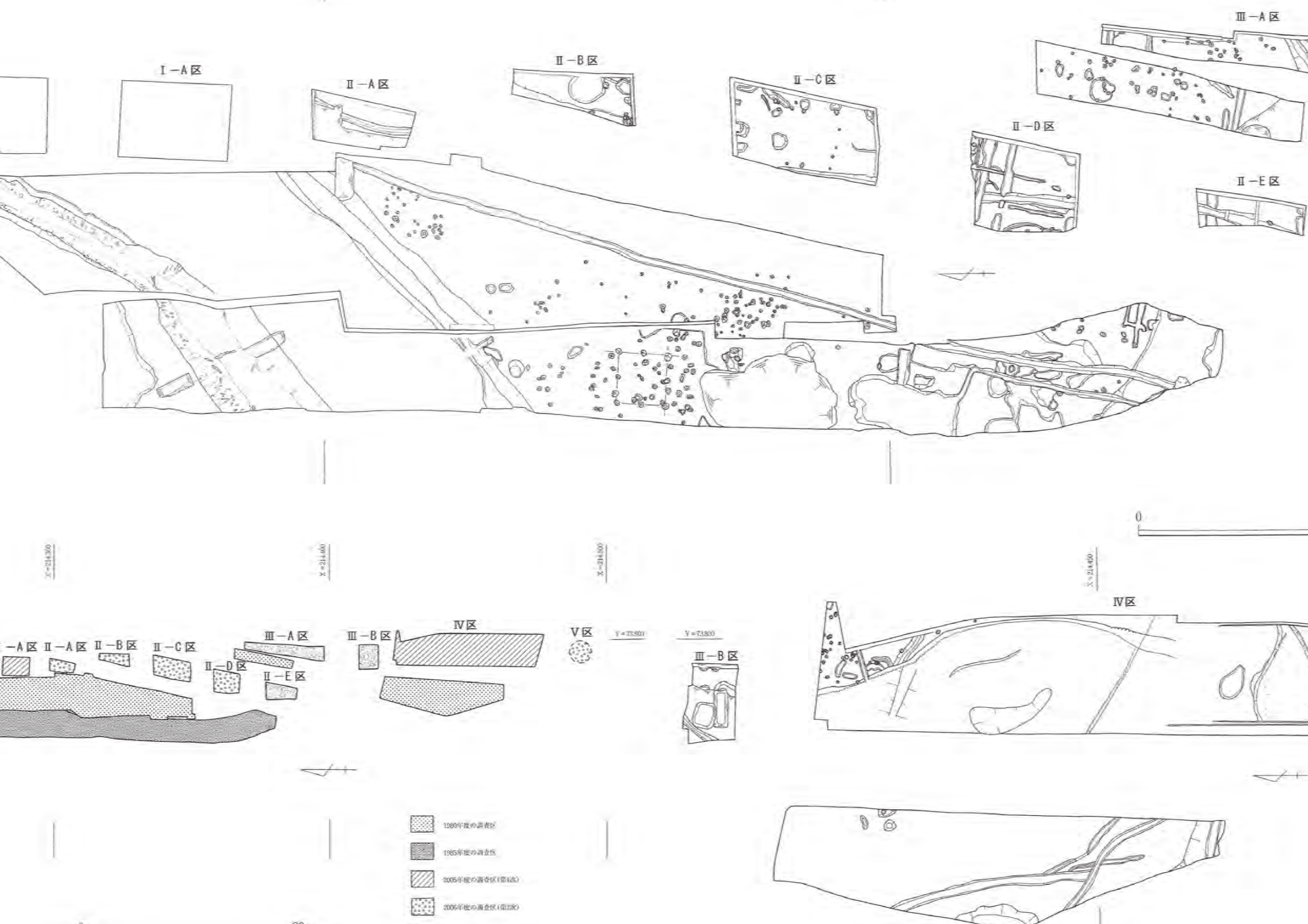


図５　基本層序


Ⅰ－A区
Ⅱ－A区
Ⅱ－B区
Ⅱ－C区
Ⅱ－D区
Ⅱ－E区
Ⅲ－A区
Ⅲ－B区
Ⅳ区
Ⅴ区
X＝214,300
X＝214,400
X＝214,500
X＝214,450
Y＝73,800
Y＝73,900
0
1980年度の調査区
1985年度の調査区
2005年度の調査区（第1次）
2006年度の調査区（第2次）

中世の遺物を含み、Ⅳ区南でのみ確認しているが、低地部分の堆積層と考えられる。これらの層位の下で、やはり中世の遺構を検出している。

第４節　遺構と遺物

１．Ⅰ区

一番北側の調査区で、第１次調査のⅠ－Ａ区がそのままⅠ－Ａ区で、第２次調査のⅠ区がⅠ－Ｂ区となる、調査区のほとんどは沖積地で、Ⅰ－Ａ・Ｂ区とも南東隅でわずかに段丘崖が確認できる。1980 年度の調査で古墳時代前期から中世にかけての流路が検出され、多くの土器や木製品が出土した４区の東隣に位置する。調査前の現状は水田からの転作畑で、地表面は標高約 13.8m を測る。地表以下、段丘面が確認できる標高 12.8 m付近までは近世以降の堆積層となっているが、周囲を矢板で囲った中での調査で、この間の層を機械で掘削し、断面も残せなかったことから、層序は記録できていない。

検出した遺構には溝３条、土坑１基があるが、狭い範囲内の調査であることから遺構の一部分を検出したにとどまる。

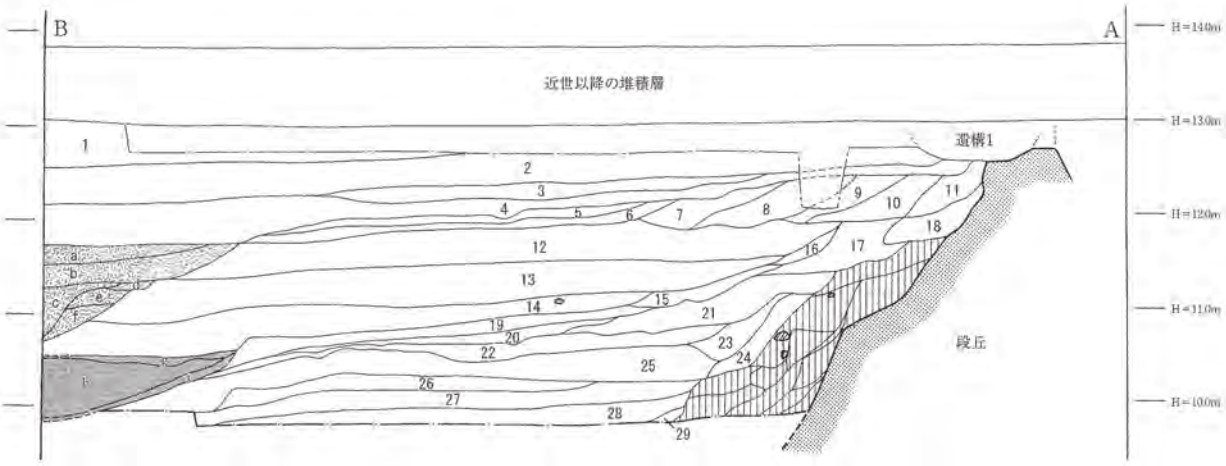
なお、検出した遺構で溝状のものに関しては、自然流路あるいは自然流路に手を加えたもの、当初から人工的に掘削したものに係らず、すべて溝として記述する。また、庄内式期は弥生時代末とするが、この時期、弥生土器と土師器の区別ができないことから、庄内式併行期の土器と理解されるものについてはすべて古式土師器とし、文章・一覧表では土師器として記述する。

（Ⅰ）Ⅰ－Ａ区

堆積層の掘削　（図７～12、図版２・３・11～14）　第１層上面で遺構１を検出後、それより以下を層位ごとに分けて掘削し、遺物を分別するとともに、遺構検出をおこなった。掘削方法は、調査区の対角線を結ぶように北西－南東方向のトレンチを先行して掘削し、層序を確認しながら１層単位で掘り下げをおこなった。

第１層は江戸時代の遺構１のベースになり、しかもⅠ－Ｂ区で 16 世紀初頭頃を下限とする遺構５の上部を覆うことから、第１層は中世末頃の層であると考えることができる。遺物として土師器土釜（６）が出土している。第２～６層は瓦器椀（７・10）・皿（８）、土師器皿（９・11・12）・白磁碗（13）などを含み、おおよそ 12～14 世紀の堆積層であると考えられる。第７～11 層はほぼ同じ厚さをもち、とりわけ第７・８・11 層はブロックがはいる均一な層ではないことからも、護岸などの盛土であった可能性がある。第 12 層上面は若干の凹凸はあるものの、ほぼ同じレベルで続いており、この面で鎌倉時代の遺構２・３を検出した。

第 12～14 層は厚く堆積する層で、第 14 層を取り除いた第 19 層の上面で遺構４を検出している。第 12 層以下は古墳時代中期以前の遺物を包含し、第 12 層で土師器、須恵器高杯（14）などが、



無遺物層

遺構4

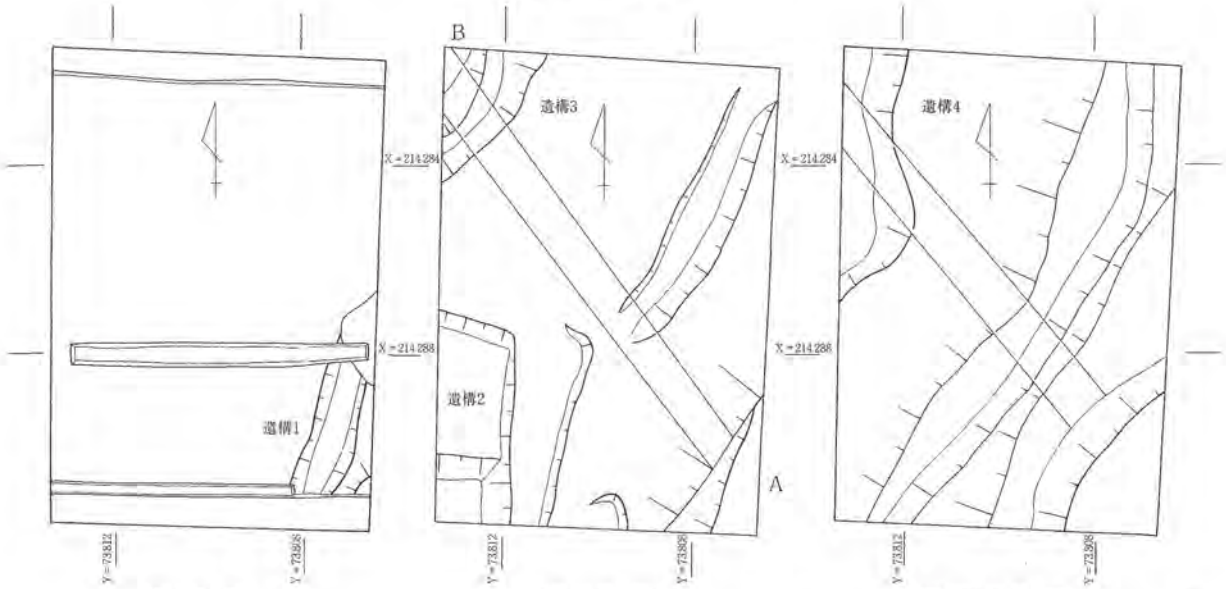
遺構3

1. 5G2/1(緑黒)粘質シルト
2. 10YR3/1(黒褐)粘質シルト　1～3cmの礫をわずかに含む
3. N3/(暗灰)粘質シルト　粗砂、1～3cmの礫を含む
4. N3/(暗灰)粘質シルト　1～3cmの礫を含む
5. N2/(黒)粘質シルト　1～3cmの礫をわずかに含む
6. 2.5GY3/1(暗オリーブ灰)粘質シルト
7. 2.5GY3/1(暗オリーブ灰)粘質シルト＋砂礫(φ～20cm)
8. 5Y4/2(灰オリーブ)粘質シルト80%＋5Y3/1(オリーブ黒)粘質シルト20%
9. 5Y4/1粘質シルト
10. 2.5GY2/1(黒)粘質シルト
11. 10Y4/2(オリーブ灰)粘質シルト50%＋N3/(灰)粘質シルト50%
12. 7.5Y3/2(オリーブ黒)シルト
13. 10Y3/2(オリーブ黒)シルト　やや粘性あり
14. 10Y3/1(オリーブ黒)シルト　やや粘性あり
15. 7.5Y3/1(オリーブ黒)粘質シルト
16. 2.5GY3/1(暗オリーブ黒)粘質シルト
17. 7.5Y2/1(黒)粘質シルト
18. N3/(灰)粘質シルト＋砂礫(φ～5cm)
19. 2.5GY3/1(暗オリーブ灰)粘質シルト
20. 2.5Y2/1(黒)粘質シルト
21. 2.5Y2/1(黒)粘質シルト　φ～3cmの砂礫多い
22. 7.5Y4/1(灰)粘質シルト
23. 10YR2/1(黒)粘質シルト
24. 10YR1.7/1(黒)粘質シルト
25. 2.5Y3/1(黒褐)粘質シルト
26. 2.5Y3/1(黒褐)細砂
27. 10YR3/1(黒褐)細砂混じりシルト
28. 10YR3/1(黒褐)粘質シルト　有機物多い
29. 10YR2/1(黒)シルト＋10Y4/1(灰)砂　下部はラミナ状となる

遺構3
a. 7.5Y2/1(黒)粘質シルト
b. 7.5Y2/1(黒)粘質シルトと砂が互層になる
c. 7.5Y2/1(黒)細砂
d. 5Y3/1(オリーブ黒)粘質シルト
e. 7.5Y4/1(灰)砂混じり粘質シルト

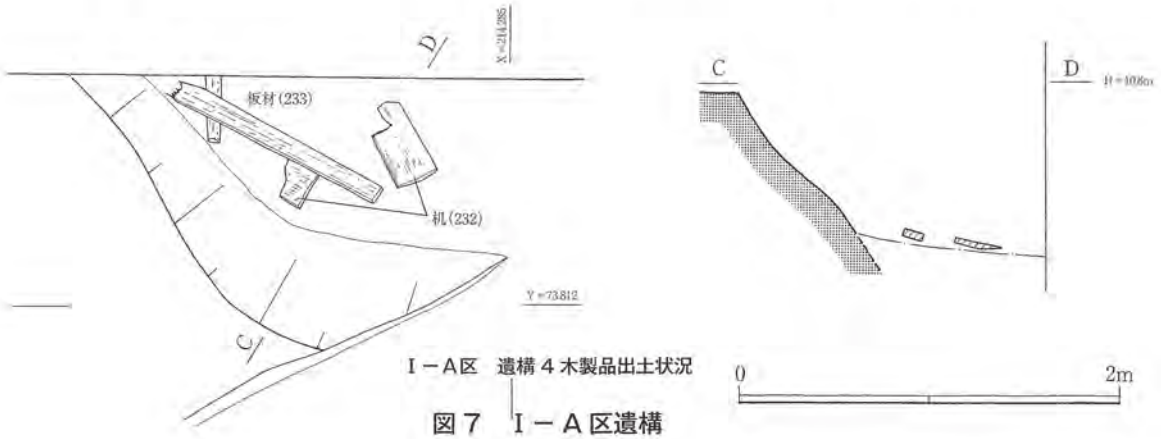
遺構4
f. 5Y3/1(オリーブ黒)粘質シルト
g. 7.5Y3/1(オリーブ黒)粘質シルト
h. 粗砂(1mm前後)
i. 2.5Y3/1(黒褐)粘質シルト　有機物多い

Ⅰ－A区土層断面図



(第１層上面)　(第12層上面)　(第19・21層上面)

Ⅰ－A区検出遺構



Ⅰ－A区　遺構４木製品出土状況

図７　Ⅰ－A区遺構

遺構１：１　遺構４：３～５
遺構３：２
堆積層出土遺物
第１層：６　第２層：７　第３層：８・９
第４層：10～13　第12層：14
第13層：15～21　第14層：22～28
0
20cm

図８　Ｉ－Ａ区出土遺物（１）

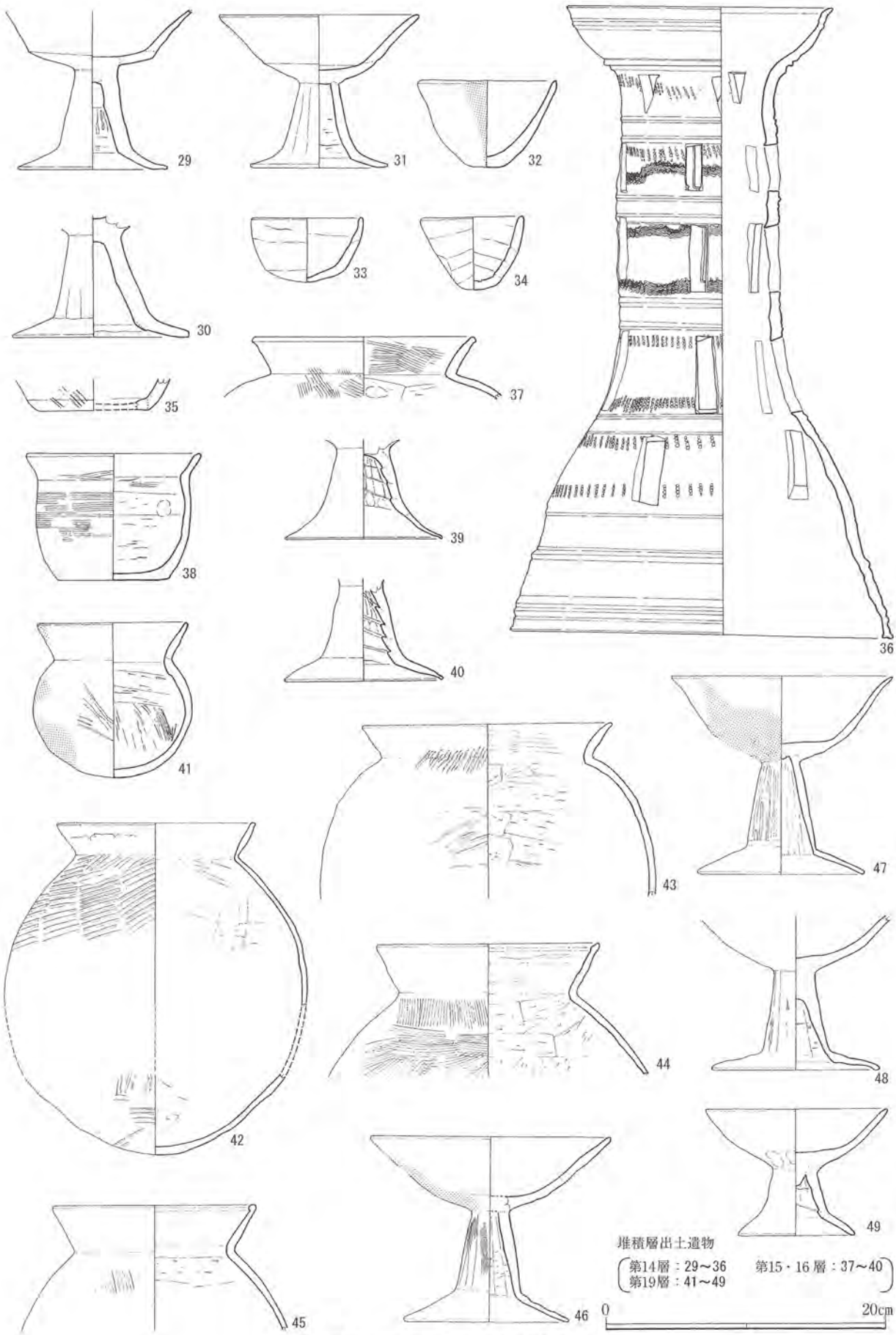

29
31
32
30
33
34
35
37
38
39
36
40
41
43
47
42
44
48
45
46
49
堆積層出土遺物
第14層：29～36
第19層：41～49
第15・16層：37～40
0
20cm

図９　Ⅰ－Ａ区出土遺物（2）

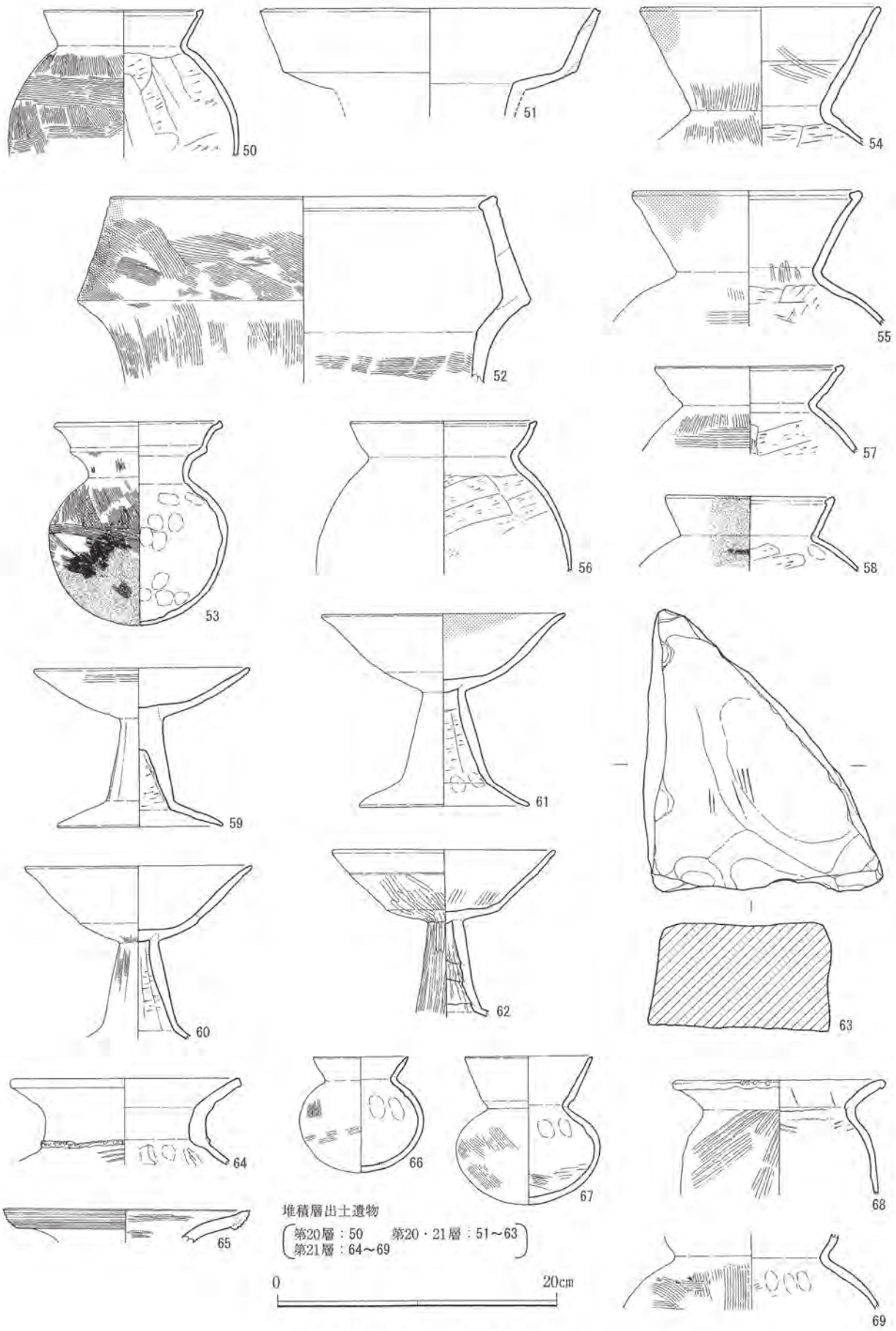


図 10　Ⅰ－A区出土遺物（3）

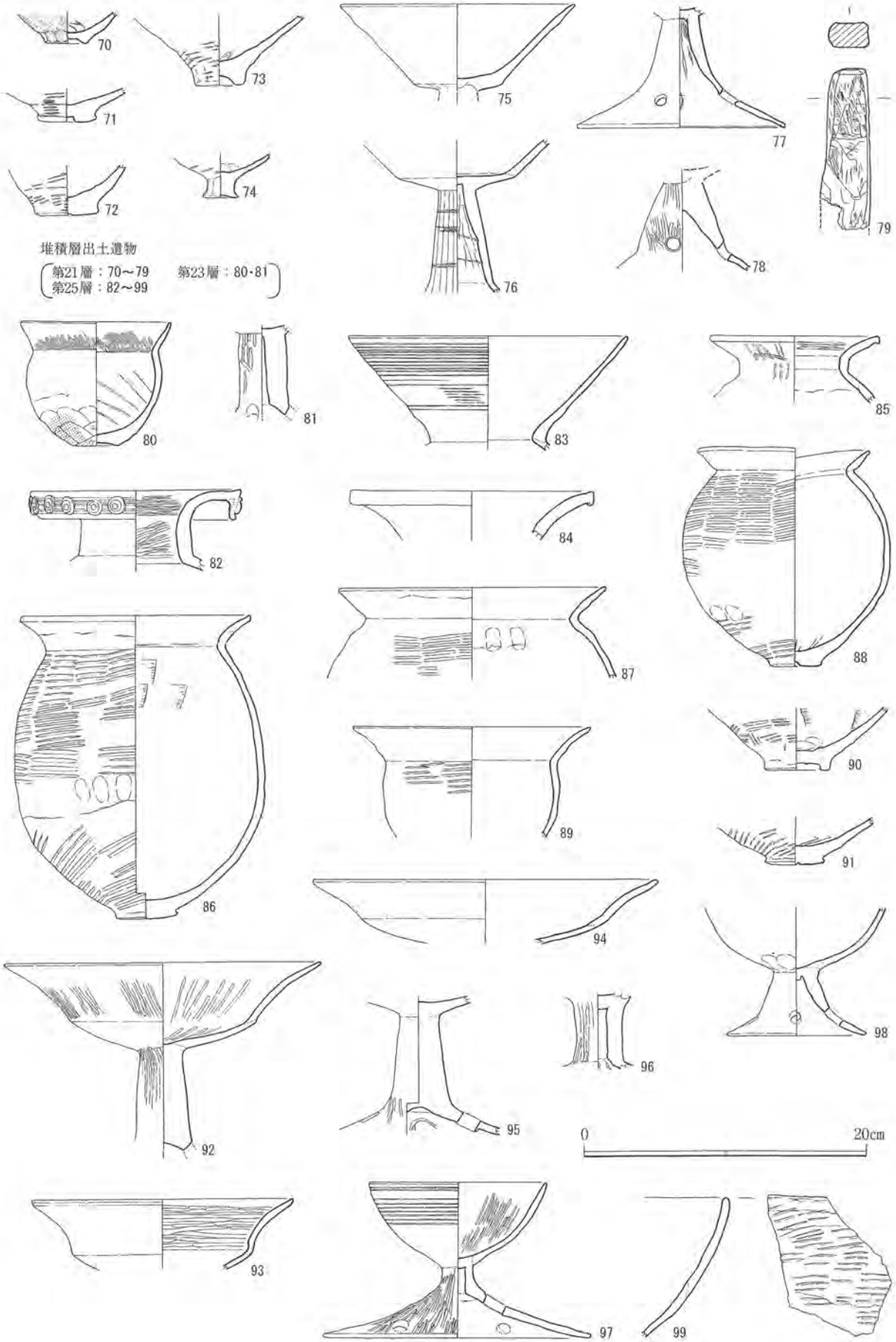


図11　Ⅰ－A区出土遺物（4）

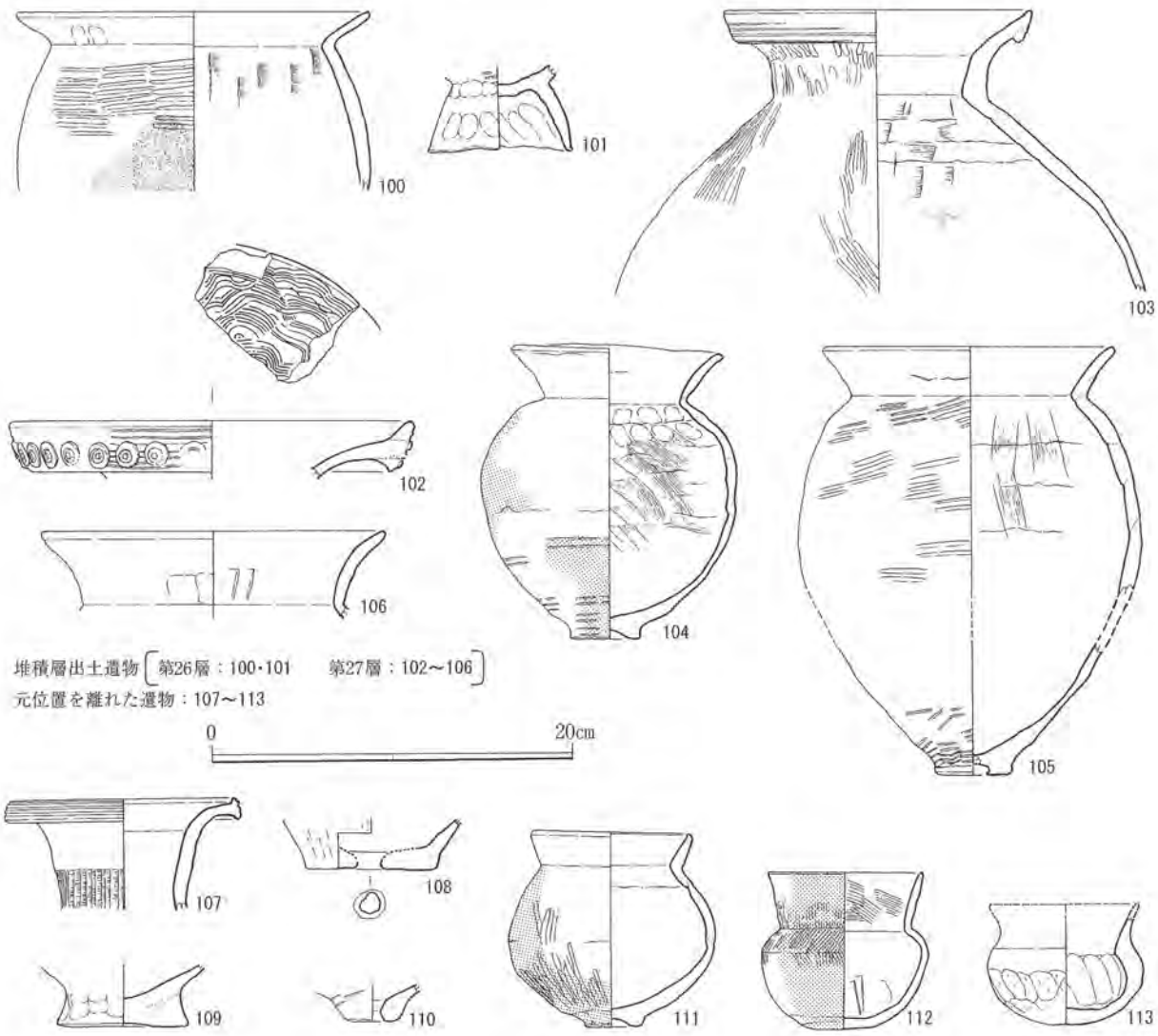


図 12　Ⅰ－A区出土遺物（5）

第 13 層で土師器壷（15）・甕（16）・高杯（17 ～ 19）、須恵器高杯（20・21）が、第 14 層で土師器壷（22）・小型丸底壷（23）・甕（24 ～ 27）・鉢（28）・高杯（29 ～ 31）・ミニチュア土器鉢（32 ～ 34）、韓式系土器鉢（35）、陶質土器器台（36）が出土する。第 13・14 層は土器の出土量が多く、そのなかにほぼ完形のものもみられる。第 15・16 層は直上・直下の層に比べ遺物量が少ないものの、土師器甕（37）・高杯（39・40）、韓式系土器鉢（38）などが出土する。第 19 ～ 21 層では布留式甕の出土が顕著で、遺物量も多く、小型品に完形に近いものが散見できる。また、第 21 層では庄内式併行期の土器も一部混在している。第 19 層の遺物としては土師器壷（41）・甕（42 ～ 45）・高杯（46 ～ 49）が、明確に第 20 層としておさえることができる土師器には甕（50）がある。第 20・21 層として取り上げた遺物には、土師器壷（51 ～ 55）・甕（56 ～ 58）・高杯（59 ～ 62）、砥石（63）が、第 21 層の遺物には土師器壷（64・65・70）・小型丸底壷（66・67）・甕（68・69・71 ～ 73）・高杯（75 ～ 78）・製塩土器（74）・砥石（79）がある。

第22層は遺物をほとんど含まない層で、この層を境に土器の様相が大きく変わり、第23～27層では庄内式併行期の土器を多く含む。第23層では土師器鉢（80）・高杯（81）が、第25層では土師器壷（82～85）・甕（86～91）・高杯（92～98）・大型粗製鉢（99）などが出土する。また、第26層では土師器甕（100）・台付甕（101）が、第27層では土師器壷（102・103）・甕（104～106）が出土している。

第28・29層はトレンチのみで確認している層で、安全面を考えて全面的に掘削していない。部分的にラミナ状を呈することからも、流れる過程で堆積した層であると考えられ、遺物の包含についても明らかでない。

各層から出土する遺物の多くは、段丘崖に近い方で出土しており、段丘面から投棄あるいは転がり落ちた状況を示すものと考えられる。

遺構1（図7・8、図版3） 段丘と沖積地の境を北東－南西方向に流れる溝である。幅1.0 m、深さ0.4 mで、長さ3.8 m以上を測る。第1層を切り込んでおり、遺物は近世の天目碗（1）などが出土している。1980年度調査時に5区で検出している溝SD－2の延長部である可能性がある。

遺構2（図7、図版3） 第12層上面で検出したもので、西と南側が調査区域外となる。検出した部分の平面プランは長方形を呈し、長軸は南北方向で、長さ4.2 m以上、幅2.0 m以上を測る。南側は一段深くなり、深さが0.6 mである。遺物は土師器椀が出土している。

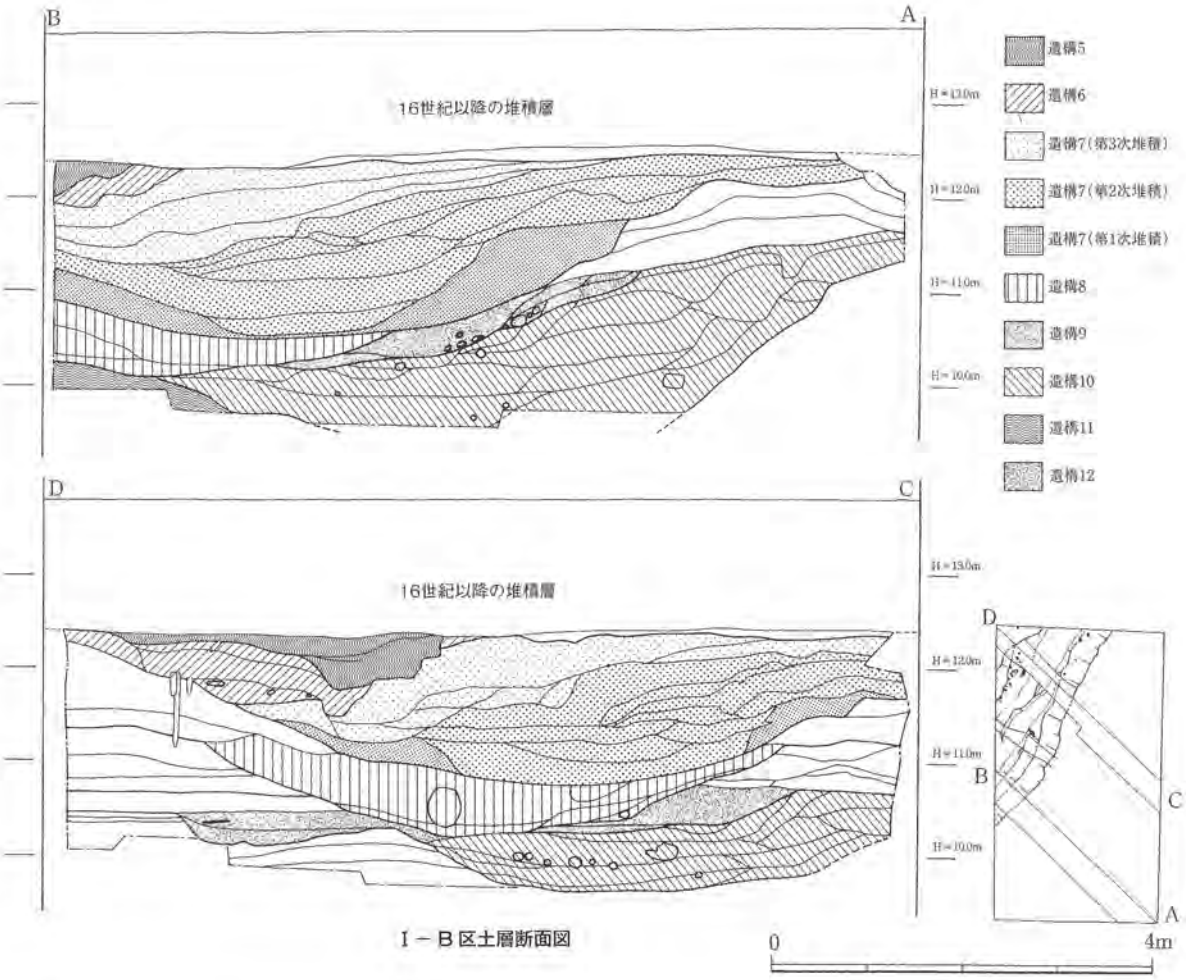
遺構3（図7・8、図版3） 第12層上面で検出したもので、調査区北西隅で落ち際の一部分（長さ2.8 m）を確認した。南東から北西方向に落ち込むもので、深さは1.0 mを測る。遺物は瓦器椀（2）・土師器などが出土しており、Ⅰ－B区の遺構7と繋がる可能性がある。

遺構4（図7・8・20、図版3・18） 第19層上面で検出した。調査区の北西隅でその一部分、長さ4.7 mを確認した。東から西に向かって落ち込むもので、深さは約0.8 m以上を測る。遺物は布留式期の土師器高杯（3・4）や陶質土器の可能性もある須恵器壷（5）のほか、木製品として机（232）、板材（233）などが出土している。Ⅰ－B区の遺構10と繋がる可能性が高い。

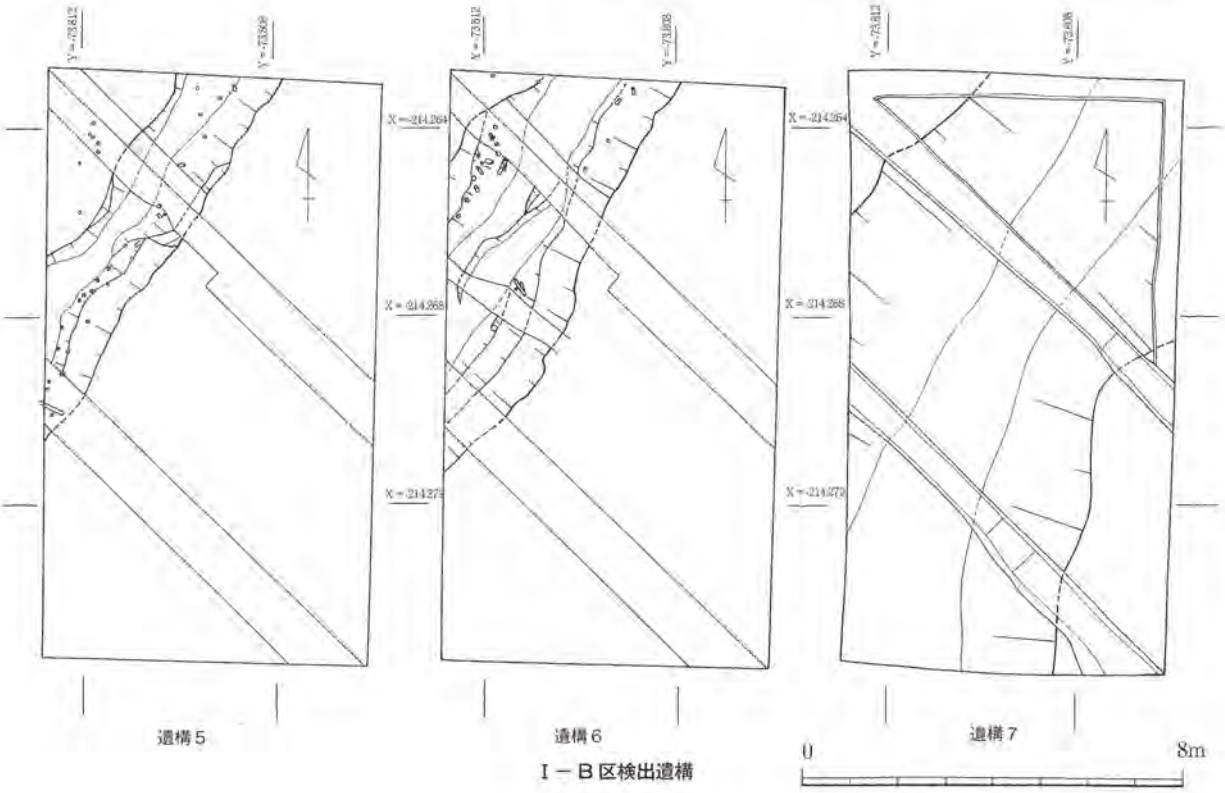
（2）Ⅰ－B区

既往の調査の結果から、狭い範囲内で溝が重層し平面での検出が困難であることが予想できたことから、想定できる溝の方向に直交するように2本のトレンチを先行して掘削し、それに基にして掘り下げをおこなった。検出した遺構は溝7条（遺構5～11）、土坑1基（遺構12）である。

遺構5（図13・15、図版4） 第1層を除去した段階で、標高約12.4 m付近で検出した溝である。調査区の北西隅を斜めに横切り、幅約3.6 m、深さ約0.6 mで、延長約9.5 mを確認している。両肩には護岸のため打ち込まれた杭列が存在する。遺物は土師器皿、瓦器椀、備前焼壺・擂鉢（115）、青磁皿・碗（114）が出土している。擂鉢は上層から出土し、乗岡編[13]年中世5期bに相当するこ



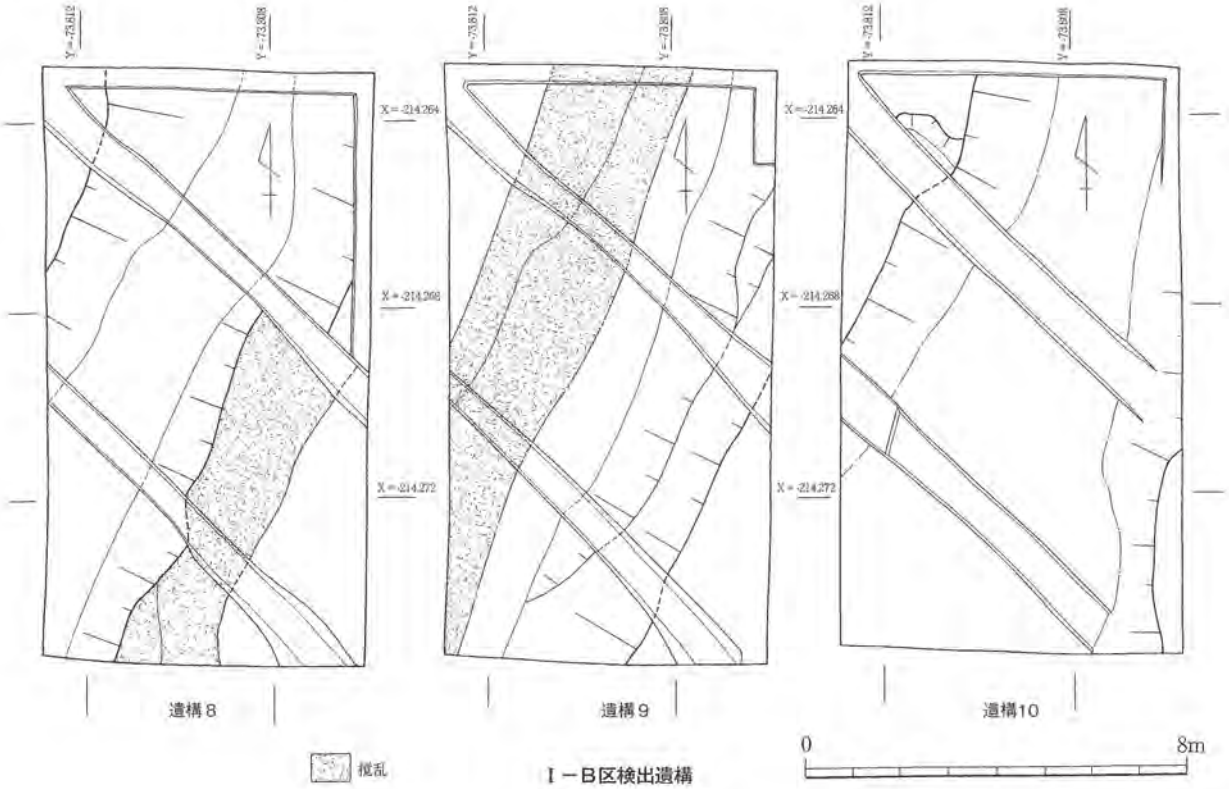
Ⅰ－Ｂ区土層断面図



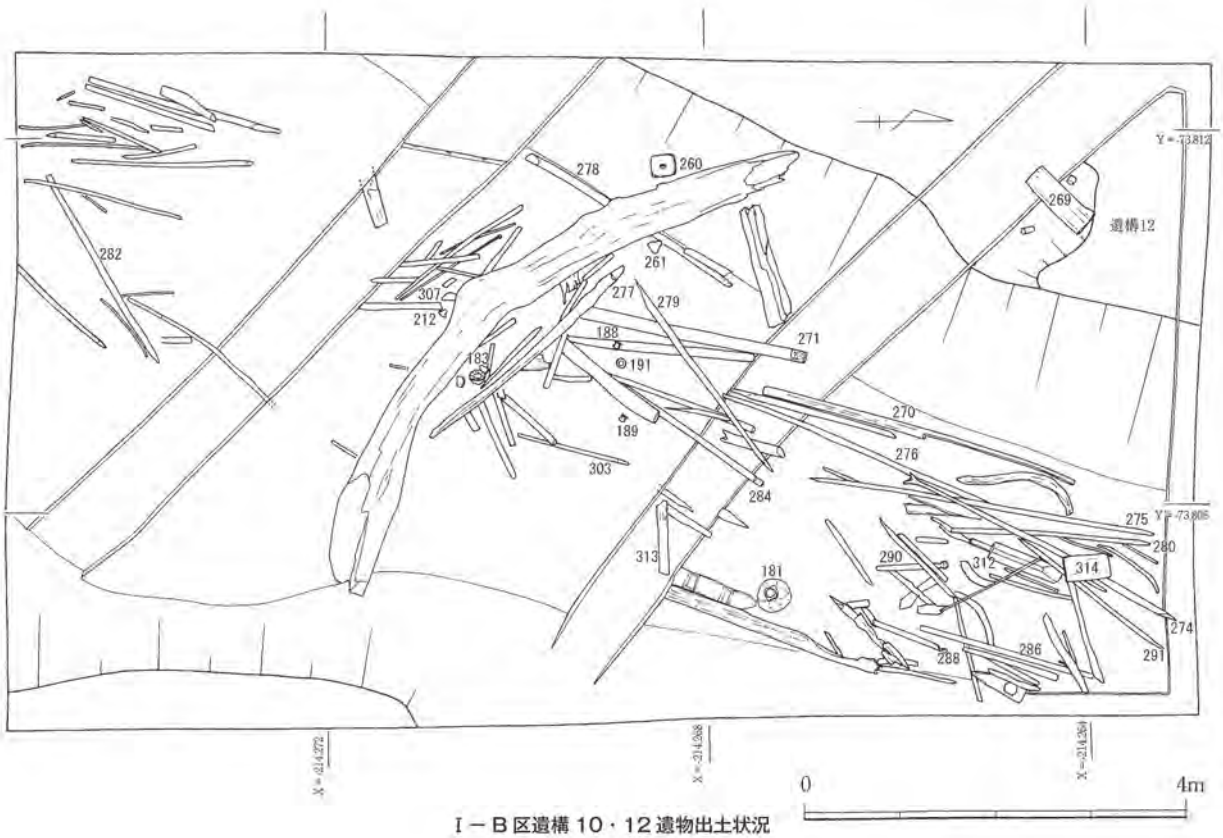
Ⅰ－Ｂ区検出遺構

図 13　Ⅰ－Ｂ区遺構（1）

とからも、おおよそ15世紀代に機能していた溝と考えられ、1980年度の調査で検出されている4区溝SD－1の延長部であると想定できる。



Ⅰ－B区検出遺構



Ⅰ－B区遺構10・12遺物出土状況

図14　Ⅰ－B区遺構（2）

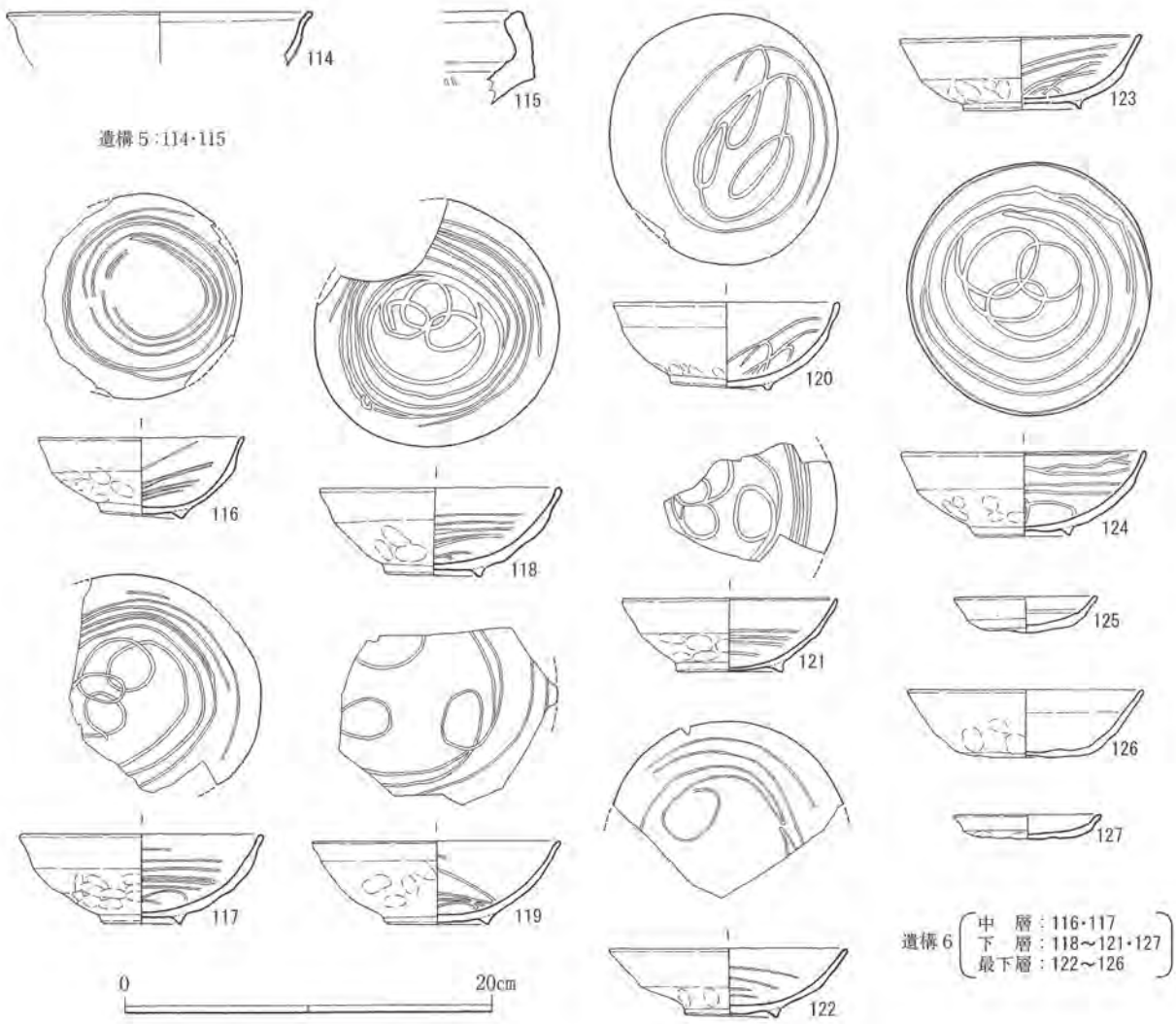


図15　Ⅰ－B区出土遺物（1）

遺構6（図13・15・20、図版4・14）　第1層を除去した段階で、遺構5と重複する状態で検出した溝である。調査区の北西隅を斜めに横切り、幅約4.2 m、深さ約0.8 mで、延長約10.0 mを確認している。両肩には護岸のため打ち込まれた杭列が存在する。溝の中位以下は水の流れを示す、シルト・微砂・礫の互層となっている。遺物は瓦器椀（116～124）・皿（125）、土師器皿（126・127）、瓦質土器甕、瓦などのほか、木製品としてちゅう木の可能性もあるヘラ状木製品（234・235）が出土している。瓦器椀は直径が11～13cmで、内面の暗文は連結輪状と同心円状のものがあり、時期差が認められるものの、おおよそ鎌倉時代後半代の遺物群である。1980年度の調査で検出されている溝SD－2、1985年度の調査で検出した溝SD－1の延長部に比定できる。ただ、1980年と1985年の調査では笹塔婆や位牌などの仏教関係の遺物が多く出土しているものの、今回の調査ではまったく出土していない。このことはそれらの遺物が溝内に投棄あるいは流れ込んだ場所が、前回の調査区付近であったことを示唆するものであろう。

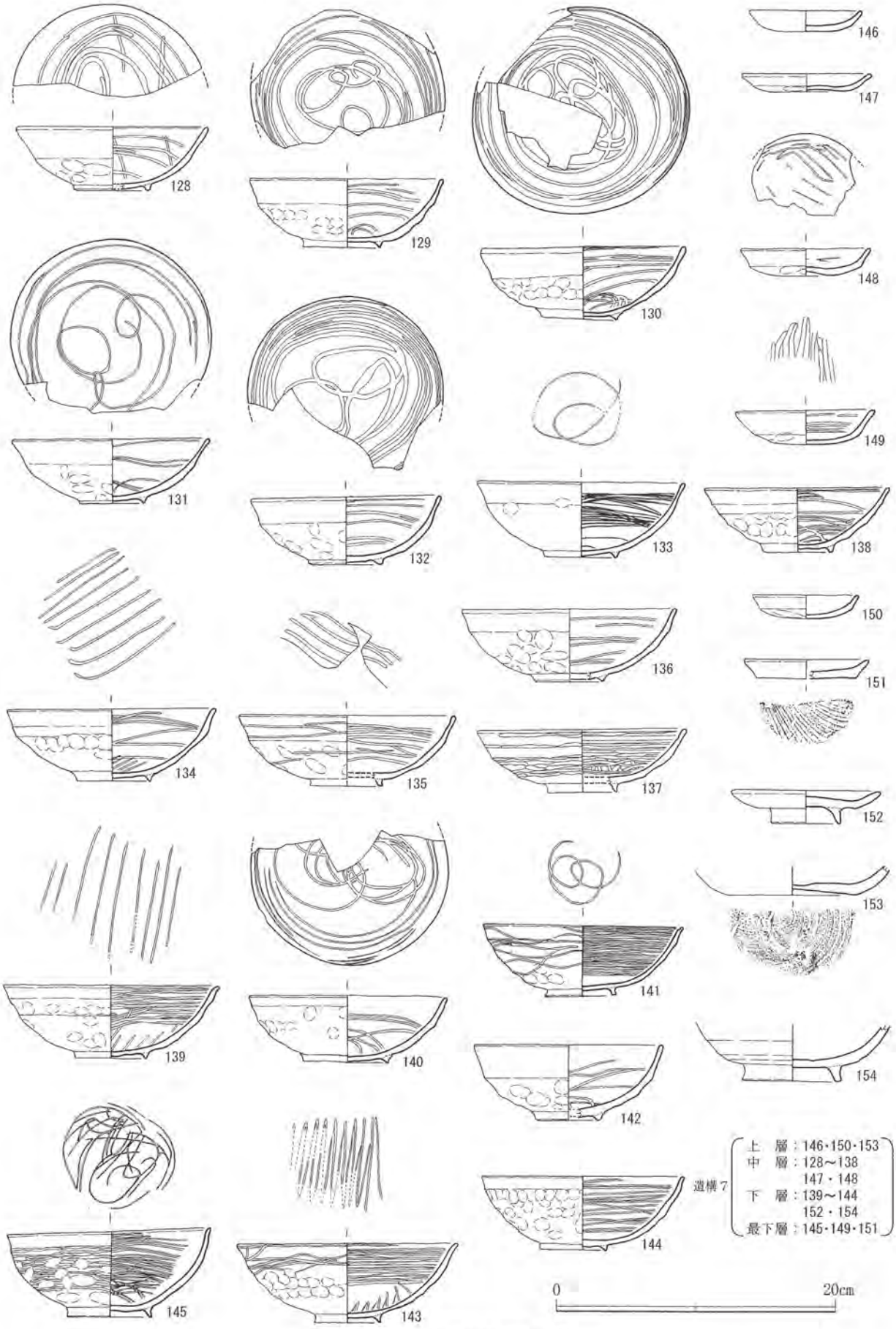


図 16　Ⅰ－B区出土遺物（2）

遺構７（図13・16・17・20、図版４・14・15・18）　調査区を斜めに横切る溝で、大きく３時期の流れを認めることができる。別々の遺溝として認識することも可能であるが、同一の溝であると考えられる1980年度調査の溝SD－３との整合性を考えて一つの遺構として扱っている。また、Ⅰ－Ａ区で検出した遺構３と同一である可能性が高い。遺構７の第１次堆積層は遺構５・６より0.6ｍ下位に肩口があるが、第２次堆積層、第３次堆積層と肩口のレベルは高くなっており、第３次堆積層では遺構５・６と同じ近世の堆積層を除去した段階で肩口が検出できる。規模は第１次のもので幅約7.0ｍ、深さ約0.8ｍで、延長約14.5ｍを確認している。遺物は瓦器椀（128～145）・皿（146～149）、土師器皿（150～153）・椀（154）・羽釜（155）、東播系須恵器捏鉢（156）、白磁碗（157）、青磁碗（158）、国産陶器や小刀（159）などのほか、木製品としてちゅう木の可能性もあるヘラ状木製品（236･237）、漆椀（238）、曲物（239～241）、横槌（242）、箸状木製品（243）、木針（244）などがある。遺物の取り上げは、第１次堆積層が最下層、第２次堆積層の下部が下層、第２次堆積層の上部が中層、第３次堆積層が上層としておこなっている。

瓦器は直径約13.5～15.0cmで、内面の暗文は連結輪状のものと見込み部を分割するものがあり、外面ミガキもあるものとないものがあるなど時期幅が認められ、おおよそ11世紀末頃から13世紀前半頃の溝であると考えることができる。

遺構８（図14・17・21・22、図版５・６・15・16・18・19）　遺構５・６の検出面より約1.0ｍ下がったところが遺構８の切り込み面となる。調査区を斜めに横切るように流れる溝で、幅約6.0ｍ、深さ約1.0ｍで、延長約14.5ｍを確認している。南側では上部を遺構７によって大きく削平されている。遺物は上部の埋土から11世紀末頃の瓦器椀（160）が出土しているが、遺構７からの混入の可能性もある。流れを示す堆積の中・下部では瓦器は出土せず、黒色土器椀（161・162）や土師器椀（163・164）・杯（165）・皿（167～170）・台付皿（166）などが出土する。これらの土器から遺構８の機能していた時期は、おおよそ11世紀代と考えることができ、1980年度の調査で確認している４区溝SD－４あるいは５に相当すると考えられる。土器以外の遺物としては木製品が多く出土しており、曲物（245～249）、横槌（251・252）、下駄（253）、犂（254～257）、不明木製品（250）などがある。

遺構９（図14・17・23、図版５・６・16・19・20）　検出面は遺構８より更に下位となる。調査区を斜めに横切る溝であるが、上部のほとんどを後世の溝によって削平されているため、東肩を検出したに留まる。規模は幅3.5ｍ以上、深さ約1.0ｍで、長さ約14.5ｍを確認している。遺物は土師器椀（171）・杯（172・173）・皿（174）、須恵器杯蓋（177・178）・杯身（175・176・179）・高杯（180）、黒色土器などの土器類のほか、横槌（258）、桧扇（259）などの木製品が出土している。古墳時代から平安時代の遺物が混在しており、1980年度の調査区で検出している溝SD－６あるいは溝SD－７に相当すると考えられる。

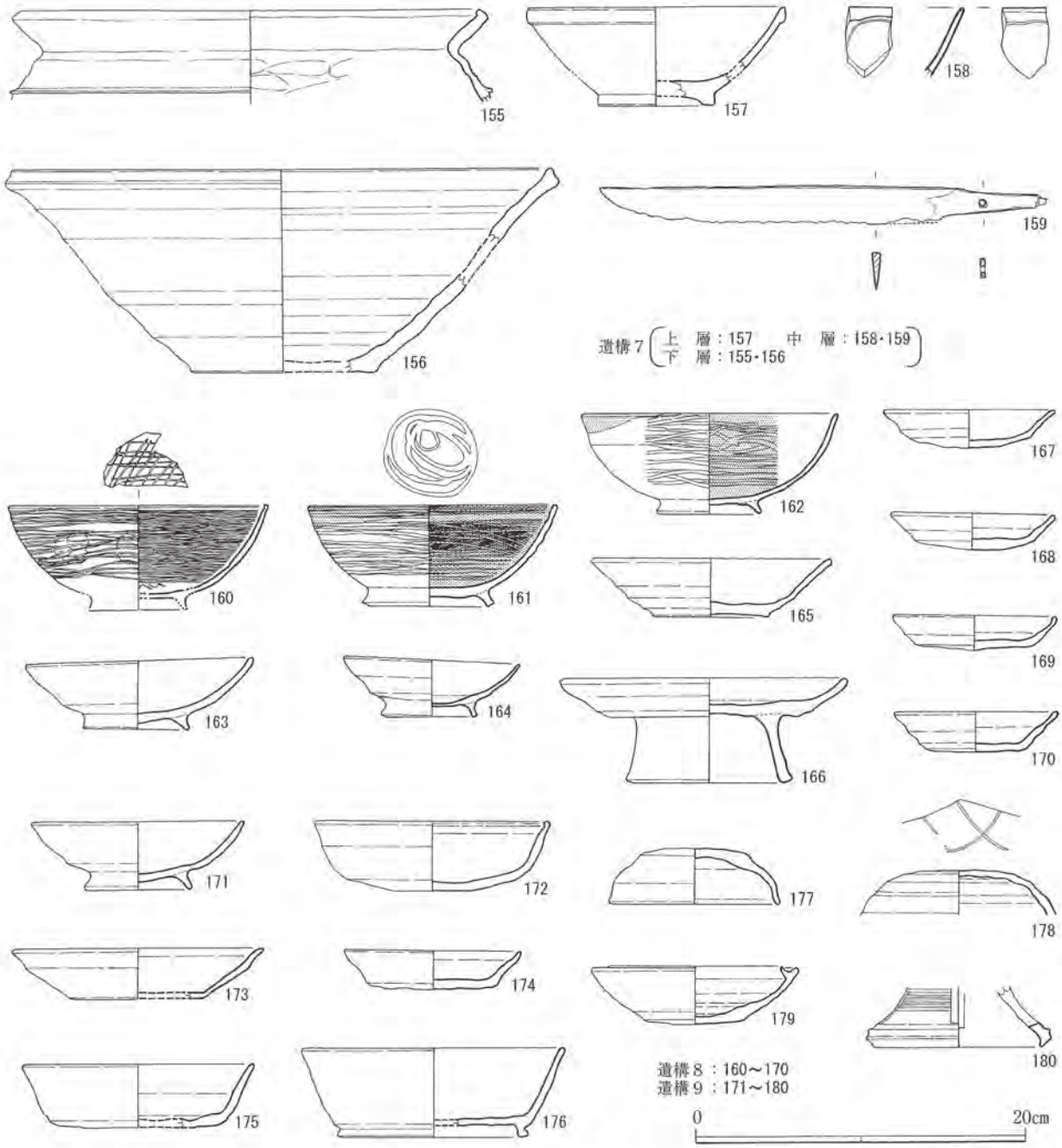


図17　Ⅰ－B区出土遺物（3）

遺構10（図14・18・19・23～30、図版5・6・16・17・20～22）　北側での検出面は標高約10.5mであるが、南側は段丘崖がそのまま溝の肩となっており、検出面とすればかなり高い位置となる。ほぼ南北方向に流れる溝で幅約7.5m、深さは段丘肩から計測すると1.8m以上を測る。長さは約13.0m確認しており、1980年度の調査区で検出している溝SD－9に相当すると考えられ、Ⅰ－A区遺構4と同一である可能性が高い。遺物のうち土器では布留式期の土師器壺（181～187）・小型丸底壺（188～197）・甕（198～204）・鉢（205）・台付鉢（206）・高杯（207～214）・ミニチュア土器鉢（215）・製塩土器（216）、韓式系土器甑（217・218）が出土する。木製

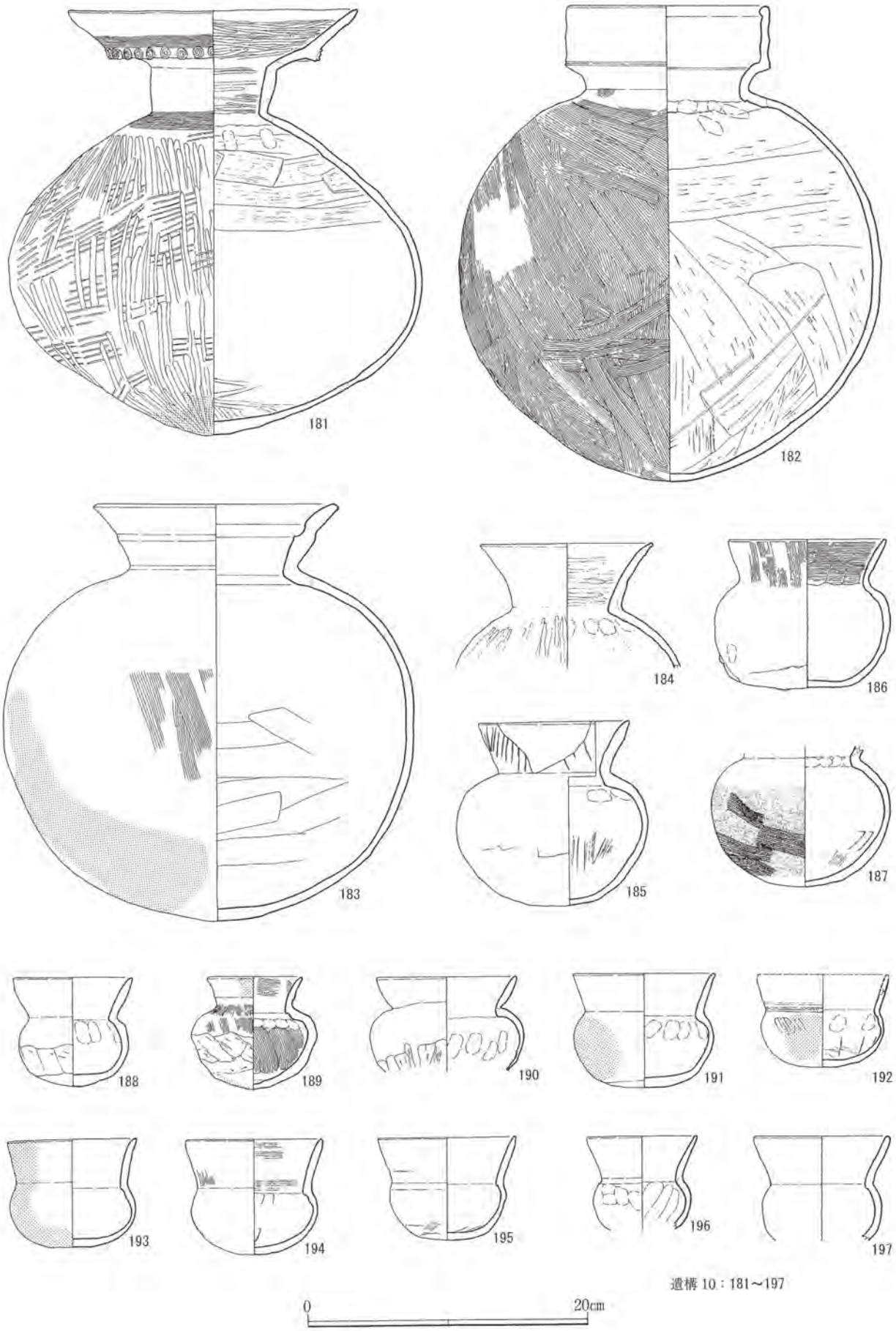


図 18　Ⅰ－B区出土遺物（4）

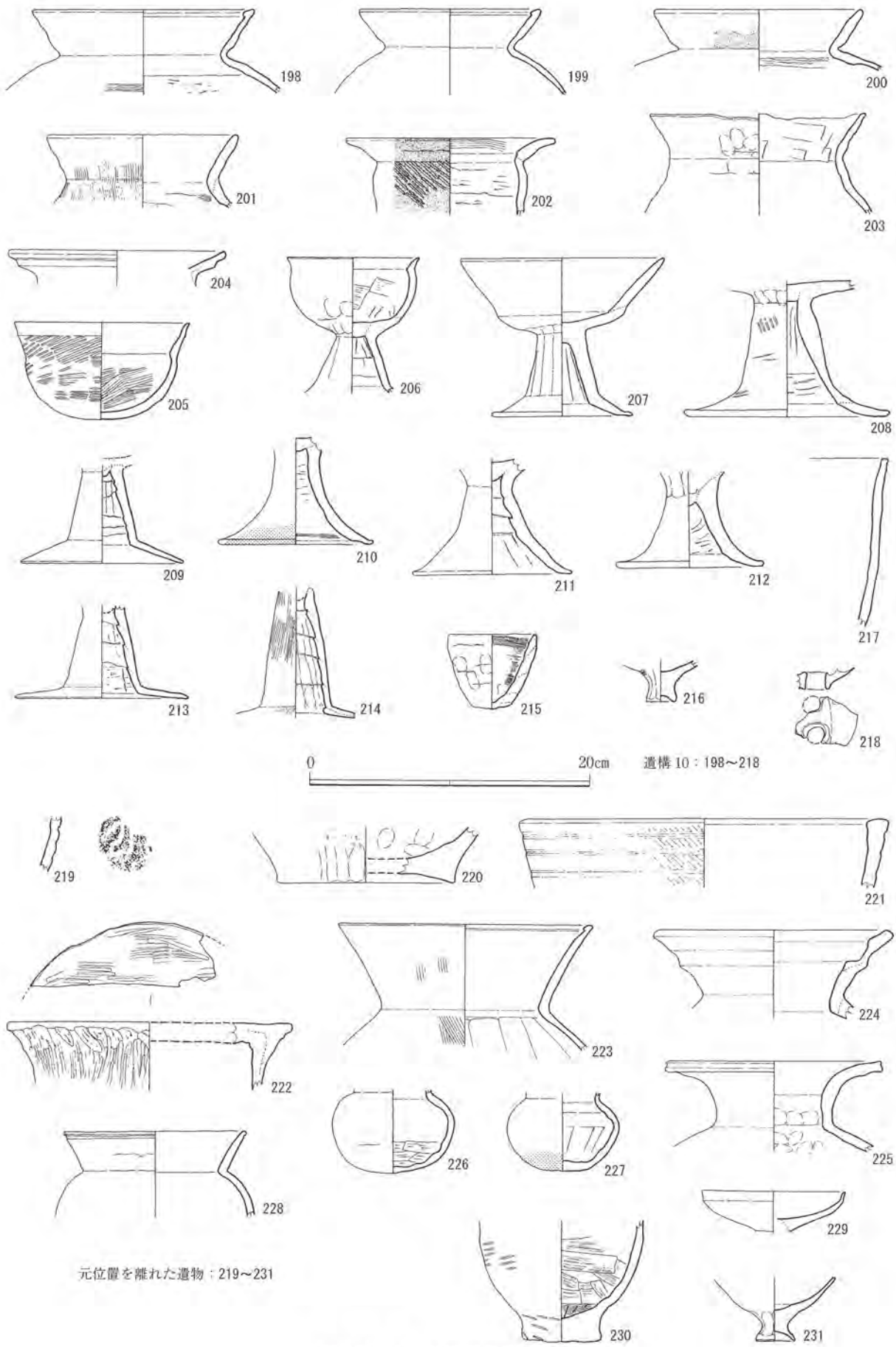


図19　Ⅰ－B区出土遺物（5）

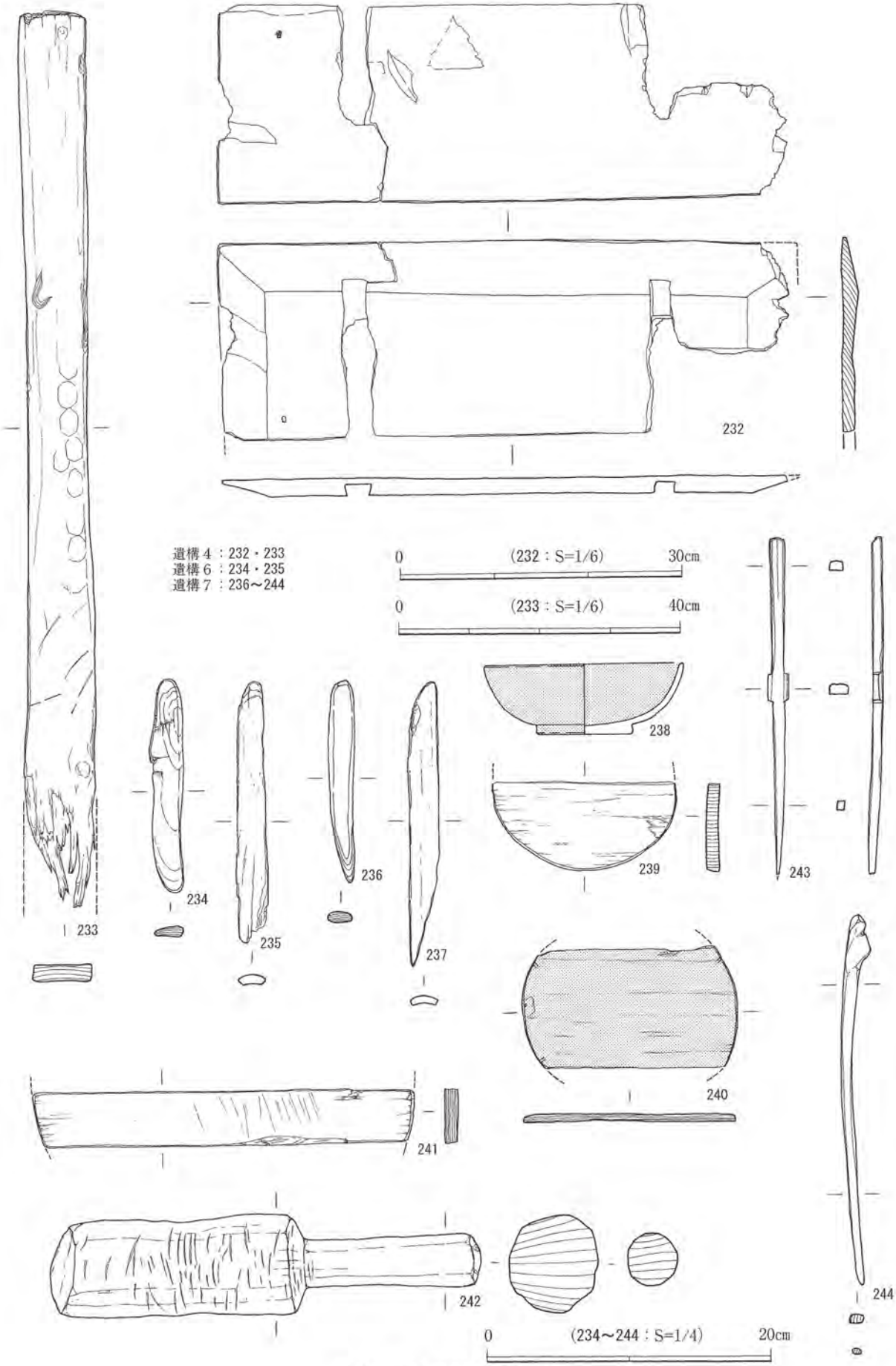


図 20　Ⅰ区出土木製品（1）

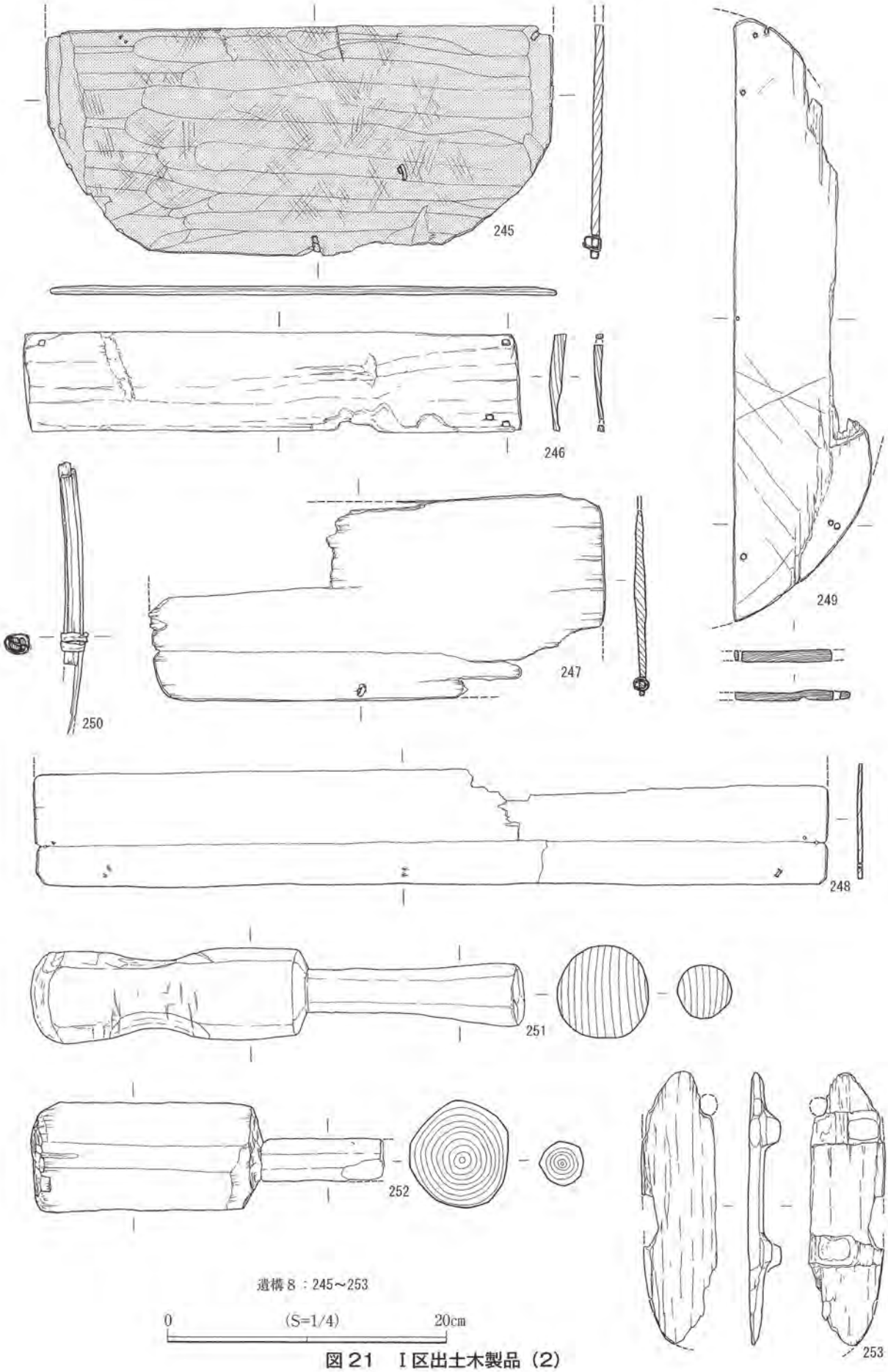


図21　Ⅰ区出土木製品（2）

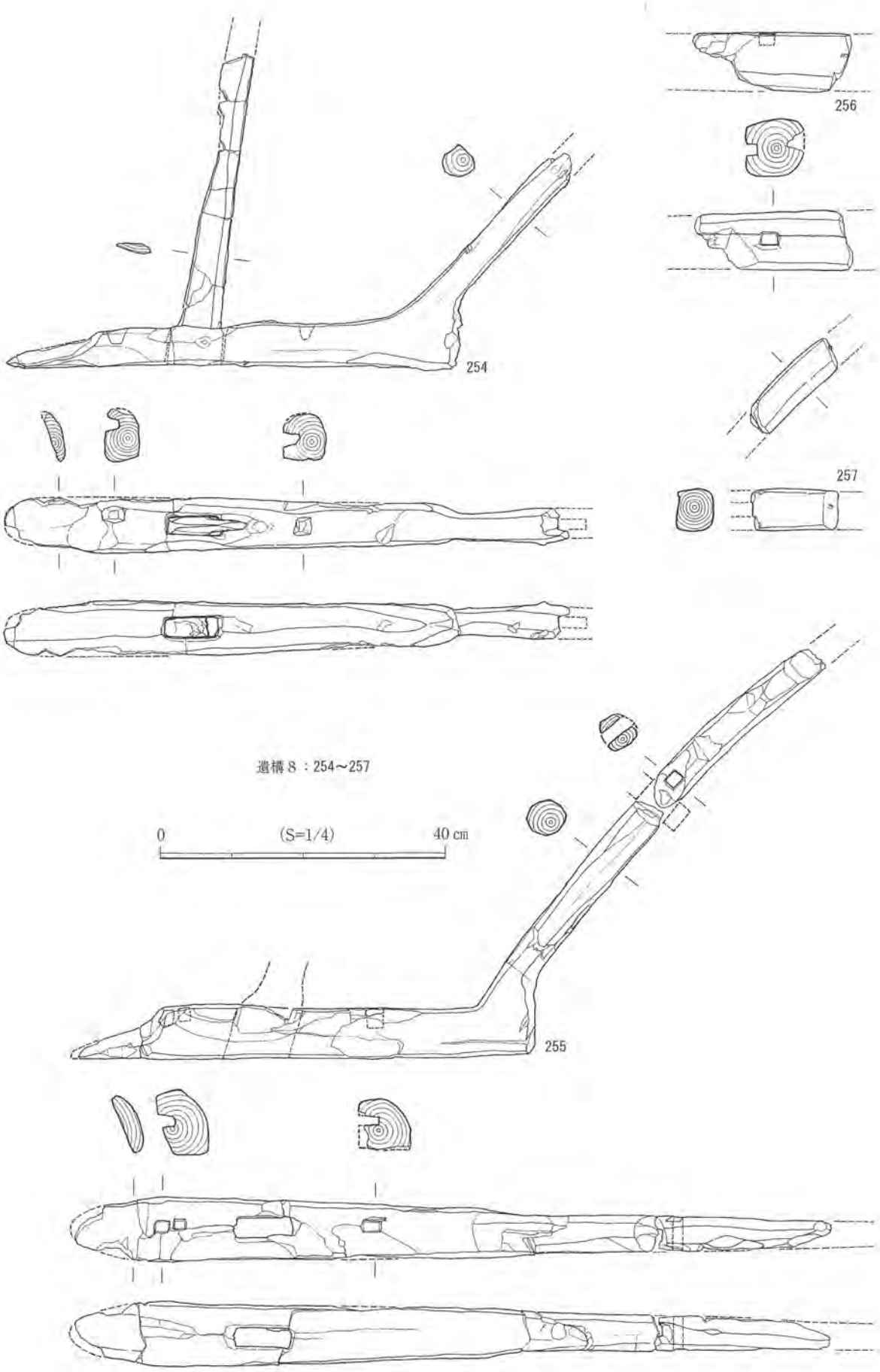


図 22　Ⅰ区出土木製品（3）

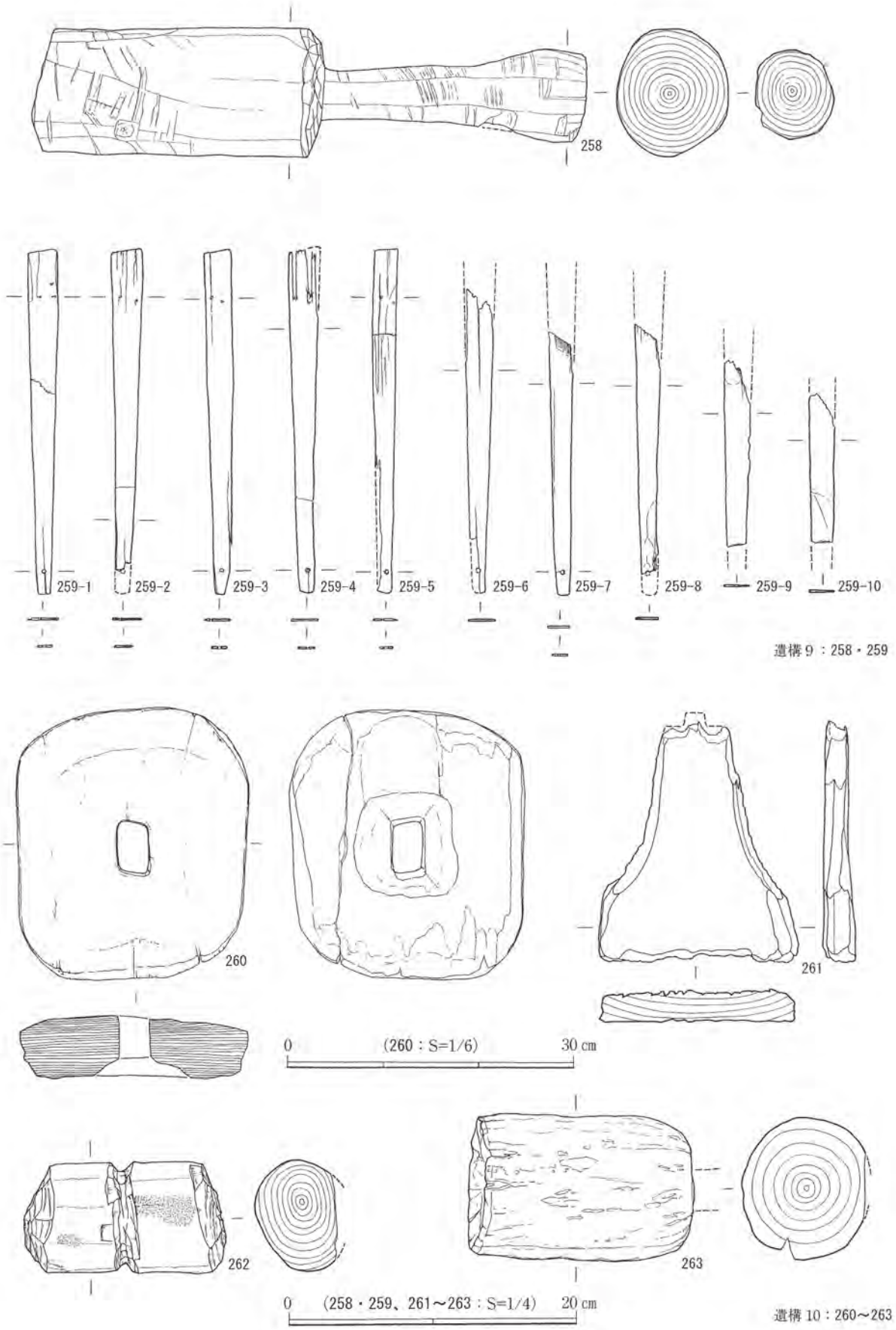


図23　Ⅰ区出土木製品（4）

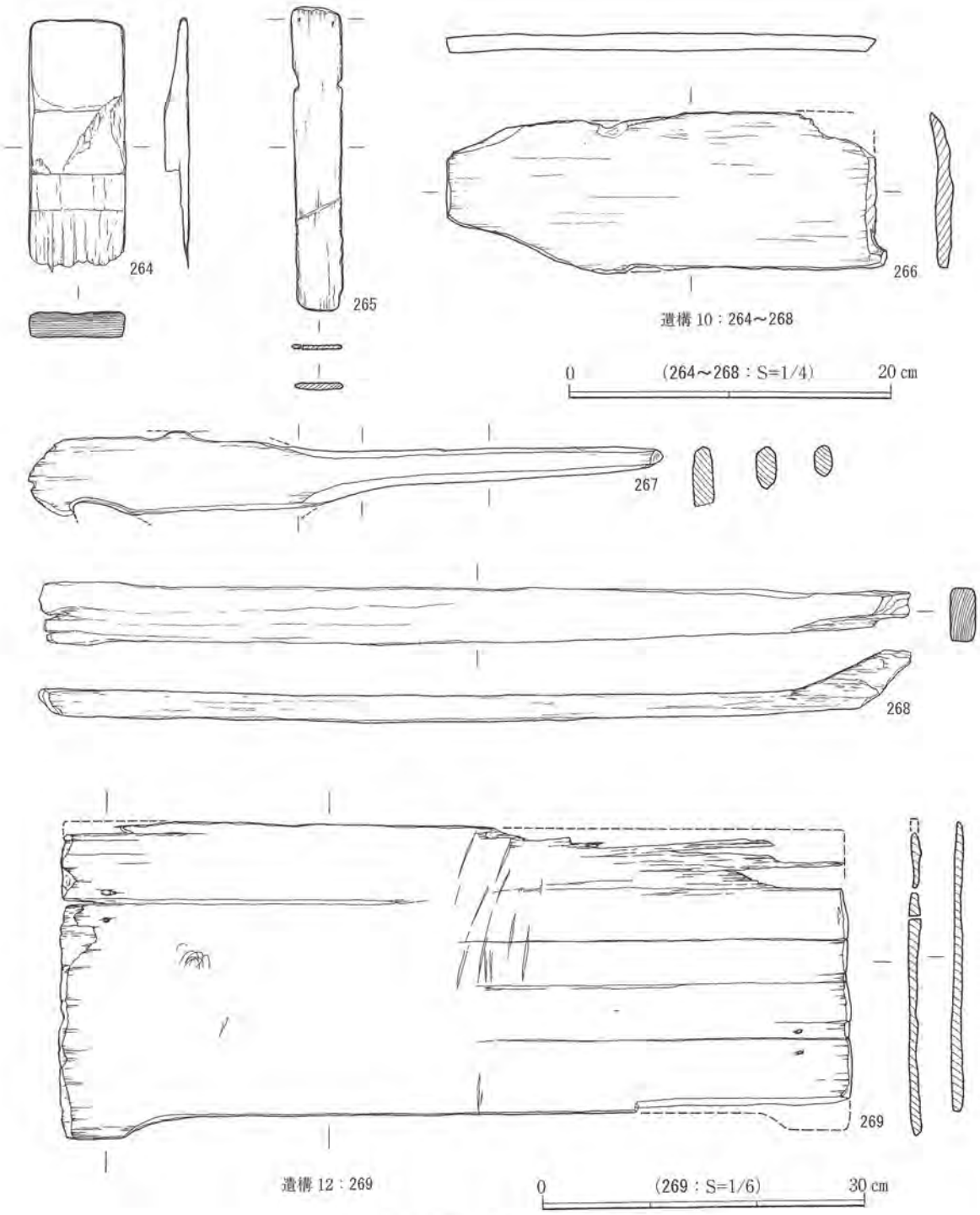


図 24　I 区出土木製品（5）

品としては柱・垂木・小舞などの建築部材（270 ～ 312）、梯子（313）、タタリの台（260）、椅子の脚（261）、木錘（262）、横槌（263）、木槽（268）、用途不明木製品（264 ～ 267）、板材（314）、製作途中と考えられる丸太材（315）・みかん割り材（316・317）・半截材（318）などがある。

遺構 11　調査区の南側において遺構 10 の下位で確認している溝で、そのほとんどを遺構 10 によって削平されている。検出面が標高 10m 付近で、周囲に巡らした鋼矢板の安全値以下に遺

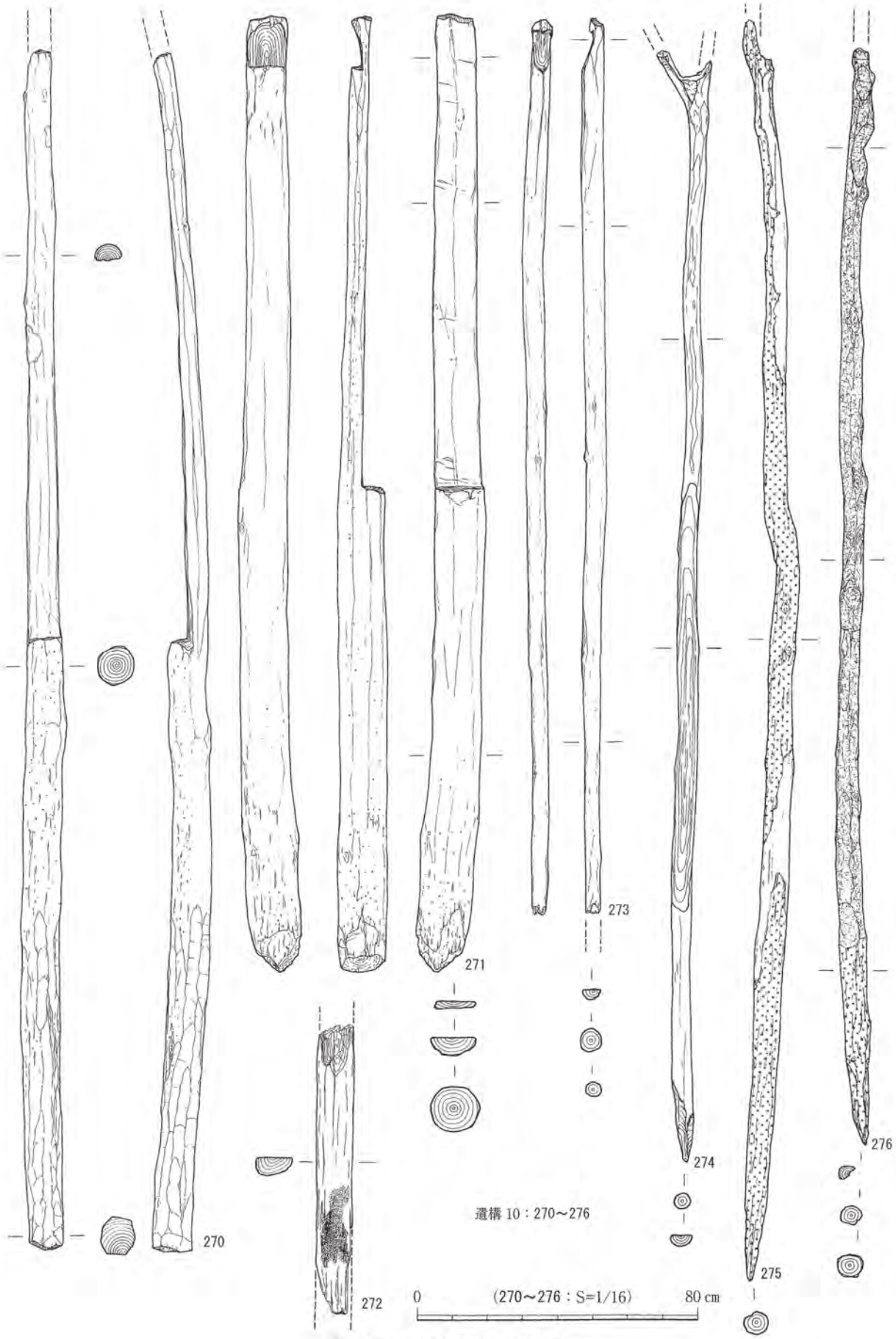


図 25　Ⅰ区出土木製品（6）

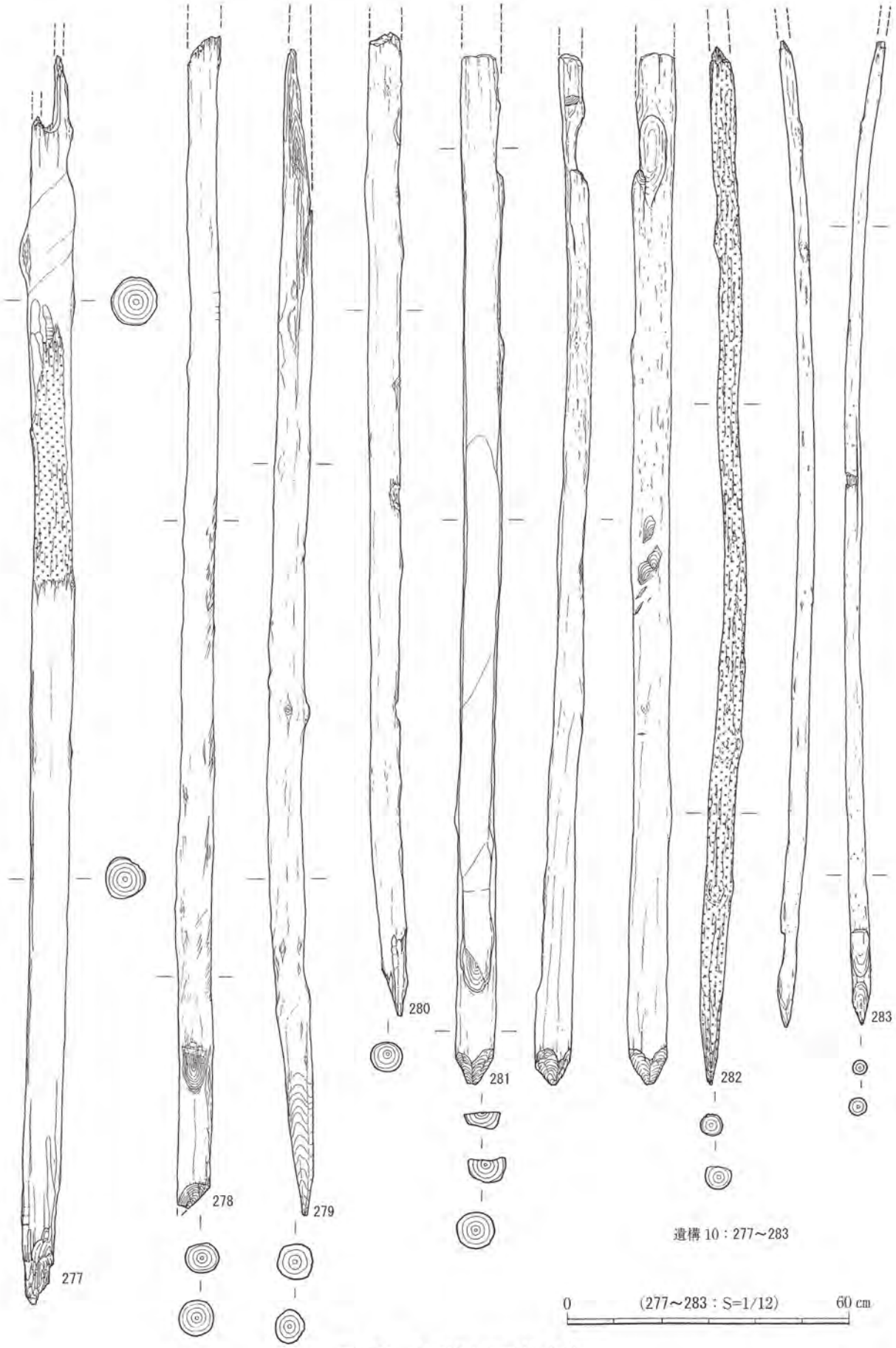


図 26　Ⅰ区出土木製品（7）

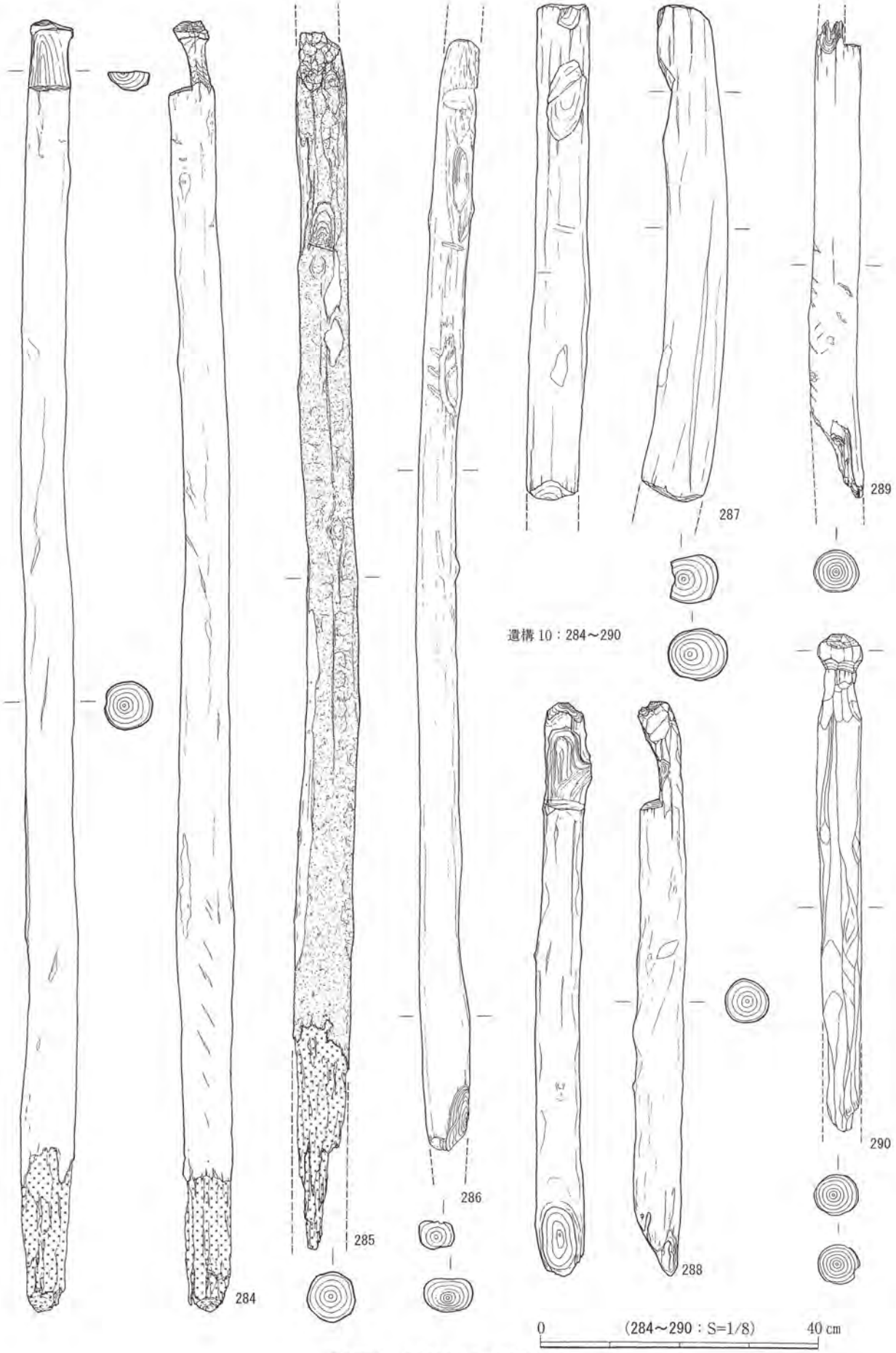


図 27　Ⅰ区出土木製品（8）

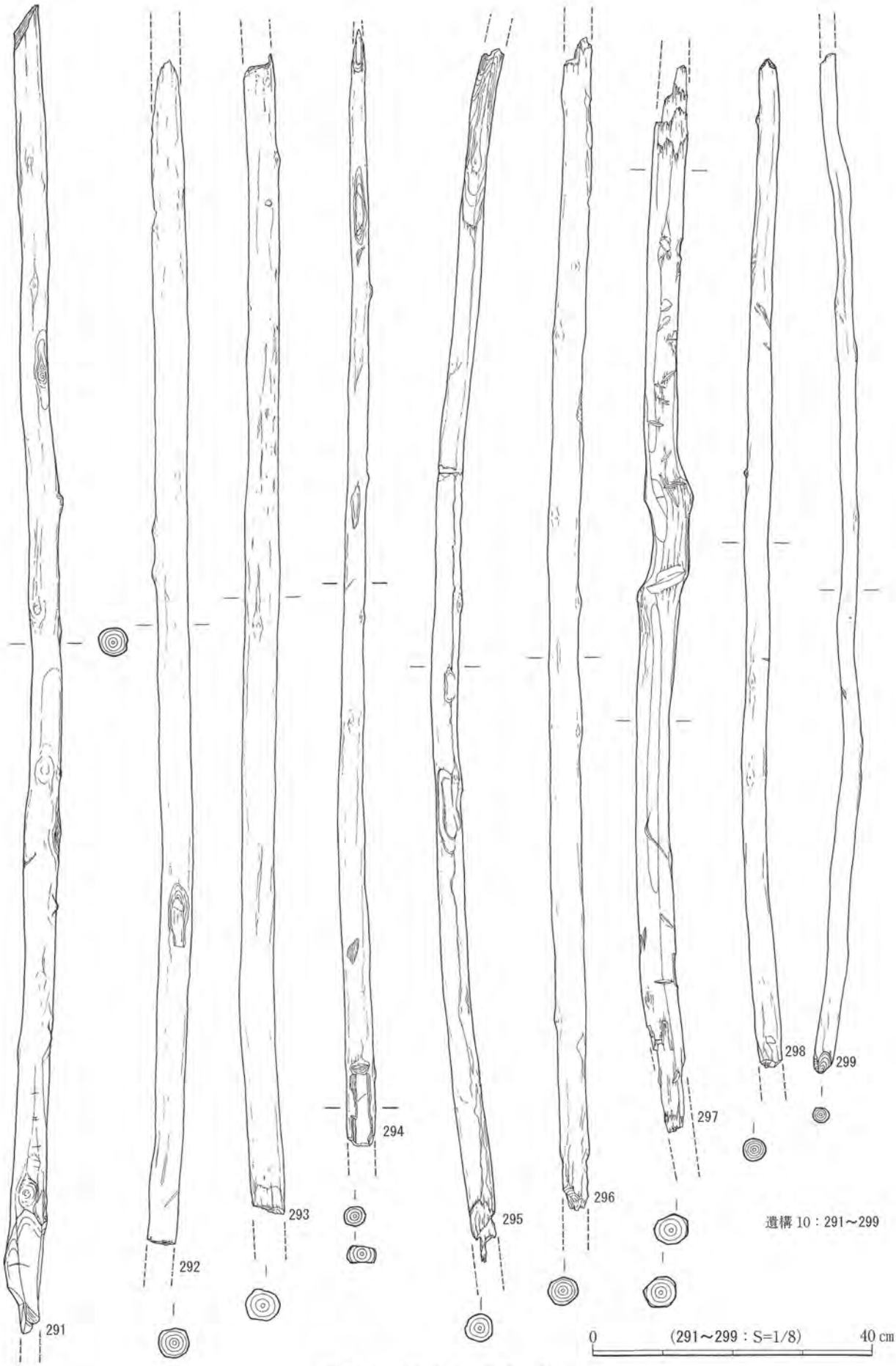


図 28　Ⅰ区出土木製品（9）

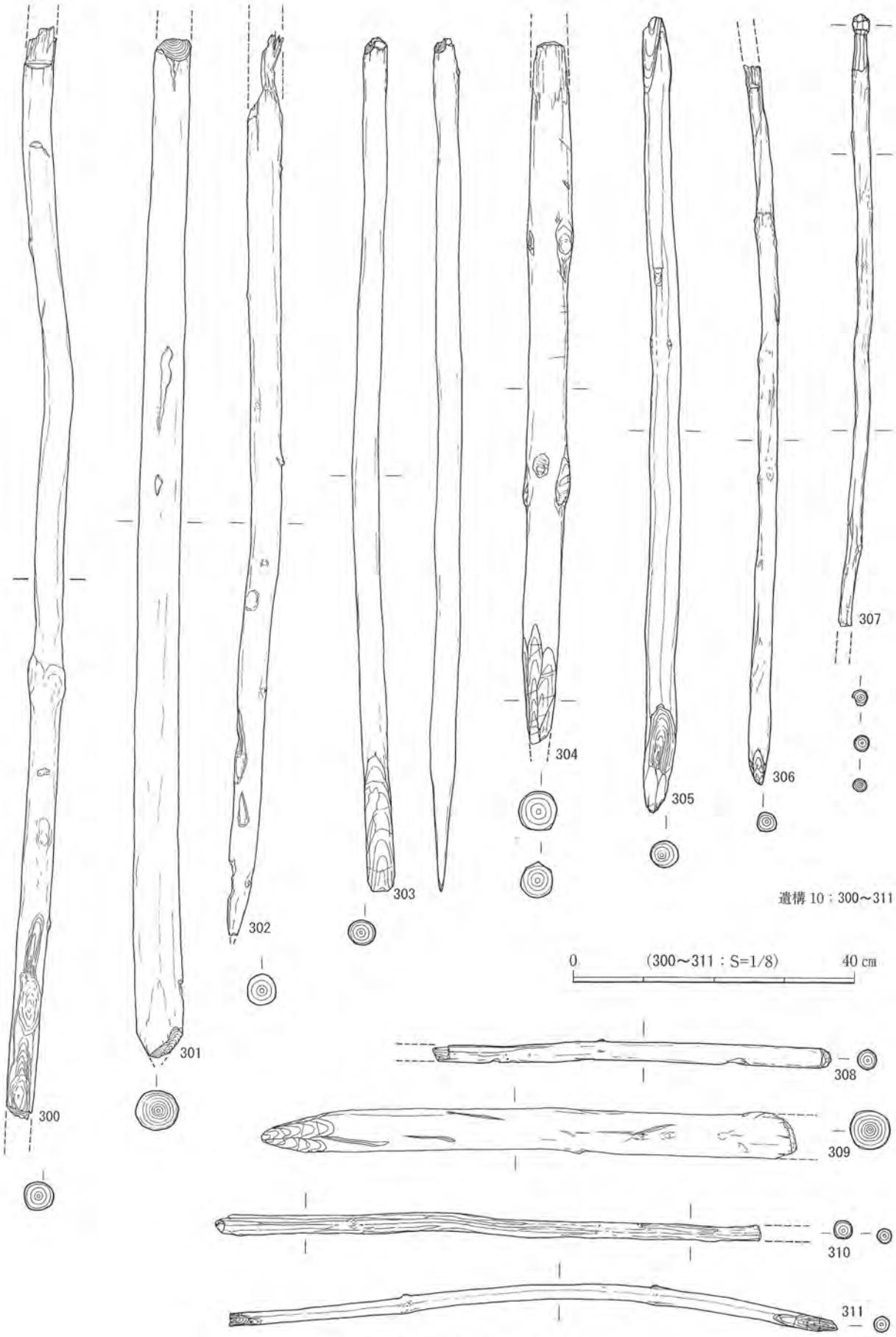


図 29　Ⅰ区出土木製品（10）

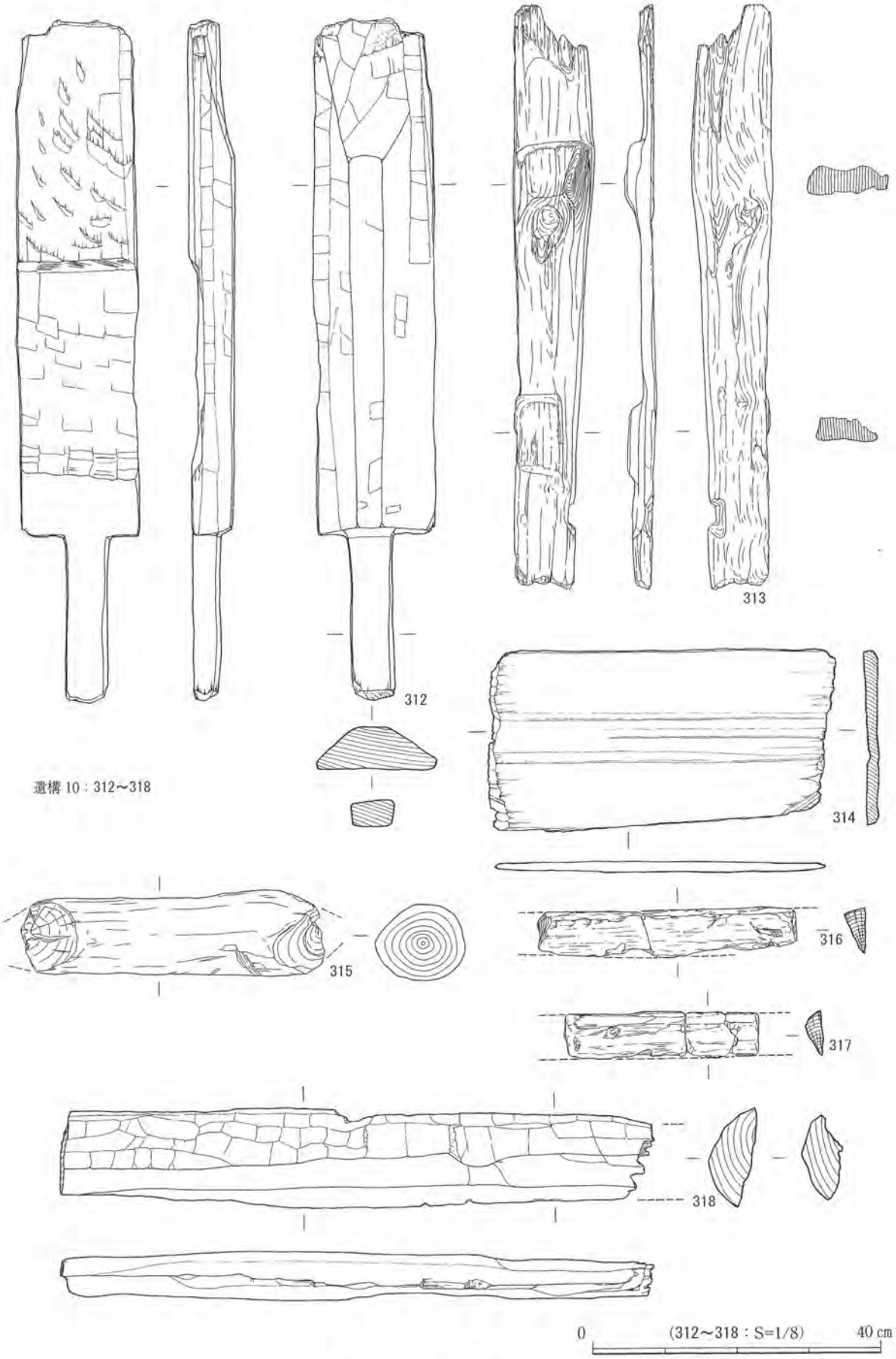


図 30　Ⅰ区出土木製品（11）

構が存在することから、掘削はおこなっていない。1980年度の調査区で検出している溝SD－10に相当すると考えることができる。

遺構12（図14・24、図版6・20） 調査区の北西部で検出した土坑で、南側はトレンチによって削平されている。長さ1.7 m以上、幅0.6 m以上、深さ40cmを測り、底面には杭が打ち込まれていた。遺構10がほぼ埋没した後に埋まっていることから、古墳時代前期以降の遺構で、遺構の切り込み面を見る限り、遺構10とは時期差はさほどないものと捉えることができる。遺物は機織の経送具が出土しているが、杭に沿うように出土していることからも転用品であると考えられる。

2．Ⅱ区（図31）

5つの調査区に分かれ、北からA～Eの枝番を与えて調査区名としている。廃線となった有田鉄

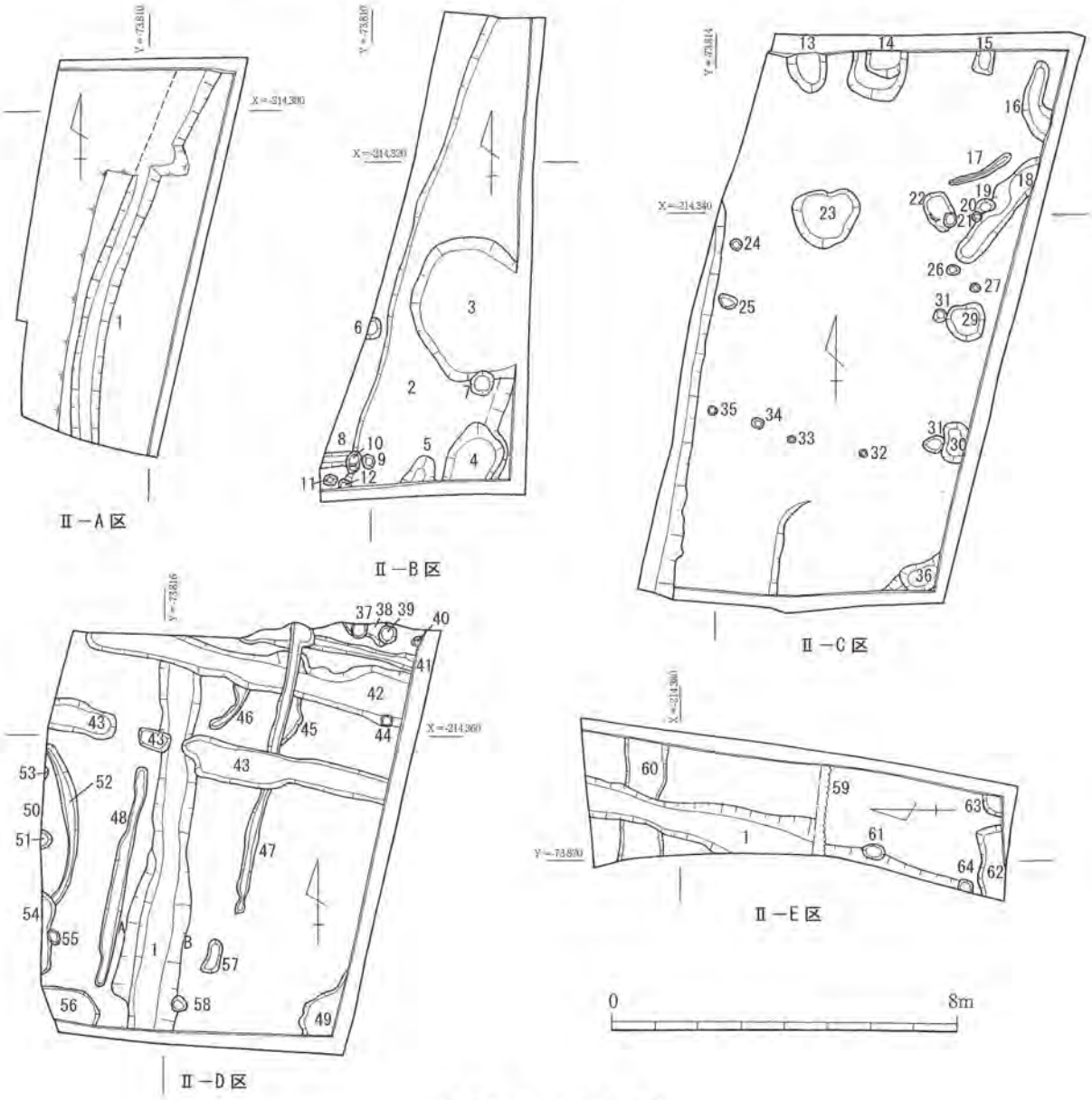


図31　Ⅱ区遺構（1）

道の建設時に、耕作土の上に大きく盛土がおこなわれており、盛土の東裾を昭和28年の水害時の堆積土が覆う。中世の遺物を含む包含層はおおきくⅠ～Ⅲの3つに分けることができ、Ⅰはさらに細かく分けられているが、Ⅰ～Ⅲとも瓦器など同様な遺物を含み、帰属する時期は大差ないものと考えられる。ほとんどの遺構は包含層Ⅰの下面で検出しており、包含層Ⅱ・Ⅲに伴う時期の遺構については明らかでない。

検出した遺構には中世の溝や土坑・柱穴、弥生時代後期の竪穴住居がある。

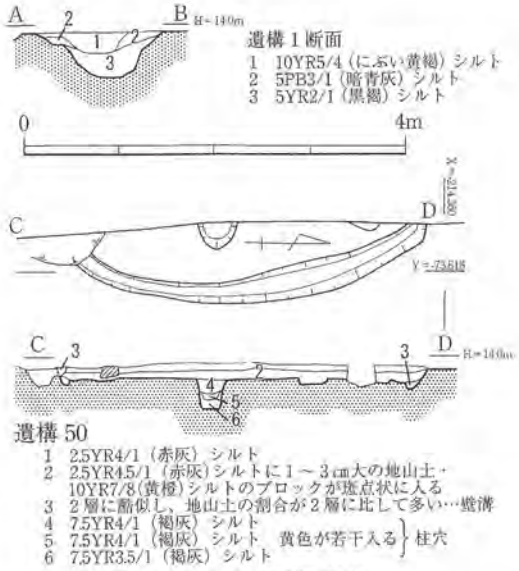


図32　Ⅱ区遺構（2）

遺構1（図32・33、図版7・8）　調査区Ⅱ－A・Ⅱ－C・Ⅱ－D・Ⅱ－Eで検出している。南北方向に延びる溝で、幅0.6～1.0m、深さ約50cmを測る。底面の高さは南が高く北に下がっている。Ⅱ－Aの北端からⅡ－Eの南端まで90mあり、その以上延びていることが窺える。遺物は瓦器椀（320～323）・皿、土師器皿（324～327）・羽釜（328）、瓦質土器甕、東播系須恵器捏鉢（329）、瓦、鉄釘（330）などが出土しており、鎌倉

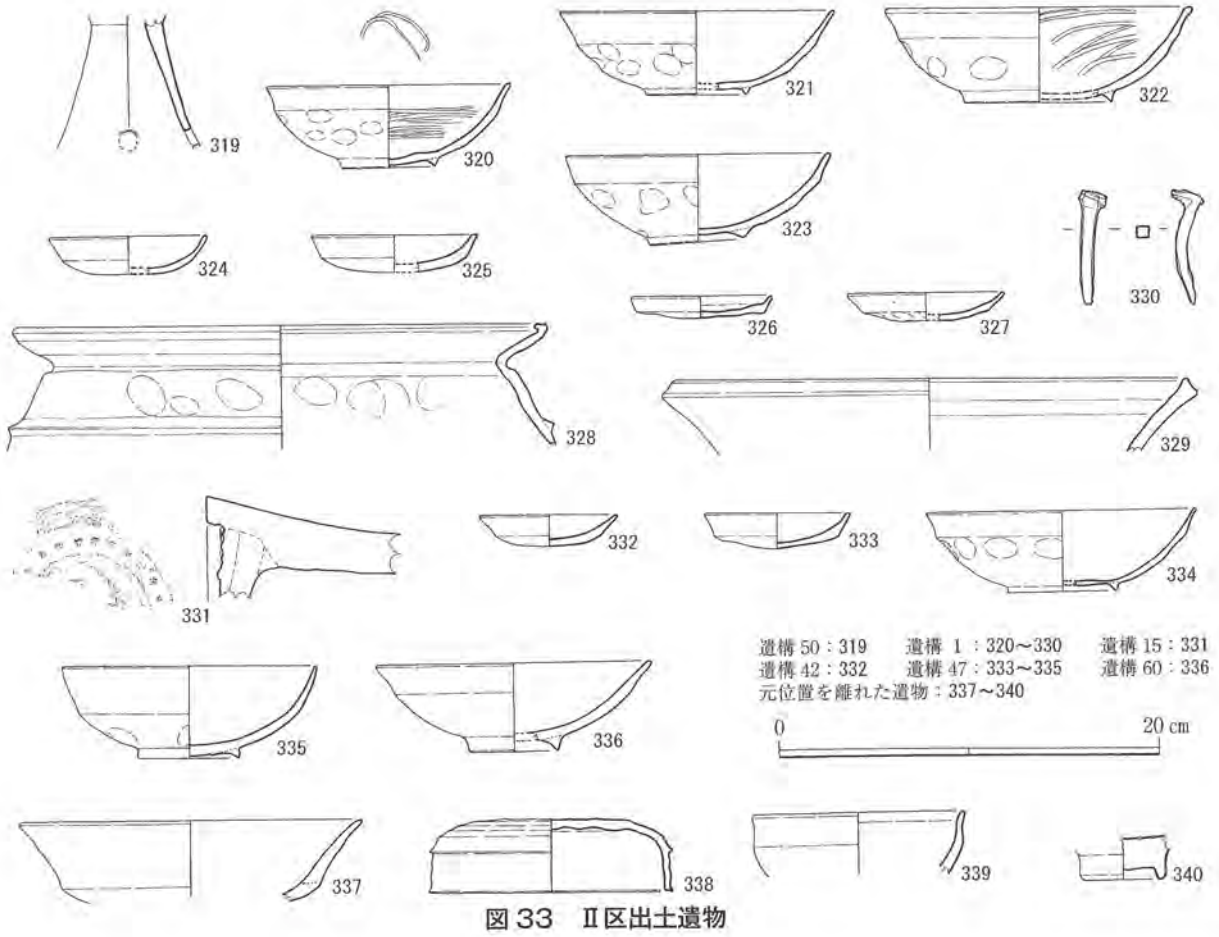


図33　Ⅱ区出土遺物

時代の遺構であると捉えることができる。1980年度に検出している5区溝1と時期が同じで、規模・方向も似ていることから、同様な性格の溝であると考えることができる。

遺構41～43・47・48・60（図31・33） 47・48は溝1と同じ南北方向に、遺構41～43・60はそれに直交するように東西に延びる溝で、出土遺物はそれぞれ瓦器・土師器が出土している。これらは周辺の地割の方向であることから、耕作に係わる溝である可能性がある。

遺構50（図32・33、図版8） Ⅱ－E区においてベースの段丘礫層上で検出した弥生時代後期の円形竪穴住居である。東側の一部分を検出しただけで、大部分は調査区域外となる。確認した長径は4m以上で、復元すればおおよそ7m前後になると考えられる。残存する壁の高さは15cmで、壁溝は幅約20cm、深さ約10cmを測る。主柱と考えられるピットは1個検出しており、直径約20cm、深さ約30cmである。遺物は弥生土器壷・甕・高杯（319）が出土しており、弥生時代後期の住居であると考えることができる。

3．Ⅲ区（図34、図版9）

2つの調査区に分かれ、北からA・Bの枝番を与えている。マンション建設時に大きく盛土がおこなわれており、その下面に現在から江戸時代に遡る水田面が複数面存在する。Ⅱ区で検出している中世包含層Ⅰは存在せず、中世包含層Ⅱ上面と中世包含層Ⅲの上面と下面で遺構を検出しているが、3つの遺構面の時期差さほどないものと考えられる。

検出した遺構には、中世の溝状遺構6条（遺構1・4・25・27・29・35）、土坑8基（遺構2．26・28・30・31・32・33・34）、柱列（遺構36）と柱穴がある。Ⅲ－A区北側の溝や柱穴などは中世包含層Ⅱの上面で検出しているが、Ⅲ－A区南側とⅢ－B区の遺構は中世包含層Ⅲ上面と下面で検出している。明らかに中世包含層Ⅲの下面遺構に

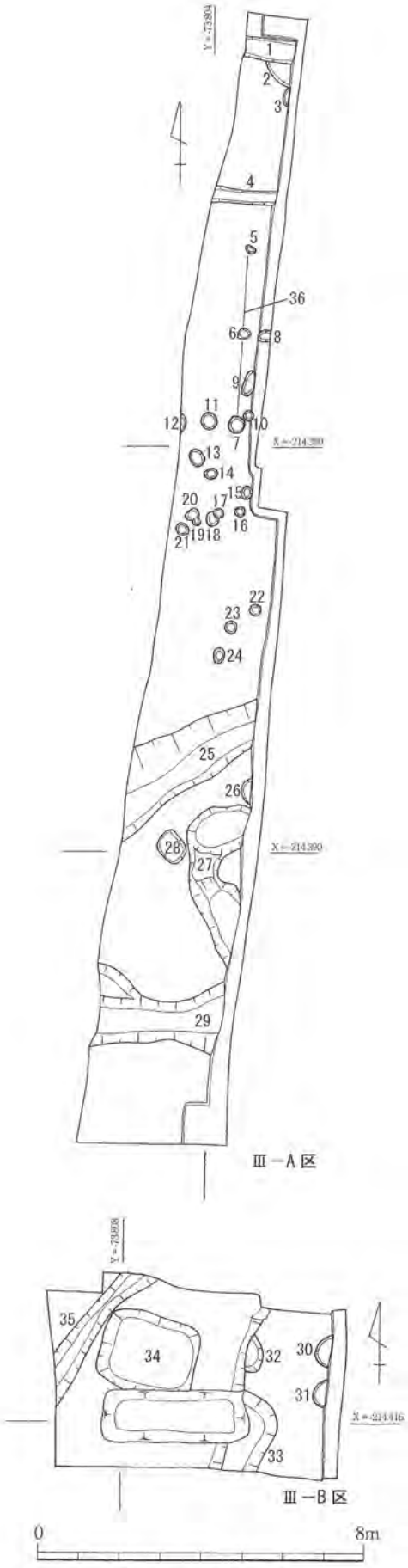


図34 Ⅲ区遺構

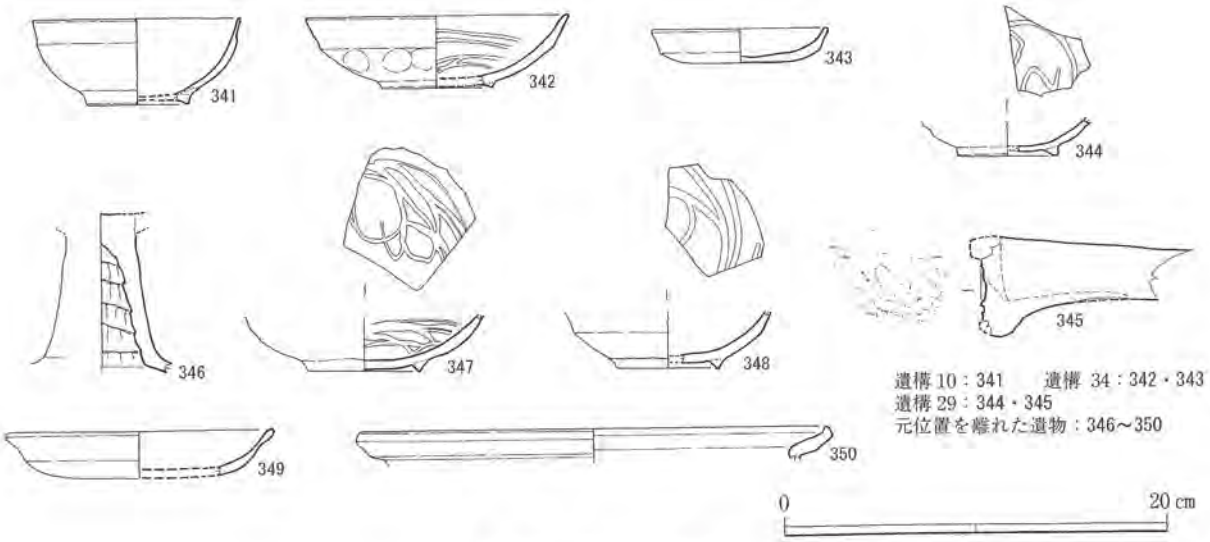


図35　Ⅲ区出土遺物

数えられるものに、遺構26～28がある。

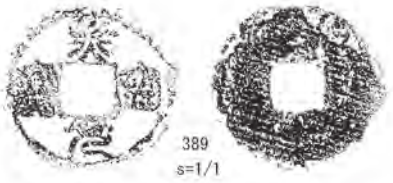


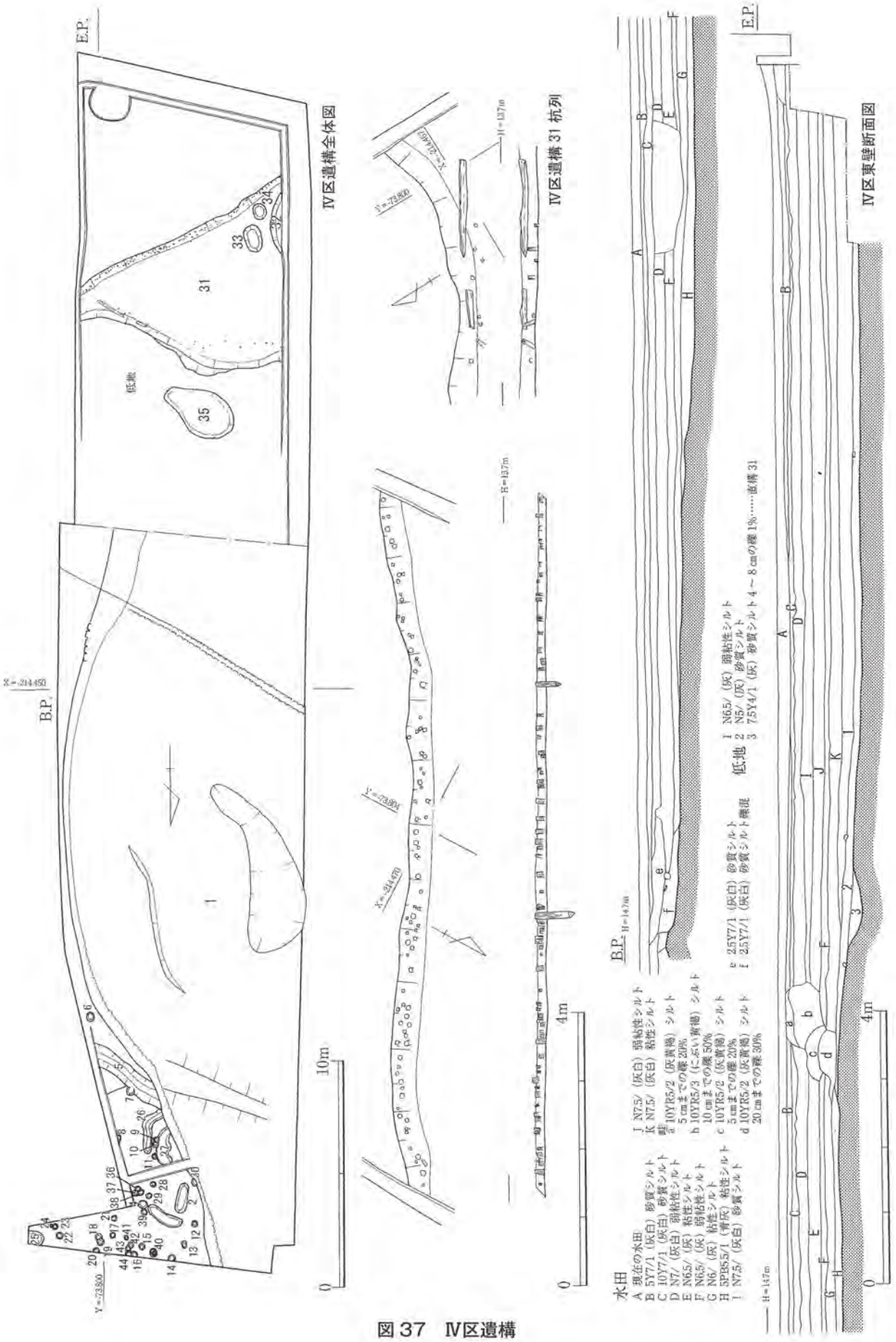
図36　Ⅲ区出土遺物・銭貨

遺構1・4　Ⅲ－A区の北端において中世包含層Ⅱの上面で検出した2条の溝である。これらは約3mの間隔をおいて東西方向に延びる。遺構1は幅60～80cm、深さ10cmを測る。遺構4は幅30～45cmを測り、深さ8cmと遺構1と同様に浅い。遺構1からは瓦器・土師器片が出土し、遺構4の出土遺物は無い。

遺構29（図35）　Ⅲ－A区南端において中世包含層Ⅲの上面で検出したもので、調査区を東西に横切る溝状遺構である。幅は断面土層から約4.0mを測り、深さは中央部の最も深い箇所で約45cmを測る。埋土の中程に3～10cm大の礫が堆積しており、その状況から洪水などによって一気に堆積したものと考えられる。出土遺物には瓦器椀（344）、須恵器甕・杯、軒平瓦（345）などがある。

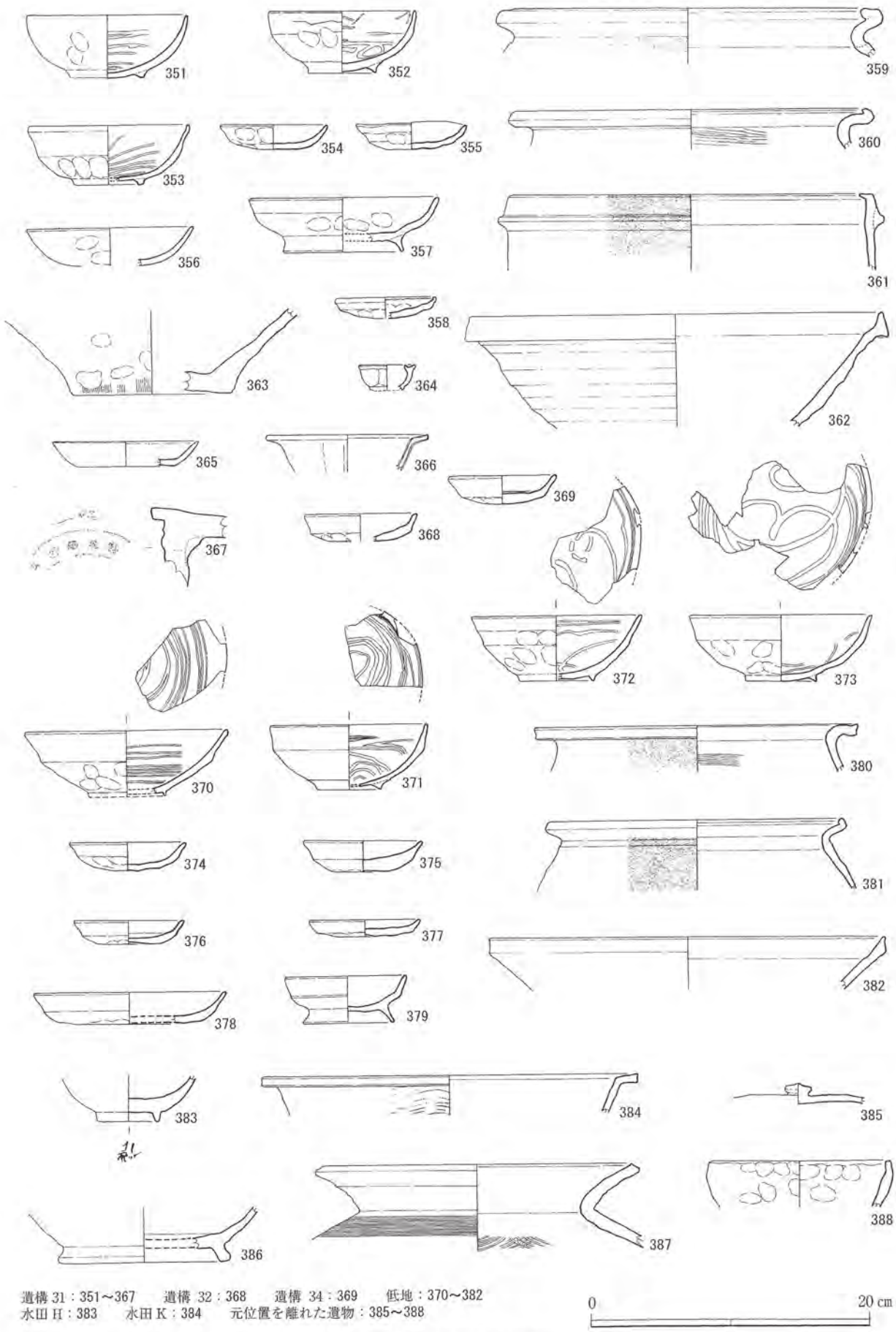
遺構34（図35）　Ⅲ－B区中央で検出した土坑であるが、切り込む遺構面は中世包含層Ⅲの上か下か明らかでない。平面形状は東西方向に長い隅丸長方形で、規模は長辺約2.4m、短辺約2.0m、深さ約50cmを測る。出土遺物としては瓦器椀（342）・皿（343）、土師器皿、平瓦が出土している。

遺構36（図版9）　Ⅲ－A区北側において中世包含層Ⅱの上面で検出した柱列である。遺構4の南側に接し、遺構5・6・7の柱穴からなる。南北2間分で柱間は北から2.08m・2.20mで、座標北を主軸とするとN－5°－Eである。柱穴の大きさは直径約30～40cmを測り、深さは北から8cm・18cm・20cmを測る。遺物は全ての柱穴から出土しており、瓦器椀・皿、土師器皿・土釜などがある。



IV区遺構全体図
IV区遺構31杭列
IV区東壁断面図
低地
B.P.
E.P.
10m
4m
水田
A 現在の水田
B 5Y7/1（灰白）砂質シルト
C 10Y7/1（灰白）砂質シルト
D N7/（灰白）弱粘性シルト
E N6.5/（灰）粘性シルト
F N6.5/（灰）弱粘性シルト
G N6/（灰）粘性シルト
H 5PB5.5/1（青灰）粘性シルト
I N7.5/（灰白）砂質シルト
J N7.5/（灰白）弱粘性シルト
K N7.5/（灰白）粘性シルト
a 10YR5/2（灰黄褐）シルト 5cmまでの礫20%
b 10YR5/3（にぶい黄褐）シルト 10cmまでの礫50%
c 10YR5/2（灰黄褐）シルト 5cmまでの礫20%
d 10YR5/2（灰黄褐）シルト 20cmまでの礫30%
e 2.5Y7/1（灰白）砂質シルト
f 2.5Y7/1（灰白）砂質シルト礫混
低地
1 N6.5/（灰）弱粘性シルト
2 N5/（灰）砂質シルト
3 7.5Y4/1（灰）砂質シルト4～8cmの礫1%……直構31

図37　IV区遺構



遺構 31：351～367　遺構 32：368　遺構 34：369　低地：370～382
水田 H：383　水田 K：384　元位置を離れた遺物：385～388

図 38　Ⅳ区出土遺物

4．Ⅳ区

Ⅳ区は昭和60年度の調査区7区の隣接地となる。排土置き場を確保するため北側と南側に二分して調査をおこなった。

調査区は北東隅付近のみ表土下約30cmで地山となるが、他の部分は一段低く、南に向かって緩やかに下っており、これが段丘を割って流れる天満川に向かって落ち込むものと考えられる。一段低い部分は、水田H・Kなどから出土する肥前系陶器（383・384）などから近世以降連綿と水田として利用されたことが窺え、水田の区画に係わる石垣や畦畔を確認することができた。

一段高い北東隅付近では、現耕作土と床土（旧耕作土）直下の中世包含層Ⅱの上面で柱穴や土坑・溝状遺構などを検出した。遺構から出土する遺物には、瓦器・土師器などがあり、おおよそ中世の遺構であると考えられる。

一段低い部分のうち南側の低地には、瓦器椀（370～373）・皿、土師器皿（374～379）・土釜（380・381）、瓦質土器甕、東播系須恵器捏鉢（382）、瓦などを多量に含むシルト層が堆積し、その下面で不定形の落ち込み（遺構31）や土坑（遺構35）を、さらに遺構31の底面で土坑3基（遺構32～34）を検出した。

遺構31（図37・38、図版10）　東・西が調査区域外となるため全容は不明である。東西10m以上で、南北は西側で8.0m、東側で1.5mを測る。深さは20～30cmで、底は平坦である。片部付近には直径4～10cm程度の丸太杭が北側では間隔を空けて、南側では密に打ち込まれていた。遺物は瓦器椀（351～353）・皿（354・355）、土師器皿（356～358）・土釜（359～361）、東播系須恵器捏鉢（362）、国産陶器甕（363）、青白磁合子（364）、白磁皿（365）、青磁皿（366）、軒丸瓦（367）、平瓦、銭貨（銭文不明）などが出土している。1980年度7区溝ＳＤ－１と一連の遺構であると考えられる。

遺構32（図38）　遺構31の底で検出した土坑で、遺構33・34と隣接する。西側が調査区域外となることから全容不明であるが、長さ2.8ｍ以上、幅0.55ｍ以上、深さ17cmを測る。遺物は瓦器椀、土師器皿（368）などが出土している。

遺構33　遺構31の東側で検出した土坑で、平面形状は楕円形を呈する。規模は長さ1.15ｍ、幅0.75ｍ、深さ23cmを測る。遺物は瓦器、土師器、須恵器などが出土している。

遺構34（図38）　遺構32の東側で検出した土坑で、平面形状は楕円形を呈する。規模は長さ0.65ｍ、幅0.58ｍ、深さ8cmを測る。遺物は瓦器椀・皿（369）、土師器皿、須恵器などが出土している。

第4章　考察

平成17年度から19年度の3箇年にわたる野田地区遺跡の発掘調査は、分断された小さな調査区が多く、検出した遺構については断片的なものであったが、木製品を中心に残りの良いまとまった資料を得ることができた。また、1980年度・1985年度の調査成果をあわせると遺跡の内容もかなり明らかになった。これまでの調査で、旧石器、縄文時代後・晩期の土器や石棒、弥生時代中・後期の土器、古墳時代前期から中・近世に至る土器類が多量に出土している。これらの多くは、段丘から沖積地へ落ち込んだ状態あるいは段丘下の溝から出土しており、段丘上に各期の集落が存在したことが予想できるようになった。

1980年度の調査成果を所載した報告書では、遺跡の性格や出土した各時期の遺物を多方面から細かく分析している。3箇年の調査で新たに書き加える内容も少ないが、ここではそれらの成果に今回の新知見を含め、遺跡の性格に再度迫るとともに、出土遺物についても若干の考察を加えてみたい。

第1節　遺跡の性格

弥生時代　弥生時代中期の遺構は検出できないものの、土器は一定量出土している。周辺部におけるこの時期の集落としては、環濠に囲繞され拠点集落と考えられている田殿尾中遺跡があり、野田地区遺跡と田殿尾中遺跡の中間位にある旧吉備中学校校庭遺跡でも中期の住居などがみつかっている。野田地区遺跡の性格とすれば、旧吉備中学校校庭遺跡などとともに、拠点集落の周辺に点在したであろう分村的な小集落であったろうと理解でき、段丘上に居を構え、沖積地で水田を耕作していたことが予想できる。

今回、Ⅱ区において弥生時代後期の竪穴住居を検出した。出土遺物が少なく、残存状態が悪い高杯のみで時期を判断しなくてはならないが、おおよそ後期中頃以前に帰属するものと考えられる。田殿尾中遺跡は中期末頃に廃絶し、それと整合するように高地性集落が出現する。田殿尾中遺跡で集落が再開されるのは、弥生時代後期末頃になってからであるが、旧吉備中学校校庭遺跡では中期との間に断絶期が存在するか否かは別として後期には集落が営み続けられ、高地性集落と並存する状況がみられる。野田地区遺跡においても同様なことが想定でき、中期の拠点集落が解体されても、分村では集落が存続していることが窺える。田殿尾中遺跡は有田川の自

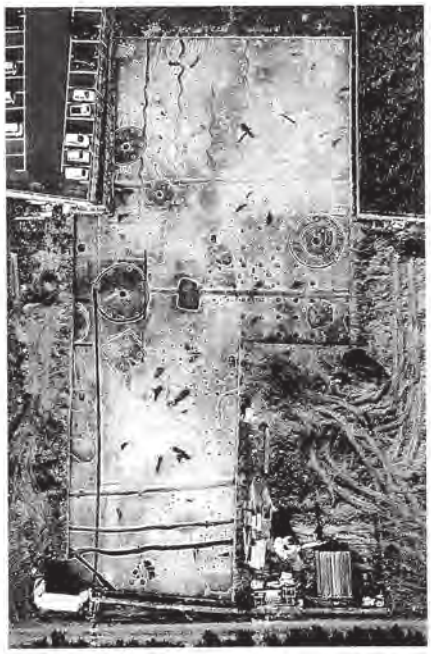


写真5　旧吉備中学校校庭遺跡

然堤防上に立地するが、低位段丘にある他の二つの遺跡より高く、野田地区遺跡に比べると約５m高い立地となっている。この状況からは拠点集落の解体が、洪水などの自然的な要因であるとは考えがたく、高地性集落の出現の意味を考える上でも興味深い現象であるといえる。

後期末頃になり田殿尾中遺跡では、弥生時代中期の環濠を再掘削して集落が再開され、旧吉備中学校校庭遺跡では庄内式中段階頃には廃絶する。野田地区遺跡では、この時期の遺物量が多く、田殿尾中遺跡の集落再開、旧吉備中学校校庭遺跡の集落廃絶という流れに連動している可能性がある。田殿尾中遺跡では布留式期には廃絶し、それ以降、集落は沖積部を離れ南側の段丘上に立地する天満Ⅰ遺跡や野田地区遺跡周辺に展開するようになる。今回おこなった理化学的分析の結果、この時期以降、野田地区遺跡周辺で稲作がおこなわれていることがわかっている。

古墳時代　野田地区遺跡ではⅠ区の遺構10から布留式期の土器や木製品が出土し、1980年度の調査でも同様な遺物が出土している。木製品の大半を占めるのは柱・垂木・小舞などの建築部材で、併せて約100点を数えることができ、梯子も計２点出土している。丸太材を途中より半截する柱（270・271）は高床式建物の部材であると考えられ、梯子の数や規格が違う２本の柱の存在から、少なくとも２棟以上の高床式建物などの部材であることが窺える。

建築部材以外の木製品では、一般の低湿地の遺跡で多く出土する鍬や鋤などの農具や工具などの遺物が極端に少なく、家具や紡織具などの一般集落ではあまり出土しない遺物が目立つ。また、木製品と伴出する土器では完形品の壷や小型丸底壷の出土が顕著で、甕の数は少なく、しかも小さな破片で下層からの混入の可能性をもつものである。土器や木製品の組成は、一般集落とは異なっており、形代の可能性がある267以外には祭祀具らしきものはなく、また、井泉なども検出されていないが、付近で水辺の祭祀などを行っていた可能性がある。このことに関しては、後でも補足する。

ところで、遺跡に隣接する藤並神社の祭神は天満の地名が示すように菅原道真であるが、古くは武内宿禰が和歌山市山東にある伊太祁曽神社から水主神を勧請したのがはじまりとする説もある。水主神は水を司る神であることからも、野田地区遺跡でおこなっていたとした（水辺の）祭祀は、藤並神社との関わりを推定することもできる。

和歌山県の古代豪族としては紀氏が有名である。紀氏は古墳時代には軍事に長けた集団で大和政権にも深く入り込んでいたとされる。本拠は紀ノ川の下流域であるが、同族が紀北・紀中地方の河川の下流域に拠点を構えていたと考えられ、古代の文献から「紀」を名乗る人々がこれらの地域で郡司を務めていることでも窺うことができる。

写真６　藤並神社

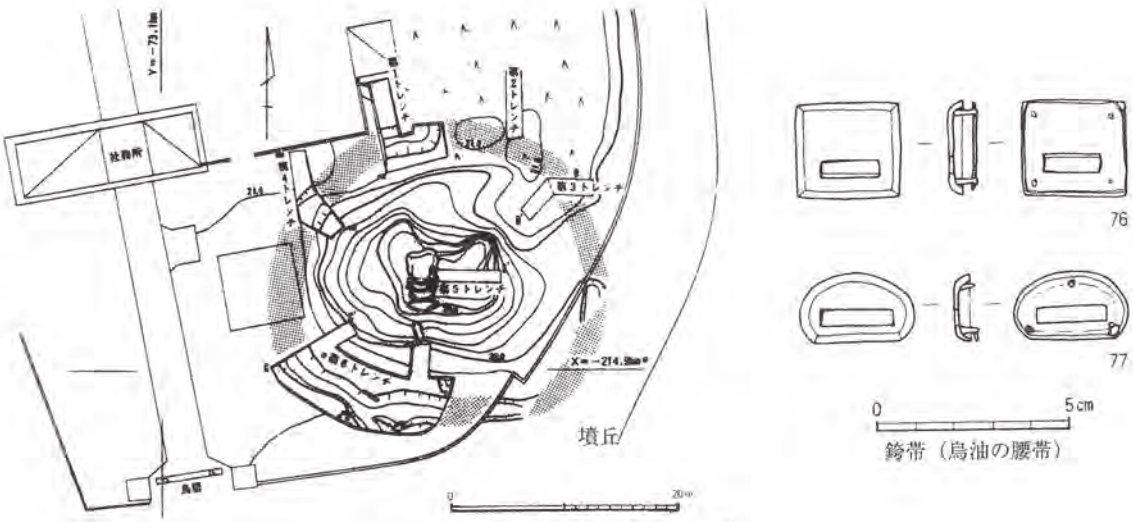


写真 39　天満 1 号墳墳丘・鈴帯

紀氏は朝鮮半島との関りが強く、実際、紀氏の本拠である紀ノ川下流域では、陶質土器をはじめ半島系の遺物が多く出土し、それらは紀氏との関連が指摘されている。野田地区遺跡で陶質土器や韓式系土器が出土するのも、紀氏との関わりを考えることができる。

少し話が飛躍するが、藤並神社の境内には、巨石をもって作られた横穴式石室をもつ天満 1 号墳が築かれている。この古墳は「泣沢女の古墳」とも呼ばれ、発掘調査では 12 歳前後の女性の人骨が出土している。古墳は 6 世紀末から 7 世紀前半代に築かれたものであるが、石室の中からは奈良時代の土器類が多く出土し、発掘調査報告書では、古墳に埋葬された人物を偲んで、その子孫が儀式に使ったものだとの解釈を載せている。また土器とともに役人がつけるベルトの飾金具である鈴帯が出土しているが、これは「烏油の腰帯」と呼ばれているものであり、古代の役人の服装を定めた「衣服令」では、六位以下の下級役人がつけたものであるとされている。地方においてこの位をもつ役人と言えば、まさに郡司クラスであり、天満 1 号墳から出た腰帯も郡司の持ち物であった、言い変えれば郡司である紀氏の持ち物であった可能性も指摘できる。そのように考えていくと、天満 1 号墳に葬られた少女も、紀氏の一族であった可能性がある。

古代　1980 年度の調査で、平安時代前期の溝から人形、斎串、馬形などが出土している。これらを使った禊などの儀式は、都を中心に皇族・貴族階級で行われていたもので、地方で、そのような儀式を行うとなれば、当然、中央と関わりのある人物であり、もっとも考えられるのは郡司階級の人となる。平安時代前期の仁寿四年（854）の文書である「在田郡司解」（文献 1）では、有田地方の郡司として「紀宿禰真貞」らの名前が出てくる。また、郡司が持っていた田畑や屋敷地には、有田川町の地名が出てきており、「野田大溝」の名も記載されている。案外、今回検出した平安時代の溝が、この「野田大溝」をさし、「紀」を姓にもつ郡司によって禊がおこなわれ

（前略）
家地一町三段　在吉備郷　直稲伍佰伍拾束
一所三段　在丹生村　四至　東至百姓口分　南至道　西至百姓口分　北至百姓口分
直（ママ）百五十束（ママ）別段五十束
一所一町在野村四至　東至栗栖畠　南至紀臣波自女地　西至古垣并栗栖林　北至野田大溝
直稲四百束段別卌束
畠一町在吉備郷小嶋村四至　東至於比寺地　南至神奴知嶋地　西至紀朝臣並倉地　北至大河
直稲参佰束段別卌束
右、得擬大領紀宿祢真貞解状偁、己新田并家地畠地等、依式常地、与沽権大僧都伝燈大法師位真済大徳既訖者、依解状、郡加勘察、所申有実、仍為後、勒売買両人署名、立券文如件、以解、
専　売外従八位上紀宿祢「真貞」（直署、以下同ジ）
父従六位上紀宿祢「千本」
弟　紀　宿　祢「貞男」
証刀祢紀　直「成人」
紀　朝　臣「今麿」
買人料　仁寿四年六月七日主帳外少初位下大海連副擬大領外正八位下紀朝臣（草名）
擬少領无位紀朝臣
（後略）

文献１　在田郡司解[15]（部分）

た可能性がある。また、遺構９から出土した桧扇についても、当時、上流階級の持ち物であることから、やはり郡司が儀式に使ったものである可能性が考えられる。

野田地区遺跡の周辺部には古代の遺跡が多く、当時の遺物も豊富に出土していることからも、郡衙に関しても近くに存在した可能性が十分窺える。

中世　これまで野田地区遺跡では、1980年度の調査分も含めて、瓦器や土師器などとともに下駄、杓文字、曲物、漆椀のほか、笹塔婆や角塔婆（位牌）が出土している。笹塔婆は薄い板に「南無阿弥陀仏」などの経文を書いたもので、1980年度の調査で、約800枚出土している。柿経とも呼ばれ、鎌倉時代から室町時代には無数の笹塔婆を束ねて神社などに奉納した例が多く、供養などに使ったものが溝や井戸などから発見されることもある。野田地区遺跡でも笹塔婆を水に流し、先祖を供養する儀式をおこなっていた可能性がある。また、御坊市小松原Ⅱ遺跡[16]でも流路から笹塔婆が仏教関係の遺物とともに出土しており、関連が注目されるところである。

野田地区遺跡の範囲内には南北朝時代の宝篋印塔が建ち、周知の遺跡としても観音寺跡がある。「紀伊続風土記」の記述には宝篋印塔は観音堂の境内にあったとされるが、観音寺跡に関しては、藤並神社の東隣に位置する青蓮寺で見つかった版木で、その存在が窺えるものの、寺に係わるような遺構はみつかっておらず、幻の寺とされている。ただ、発掘調査では古代末から中世にかけての瓦が出土するなど寺の存在を窺うことができ、笹塔婆を流す儀式には観音寺が関っていた可能性が考えられる。

このように野田地区遺跡のⅠ区付近は、古墳時代前期以降神聖な場所として、水に関る祭祀や儀式をおこなっていた可能性がある。

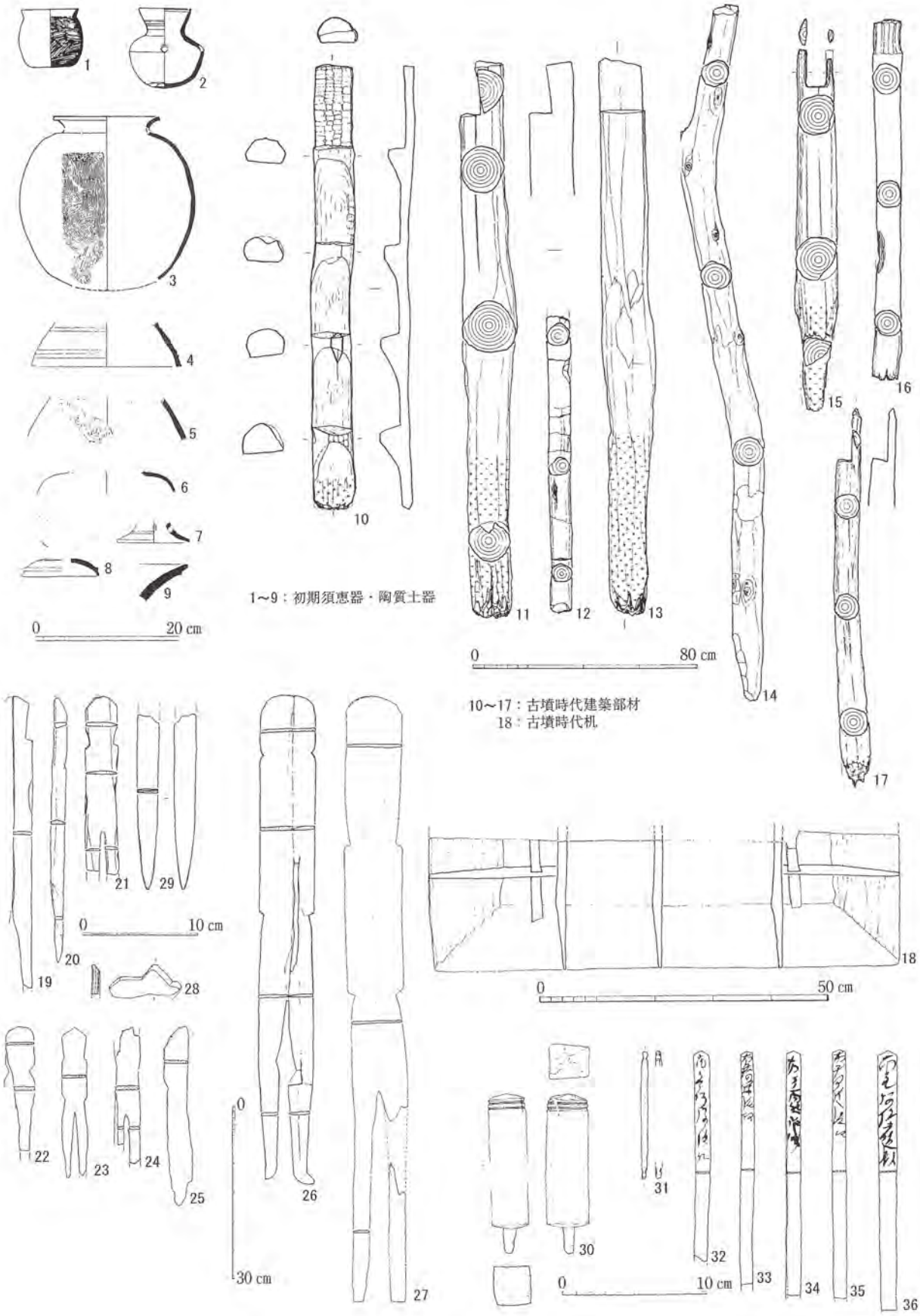


図 40　1980 年度調査出土遺物

第２節　出土遺物の検討

１．弥生時代末から古墳時代中期にかけての土器

Ｉ区の堆積層と遺構 10 からは、比較的まとまった庄内式併行期から布留式期の土器が出土している。Ｉ－Ａ区では堆積層を分層発掘することで、おおまかな土器編年が可能であり、遺構４・10 出土遺物も含めて土器の概観と位置づけをおこなってみたい。

弥生時代末から古墳時代中期にかけて、堆積層への遺物の混入は連綿と続いており、堆積時に下層の攪拌などもあったと考えられ、上下する層位での接合は多くは認められた。これは、層単位の時期を明確にすることを目的に遺物の掘り残しを避けるため少し強い目に直下の層上部まで掘削していることにもよる。このことを踏まえ、各層の遺物の提示は接合関係が２層以上に跨る場合において、より下層の方を本来属していた層としておこなっている。

Ｉ－Ａ区の堆積層では第 12 層以下が古墳時代（中期）以前となる。第 12 層には土師器とともに須恵器短脚高杯 14 が含まれる。14 は通常台形か円形に穿たれる透かしが三角形となっている。この土器を基に第 12 層は５世紀代としておさえる。

第 13 層には土師器とともに陶質土器の可能性もある初期須恵器の高杯 21 が含まれる。21 は杯部の底体部が回転ナデ調整で、杯部と脚部の接合部に低い突帯を巡らしている。土師器には長胴の甕 16 や、小型有稜高杯 17、大型高杯 19 などがある。壷 15 に関しては弥生土器の可能性がある。16 は口縁部が緩やかに外反し、内面は粗いヘラケズリ調整となっている。17 や 21 に関しては初期須恵器に併行する布留式新段階の範疇[17]で考えることができ、５世紀後半以降と考えられる 16 とは時期差が認められる。16 は図版３－５にもあるように、完形品で横位で出土していることからも、埋甕などの土坑に伴う遺物で、掘形を見逃している可能性も否定できない。これらのことを踏まえ、第 13 層は５世紀前半代に比重おきながらも、やはり５世紀代として押さえておきたい。

第 14 層には陶質土器筒形器台 36、韓式系土器平底鉢 35 が含まれる。土師器壷 22 は二重口縁で、口縁端部を肥厚させている。甕では外面の調整がハケでも口縁端部が肥厚するタイプがなく、すでに布留式甕の規範が崩れている。そのなかにあって 27 は下層からの混入品であることを否定できないものの外面に平行タタキ調整を残しており、弥生甕の系譜と考えられるものである。高杯では第 13 層 17 と同様な小型有稜高杯 31 があり、手捏ねの小型鉢 32 ～ 34 が多いのもこの層の特徴である。以上のようなことから、第 14 層は布留式新段階の範疇で捉え、５世紀初頭から前半代の時期を与えたい。

第 15・16 層は、遺物量は少ないものの、第 14 層と同様な韓式系土器平底鉢 38 や、布留式甕の規範が崩れたタイプと考えられる 37 が含まれており、第 14 層と大差ない時期であると考えられる。

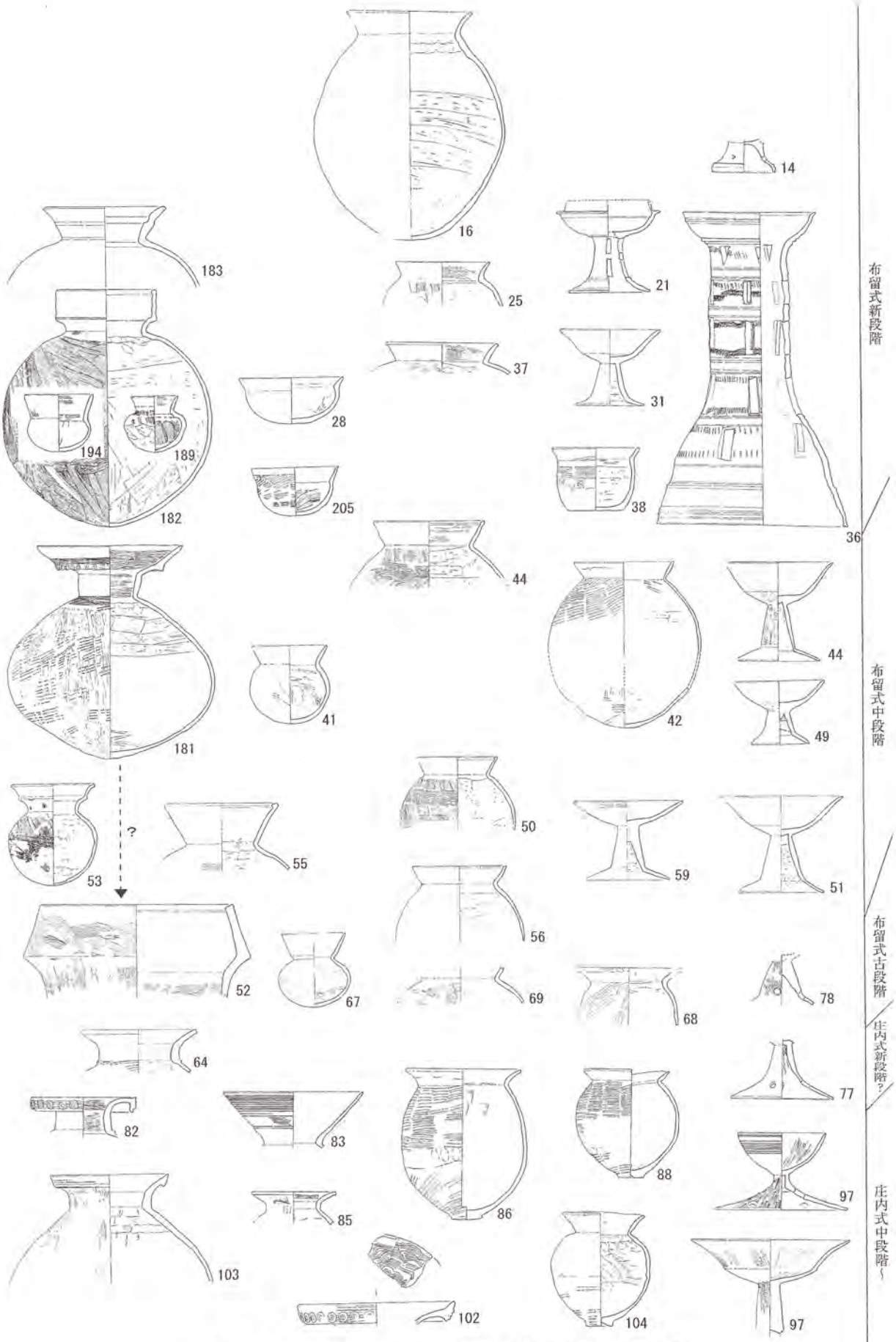


図41　弥生時代末から古墳時代中期にかけての土器変遷

第19層は第14層などとともに壷が少なく、甕では内面がヘラケズリで外面が平行タタキの弥生土器の系譜にある42･43と、布留式甕44･45がある。44は胎土などから搬入品と考えられる。高杯では大振りの有稜高杯が目立ち、小型で椀形の杯部をもつタイプ49も存在する。明確に時期を決定する資料に乏しいが、第14層と第20・21層の中間層の位置から、布留式中段階頃の時期を与えておきたい。

第20・21層は、両層を一括して取り上げた資料が多い。ただ、第21層単独で取り上げている資料のなかには庄内式併行期の特徴をもつ壷64・65、甕68、高杯77などが混入し、壷・甕の底部も平底であるものが目立っており、古い様相をみることができる。第20･21層は壷の数も多く、二重口縁壷51～53と直口壷54・55が、甕では布留式甕56～58がある。52は四国系の土器であると考えられる。第20・21はおおよそ布留式古段階から中段階の範疇で捉え、そのなかでも一部庄内式併行期の土器が混入している可能性はあるものの、第21層の資料を布留式古段階に位置づけたい。

第22層は遺物をあまり含まないが、調査区の全体に広がる層で、Ⅰ－B区でも確認している。1980年度の調査で確認している灰色帯状粘土と同一であると考えられ、この層が庄内式併行期と布留式期を区切る鍵層となる。

第23・25～27層は組成や形態などからは明確に時期差を見出せない。甕や高杯は弥生土器の系譜にあるもので、直口壷83・椀形高杯97などが庄内系の土器として捉えることができる。83・97とも口縁部に条痕状の直線文を巡らす特異な文様形態である。大型粗製鉢99は紀伊半島の南部で庄内式併行期の遺跡に多く見られる形態で、甕脚台101は、東海地方のS字甕の系譜が考えられる。また壷103は、やはり東海地方の菊川式あるいは大廓式と口縁部の形態が類似する。第23層以下の遺物については、庄内式新段階から布留式初頭に顕著に見られる二重口縁の加飾壷が含まれないことや、高杯の口縁部形態などから、庄内式中段階の範疇で考えることができ、そのなかでも層位関係から第26・27層は、やや古く位置づけておく。

遺構4については、切り込み面が第14層下面であり、先に位置づけたように5世紀前半以前となる。高杯3は、高杯31と似ており、陶質土器とも考えられる須恵器壷5も出土していることから、第14層と近い時期であると考えられる。

遺構10は、遺構4と同一と考えられ、高杯207は高杯3などと同じ小型有稜高杯であり、大型高杯208や韓式系土器甑217・218などから5世紀初頭から前半代で、壺182・183もこの範囲内におさまる。また、1980年度の調査においても、この溝の続きで、陶質土器甕や韓式系土器平底鉢が出土しており矛盾しない。加飾する二重口縁壷181や直口壷184などはやや古く位置付けられるが、木製品が一括遺物で、それらと一緒に出土した多くの完形あるいは完形品に近い土器のなかに181があることから、遅くまでこのタイプの壺が残る可能性も考慮しておきたい。

2．犂

犂は段丘裾部を流れる平安時代の溝・遺構８から出土した。254・255は溝の底付近で約３ｍの間隔をあけて出土しており、256・257は溝８の排土から採集した。遺構８の上面・上層では11世紀後半頃の瓦器椀160などが出土しているが、中・下層では瓦器が出土しない。ただ、中・下層で出土する黒色土器椀161・162の形態が160に近いことから遺構８の機能していた時期は11世紀代と押さえている。以下、犂の部分名称については、木下論文[18]に準拠する。

254・255は、幹と枝を利用して犂床と犂柄を一木から作り出した長床犂で、256と257については同一個体で、やはり同タイプであったと考えられる。254・255はほぼ同じ規格で作られており、254は犂床と犂柄の一部のほかに犂柱が、255は犂床と犂柄が残存する。また、256は犂床の、257は犂柄の一部である。

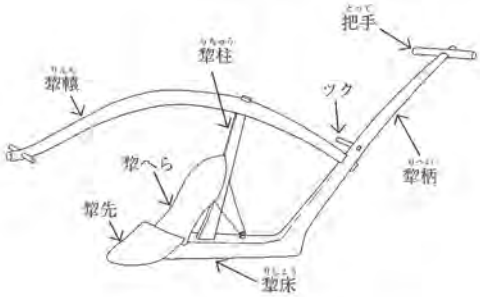


図42　犂の部分名称

犂254　犂床の長さは63.0ｃｍで、幅は先端部付近で約8.0ｍ、基部付近で6.0ｃｍを測る。高さは基部付近が7.0ｃｍ、先端部付近が5.0ｃｍで、先端から15.0ｃｍのところより前側を削りこんで犂先を装着するようにしている。削り面は（進行方向）右側が高くなることから、掘り起こした土は左側に耕転するようになっている。犂床上面には犂柱の前後に方形を呈するダボ穴がそれぞれ１箇所ずつ彫られている。前側のダボ穴は、犂へらを差し込んだ穴の可能性がある。後側のダボ穴は短いダボを差し込んで、犂へらに繋いだ紐を結んでへらを固定していたと考えられる。犂床の側面は左側が平らで右側が丸い。

後傾する犂柄は加工が甘く、断面は丸みを帯びる。高さ約27.0ｃｍの位置に犂轅を差し込む長方形の枘穴が穿たれているが、その部分から上が破損している。枘穴の位置が低いことから、弓形を呈する犂轅であったと考えることができる。

犂柱はわずかに後傾し、犂床に穿たれた枘穴に挿入され、楔によって固定される。犂柱は薄い板状で前方が少し抉られているが、これは犂へらを装着するための加工であると考えられる。また、犂柱に挿入された部分には方形の枘穴（写真７）が彫られており、別の部材を再利用した可能性がある。

樹種同定の結果にもあるように、材質は犂床・犂柄がブナ科コナラ属アカガシ亜属、犂柱がブナ科シイ属、楔がブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節であることがわかっている。

写真７　犂柄の枘穴（犂254）

犂255　犂床の長さは約63.0ｃｍで、幅は先端部付近で9.0ｃｍ、基部付近で7.0ｃｍを測る。高さは基部付近が7.0ｃｍ、先端部付近

が8.0ｃｍで、先端から約12ｃｍのところより前側を削りこんで犂先を装着するようにしている。254同様に削り面は右側が高くなっており、左耕転であることがわかる。犂床上面には犂柱の後側に1箇所、前側に2箇所のダボ穴が彫られている。ともに犂へらを装着・固定するのに使ったものと想定もできる。犂床の側面は左側が平らで、右側が丸い。

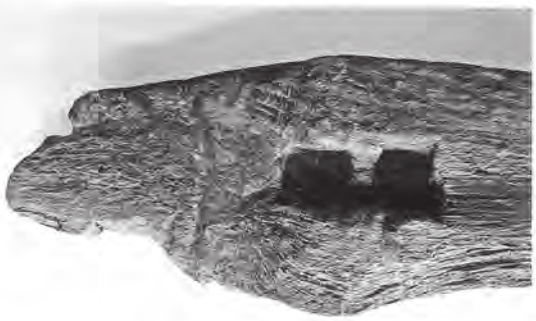


写真８　犂255の犂先部分

反り気味に後傾する犂柄は加工が甘く、丸みを帯びる。長さは68ｃｍ残存し、高約34ｃｍの位置に犂轅を差し込む長方形の枘穴が穿たれる。枘穴の位置が低いことから、弓形を呈する犂轅が装着されていたと考えられる。犂轅の枘穴の直上には直交するように方形の穴が穿かれており、犂を操作する時に使うツクを挿入したと考えられる。

犂柱は犂床の枘穴に組み込むようになっているが、枘穴の傾きから後傾していたと考えられる。

材質は樹種同定の結果、ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節であることが分かっている。

犂256・257　256は犂床の一部で、上面には方形のダボ穴が彫られている。長さ22.0cm以上で幅8.3cm、高さ8.2cmを測る。257は犂柄の一部で、長さが15.0cm残存しており、枘穴の痕跡がある。

犂の位置づけ　これまで発掘調査で出土した犂は、把握できるもので24点あり、西日本に集中している（表４）。また、大和・山城・河内など畿内中心部からの出土はなく、畿内周辺部に出土が目立つ。

ところで、昭和30年代頃まで使われていた犂の形態は、野田地区遺跡でみつかったような「長床犂」と床部分がない「無床犂」におおきく分けることができるが、これまで発掘調査で出土した形態が把握できるものはすべて長床犂に分類できる。ちなみに、長床犂は安定性が良いが深く耕せない、無床犂は深く耕せるが安定性に欠けるなど、それぞれ長所・欠点がある。両者の欠点を改良して床部分が短い短床犂が誕生したと言われている。

民俗学の河野通明氏は、長床犂が中国の影響を受けたもの、無床犂が朝鮮半島の影響を受けたものと考え、犂頭の形態では、杓子状を呈したものが中国の影響を受けたもの、床の幅で犂頭となったものが朝鮮半島の影響を受けたものとしている。その解釈から野田地区遺跡で出土した犂は、犂床の形態から言えば長床犂であることから中国系、犂頭の形態から見れば床の幅であることから朝鮮系であり、両者を折衷した形であるとした[19]。また、河野氏は犂が時代とともに変化しない農具と捉え、全国各地で民具資料として残されている犂の形態が異なるのは、６・７世紀に何処から犂が移入されたかに左右されたとした。ただ、発掘で出土した資料を時代を追って分類してみると、系譜ではなく時代とともに変化していっているようにもみえる。

ここで、変遷をおってみる。国内の犂は飛鳥時代のものが初現で、当時のものは梶原遺跡の例

表4　犂の出土例

	遺　跡　名	所　在　地	特　　徴	時　　期
1	下川津遺跡（A）	香川県坂出市川津町	杓子状犂頭　犂床と犂へらを一木　枘組み犂柄	7世紀初頭～後葉
2	下川津遺跡（B）	香川県坂出市川津町	杓子状犂頭　犂へら破片	6世紀後葉～8世紀初頭
3	梶原遺跡（A）	兵庫県丹波市市島町	杓子状犂頭　犂床と犂へらを一木　枘組み犂柄	7世紀中頃
4	梶原遺跡（B）	兵庫県丹波市市島町	杓子状犂頭　犂床と犂へらを一木　枘組み犂柄	7世紀中頃
5	川除・藤ノ木遺跡	兵庫県三田市川除	杓子状犂頭？　犂床と犂へらを一木？	7世紀中葉
6	屋代遺跡	長野県千曲市屋代	杓子状犂頭　犂床・柄の形代　一木犂柄	7世紀後葉
7	安坂・城の堀遺跡	兵庫県多可町中区	杓子状犂頭　犂床と犂へらを一木　枘組み犂柄	7～8世紀
8	西河原森ノ内遺跡	滋賀県野洲市西河原	杓子状犂頭　装着犂へら　枘組み犂柄	7世紀後葉の溝
9	川田川原田遺跡	滋賀県守山市川田	杓子状犂頭　装着犂へら　一木犂柄	8世紀の自然流路
10	郡山城下町遺跡	広島県安芸高田市吉田町	一木犂柄	8世紀の自然流路
11	南広間地遺跡	東京都日野市	犂轅	8世紀
12	中畑遺跡	滋賀県草津市矢倉	床幅犂頭　装着犂へら　一木犂柄	10世紀末の井戸
13	野田地区遺跡（254）	和歌山県有田郡有田川町	床幅犂頭　装着犂へら　一木犂柄	11世紀代の溝
14	野田地区遺跡（255）	和歌山県有田郡有田川町	床幅犂頭　装着犂へら　一木犂柄	11世紀代の溝
15	野田地区遺跡（256・257）	和歌山県有田郡有田川町	床幅犂頭？　一木犂柄？	11世紀代の溝
16	関津遺跡（A）	滋賀県大津市関津	床幅犂頭　装着犂へら　一木犂柄	13世紀の沼沢地
17	関津遺跡（B）	滋賀県大津市関津	撥状の犂頭　装着犂へら　枘組み犂柄	13世紀の沼沢地
18	関津遺跡（C）	滋賀県大津市関津	犂轅	13世紀の沼沢地
19	関津遺跡（D）	滋賀県大津市関津	犂轅	13世紀の沼沢地
20	関津遺跡（E）	滋賀県大津市関津	犂轅	13世紀の沼沢地
21	関津遺跡（F）	滋賀県大津市関津	一木犂柄	13世紀の沼沢地
22	藤田・門ノ坪遺跡	兵庫県加東郡社町	床幅犂頭　装着犂へら　一木犂柄	鎌倉時代以降
23	鴨谷遺跡	兵庫県加西市	床幅犂頭　装着犂へら　一木犂柄	鎌倉時代
24	辻田西遺跡	福岡県北九州市	床幅犂頭　装着犂へら　一木犂柄（未成品）	鎌倉時代

（図43）からも窺えるように長床で杓子状の犂頭を持ち、犂へらを犂床と一木で作り出したもので、犂柄を犂床に枘組みしている。同じ形態のものが下川津遺跡でも出土しており、河野氏はこれを大化の改新政府が地方に広めたタイプとする。7世紀後半頃には犂柄と犂床を一木でつくる一木犂柄のタイプが現れ、その後、一木犂柄が主流になる。また同じ時期に犂床と犂へらを一木で作るタイプがなくなり、装着犂へらに変化する。平安時代になると床幅犂頭が主となり、それ以降は関津遺跡の1例を除いて、野田地区遺跡のような床幅犂頭＋装着犂へら＋一木犂柄の形態にほぼ統一される。考古資料ではないが、鎌倉時代に書かれたとされる大津市聖衆来迎寺が所蔵する「六道絵」の犂耕図も同じ形態であることが窺える。

以上、古代から中世前半において犂は、時代とともに形態変化するのではないかと考えてみたが、少ない資料からの推察で、空論になる可能性も否めない。ただ、この仮定に立てば、民具資料において各地で数多く存在する犂の形態が中世後半以降に分化したことになるであろう。

7・8世紀の犂が多いのは、政府が推奨したからだとすると、平安時代の犂の出土例は前代のものに比べ少なく、犂はその後一気に普及しなかった可能性がある。延長5年(927)に撰進された「延喜式」に天皇の食事を担当する内膳司の農場で牛を用いて馬鍬や犂を引かせていることが記されている。また、10世紀後半頃に書かれた「宇

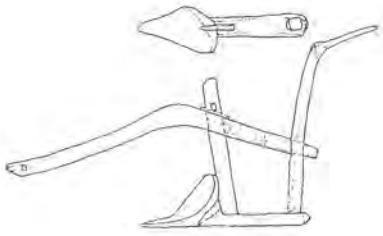


図43　梶原遺跡出土犂[20]

津保物語」には、紀伊国牟婁郡の長者神南備種松の家では田20町歩ほど作り、「牛どもに犂をかけつつ、男ども緒持ちて鋤く」と記されている。各農家が牛を保有していたとは考えがたく、階層的に限られた場所で犂が使用されたとすれば、野田地区遺跡の近く中央と関係した人物か豪農層が住んでいたと推定することもできよう。

ところで、中畑遺跡の例では、犂が井戸の作り替え時に行われた祭祀に使用されている。また、野田地区遺跡の性格については、先にも触れたように、古墳時代から中世にかけて水に関る祭祀をおこなっていた場所と推定した。野田地区遺跡の犂254・255は、溝の底で出土しているが、その間からは図版6－3にもあるように完形の土師器椀163・台付皿166が伏せられた状態で出土しており、犂が祭祀に用いられたことも十分考慮する必要があろう。

註

（1）「Ⅱ野田地区遺跡」『野田・藤並地区遺跡』和歌山県教育委員会1985年
『野田地区遺跡発掘調査概報』吉備町教育委員会1986年

（2）吉松敏隆「地理的環境」『田殿・尾中遺跡』吉備町教育委員会1982年の図2を一部改変して転載

（3）『土生池遺跡第1次発掘調査概報』吉備町教育委員会1984年
『土生池遺跡第二次発掘調査概報』吉備町教育委員会1985年

（4）「Ⅲ藤並地区遺跡」『野田・藤並地区遺跡』和歌山県教育委員会1985年
『藤並地区遺跡発掘調査報告書』財団法人和歌山県文化財センター1995年

（5）『平成12年度吉備町埋蔵文化財調査年報』吉備町教育委員会2001年

（6）『平成18年度有田川町埋蔵文化財調査年報』有田川町教育委員会2007年

（7）『田殿・尾中遺跡』吉備町教育委員会1982年
『田殿尾中遺跡発掘調査概報』財団法人和歌山県文化財センター1990年

（8）『旧吉備中学校校庭遺跡発掘調査報告書』有田川町遺跡調査会2008年

（9）前掲註（5）（6）、『天満Ⅰ遺跡発掘調査報告書』吉備町教育委員会2005年

（10）『天満1号墳（泣沢女の古墳）』吉備町教育委員会1994年

（11）『藤並地区遺跡発掘調査報告書』財団法人和歌山県文化財センター1995年

（12）『天満Ⅰ遺跡発掘調査報告書』吉備町教育委員会2005年

（13）乗岡実「備前焼擂鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会2000年

（14）前掲註（10）から転載

（15）和歌山県史編さん委員会編『和歌山県史　古代史料1』和歌山県1981年

（16）『小松原Ⅱ遺跡（湯川氏館跡）発掘調査概報Ⅶ』御坊市遺跡調査会1991年

（17）小型有稜高杯の時代的な位置づけは、中野咲氏のご教示による

（18）木下忠『日本農耕技術の起源と伝統』雄山閣出版1985年

（19）河野通明氏に実見してもらいコメントをいただいた。詳細は和歌山県文化財センターHPに載せている。

（20）『梶原遺跡B地区出土の犂』梶原遺跡発掘調査団・兵庫考古学研究会1993年から転載

参考文献

『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』和歌山県教育委員会 2007 年

『吉備町の文化財』吉備町文化財保護審議会・吉備町教育委員会 2005 年

『角川地名大辞典 30 和歌山県』角川書店 1985 年

『六大 A 遺跡発掘調査報告（木製品編）』三重県埋蔵文化財センター 2000 年

『出土建築材資料集　縄文・弥生・古墳時代』小矢部市教育委員会 2005 年

『木器集成図録　近畿原始編』奈良国立文化財研究所 1993 年

『木器集成図録　近畿古代編』奈良国立文化財研究所 1984 年

『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター 2006 年

『城之越遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1992 年

仁井田好古編『紀伊続風土記』第 2 輯臨川書店 1990 年

和歌山県史編さん委員会編『和歌山県史　原始・古代』和歌山県 1994 年

（財）和歌山県文化財センター編『謎の古代豪族　紀氏』誠文堂出版 1999 年

『有田川下流域の仏像』和歌山県立博物館 1997 年

東村純子「野田地区遺跡出土の機織具－上細井型経送具の諸例－」『紀伊考古学研究第 10 号』紀伊考古学研究会 2007 年

『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会 1984 年

『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』大阪府教育委員会財団法人大阪府文化財協会 1995 年

中野咲「古墳時代中・後期における土師器高杯の変遷と地域性」『吾々の考古学和田晴吾先生還暦記念論集』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会 2008 年

中野咲「古墳時代中・後期における土師器の地域色－奈良盆地の事例について－ 」古代学研究会 3 月例会資料 2009 年

中野　咲「「韓式系土器」分布論の現状と課題」『奈良県立橿原考古学研究所論集第 15』奈良県立橿原考古学研究所 2008 年

浜中邦弘・田中元浩「古墳時代中期の土器編年と実年代－宇治市街遺跡の検討をもとに－」『日本考古学協会第 73 回総会』日本考古学協会 2007 年

河内一浩「吉備・観音寺の甍雑考－有田郡内古代末から中世瓦の系譜と編年－」『紀伊考古学研究創刊号』紀伊考古学研究会 1998 年

河野通明「滋賀県川田川原田遺跡出土犂の伝来事情とその後」『商業論叢』第 39 巻第 4 号神奈川大学経済学会 2004 年

河野通明「7 世紀出土一木犂へら長床犂についての総合的考察」『商業論叢』第 40 巻第 2 号神奈川大学経済学会 2004 年

河野通明「民具の犂調査にもとづく大化改新の長床犂導入政策の復元」『ヒストリア』188 号大阪歴史学会 2004 年

『西河原森ノ内遺跡第 1・2 次発掘調査概要』中主町教育委員会・中主町埋蔵文化財調査会 1987 年

『滋賀埋文ニュース』第 102 号滋賀県埋蔵文化財センター 1988 年

『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団 1990 年

『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県教育委員会 1992 年

『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 26』日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター 1999 年

『安坂・城の堀遺跡』中町教育委員会 1997 年

『中畑遺跡』滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 2005 年

『辻田西遺跡』（財）北九州市教育文化事業団 1982 年

『関津遺跡』滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 2005 年

第５章　理化学的分析

第１節　植物珪酸体分析

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

１.はじめに

野田地区遺跡において行われた発掘調査で沖積地より土壌試料が採取された。以下にこの土壌試料について行った植物珪酸体分析の結果を示し、遺跡周辺のイネ科植物の変遷や農耕について検討した。

２.試料と分析方法

分析用試料はＩ－Ｂ区の土層断面より１試料（Ａ試料）、Ｉ－Ａ区の土層断面より３試料（Ｂ～Ｄ）の計４試料が採取された。各試料について、Ａ試料は遺構７上層の暗赤褐色のシルト質砂、Ｂ資料（堆積層第13層）はオリーブ黒色のシルト質砂、Ｃ試料（堆積層第21層）は黒色の砂質粘土で、礫が混入している。Ｄ試料（堆積層第25層）は黒褐色の有機質粘土で、植物遺体が散在している。時期について、Ａ試料はおおよそ13世紀、Ｂ試料がおおよそ５世紀、Ｃ試料がおおよそ４世紀、Ｄ試料がおおよそ３世紀と考えられている。植物珪酸体分析はこれら４試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02ｇのガラスビーズ（直径約0.04mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体についてガラスビーズが300個に達するまで行った。

３.分析結果

同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各機動細胞珪酸体個数を求め（表５）、それらの分布を図44に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料１ｇ当りの検出個数である。

表５　試料１ｇ当たりの機動細胞珪酸体個数

試料	イネ	イネ穎破片	ネザサ節型	クマザサ属型	他のタケ亜科	ヨシ属	シバ属	キビ族	ウシクサ族	不明
番号	（個／ｇ）	（個／ｇ）	（個／ｇ）	（個／ｇ）	（個／ｇ）	（個／ｇ）	（個／ｇ）	（個／ｇ）	（個／ｇ）	（個／ｇ）
A	6,200	1,000	76,900	8,300	2,100	0	1,000	3,100	17,700	15,600
B	1,800	0	14,700	0	900	0	0	900	2,700	3,700
C	2,200	0	244,400	25,400	1,100	3,300	0	2,200	50,900	24,300
D	7,900	0	106,800	14,500	0	1,300	0	1,300	21,100	13,200

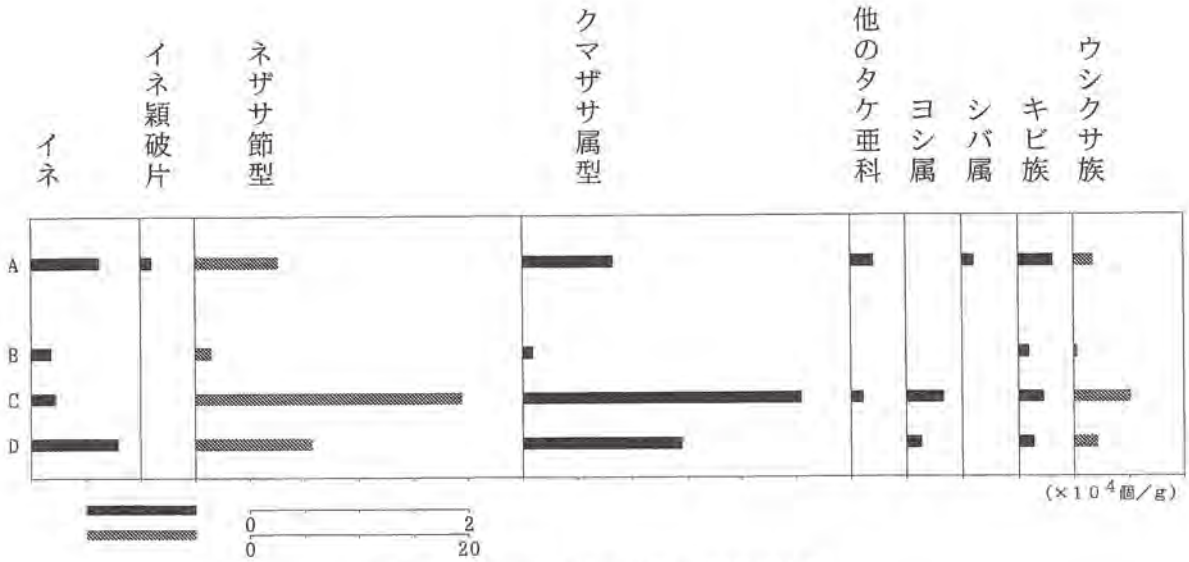


図44　野田地区遺跡の植物珪酸体分布図

検鏡の結果、全試料よりイネの機動細胞珪酸体が検出された。個数的にはD試料が最も多く約8,000個、B，Cが少なく約2,000個であった。また、A試料よりイネの穎（籾殻）の部分に形成される珪酸体の破片がわずかながら検出されている。最も多く観察されたのはネザサ節型で、C試料では約244,000個を示しており、D試料でも100,000個を越えている。次いでウシクサ族が多く、C試料では約50,000個が得られている。クマザサ属型はC，D試料で20,000個前後を示しており、キビ族は2,000個前後であるが全試料で観察されている。その他、ヨシ属がC，D試料で、シバ属はA試料で若干得られている。

4. イネについて

上記したように、全試料よりイネの機動細胞珪酸体が検出された。ここで検出個数の目安を示すと、イネの機動細胞珪酸体が試料1g当り5,000個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原，1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、機動細胞珪酸体の産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。野田地区遺跡ではA，D試料で5,000個を越えており、検出個数のみからは稲作が行われていた可能性は高いと判断される。しかしながらこれらの試料採取地点は流路と考えられていることから稲作が行われていた可能性は低く、イネの機動細胞珪酸体はこれら流路の周辺で行われていた稲作地よりもたらされたと推測されよう。また、何かに用いられていた稲藁、あるいはその灰が流路内にもたらされ、その結果イネの機動細胞珪酸体が検出されたことも考えられる。こうしたことから稲作についてはさらに検討が必要と考えるが、少なくともD試料（第25層）堆積期、すなわちおおよそ3世紀には野田地区遺跡にイネが存在していたことは

言えるであろう。

5. 遺跡周辺のイネ科植生

上記したように、おおよそ３世紀～４世紀頃の野田地区遺跡では流路周辺において稲作が行われていた可能性が推察される。こうしたなか、流路の土手部や遺跡周辺に成立していたと推測される森林の林縁部などの日のあたる開けたところにケネザサやゴキダケといったネザサ節型のササ類が多く生育していたとみられる。またススキやチガヤなどのウシクサ族も同じような所に生育していたと推測され、ススキ－ケネザサ群集といった草地を形成していたとみられる。一方、スズダケやミヤコザサなどのクマザサ属型のササ類は遺跡周辺の森林の下草的存在で生育していたとみられる。また流路内にはヨシ、ツルヨシといったヨシ属が生育していたと推測される。

おおよそ５世紀と考えられているＢ試料においてネザサ節型やクマザサ属型、ウシクサ族などが大きく検出個数を下げている。これについて、試料は砂が卓越していることから多くの植物珪酸体は流失している可能性が考えられ、イネ科植生としては前の時期と大きくは変わっていないと推察される。

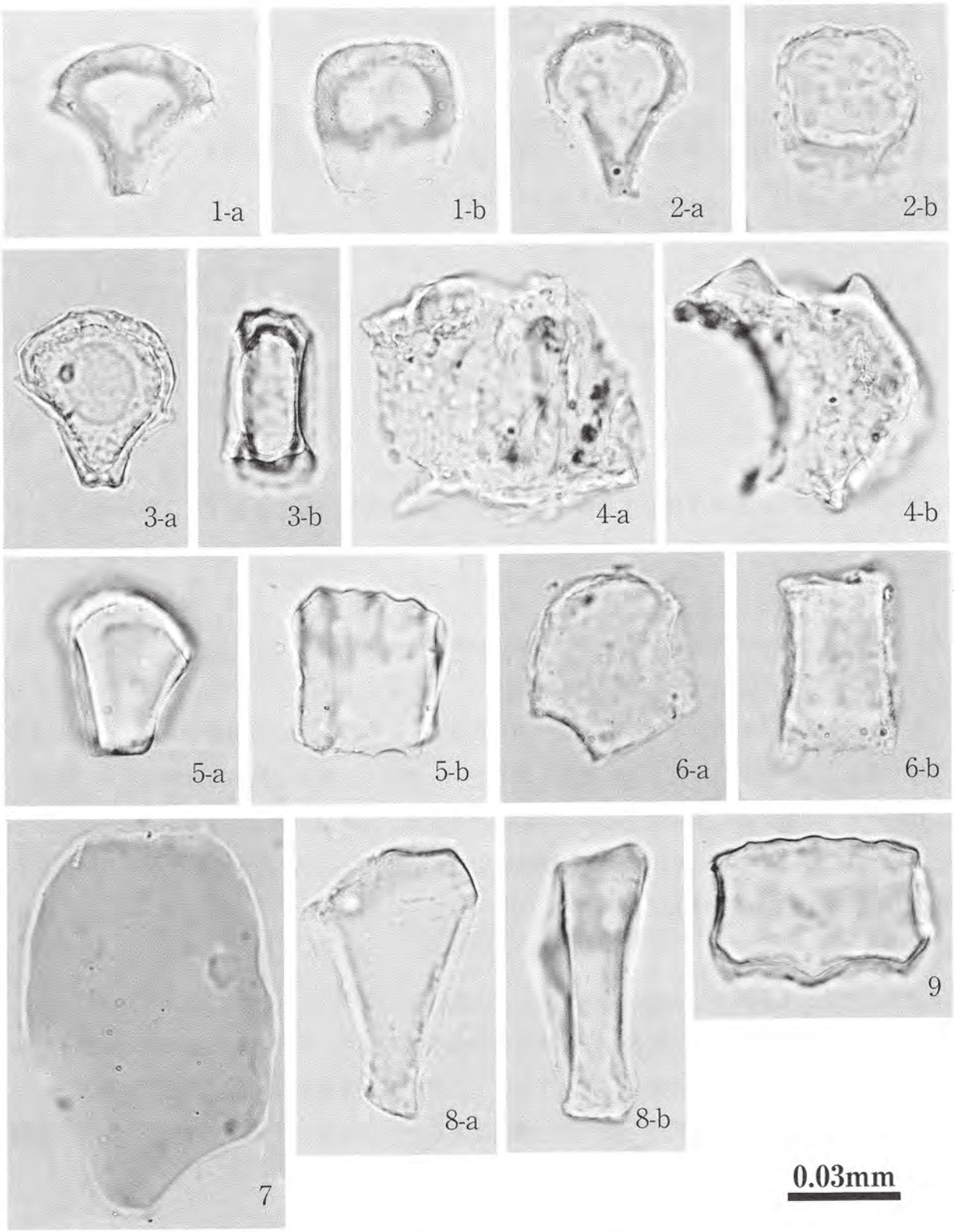
おおよそ 13 世紀（Ａ試料）の野田地区遺跡周辺では依然として稲作が行われていた可能性が推察される。またネザサ節型のササ類やウシクサ族も多く生育していたとみられるが、３世紀～４世紀頃よりはやや縮小したと推測され、クマザサ属型のササ類も同様である。

なお、全試料で検出されているキビ族についてはその形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、イヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類が難しく不明であるが、ここでは稲作にともなう雑草類（タイヌビエなど）ではないかと思われる。

また気候については、現在の関西地方の山麓や丘陵地に最も普通にみられるケネザサ（北村・村田，1984）と推測されるネザサ節型が多く検出されていることから、現在とさほど変わらない気候であったと思われるが、クマザサ属型もやや多く得られていることから現在より多少冷涼であった可能性も推察されよう。

引用文献

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－．考古学ジャーナル．227,2－7.
北村四郎・村田　源（1984）改訂版 原色日本植物図鑑 木本編〔Ⅱ〕．545 p．保育社.



1～3：イネ（a：断面、b：側面）1：A、2：C、3：D
4：イネ穎破片　A
5：ネザサ節型（a：断面、b：側面）A
6：クマザサ属型（a：断面、b：側面）C
7：ヨシ属（断面）C
8：ウシクサ族（a：断面、b：側面）C
9：キビ族（側面）C

写真９　野田地区遺跡の植物珪酸体

第２節　木製品の樹種調査

（株）吉田生物研究所

１.試料

試料は和歌山県野田地区遺跡から出土した農具７点、紡織具２点、服飾具１点、家具２点、容器１点、建築部材９点、用途不明品１点の合計23点である。

２.観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

３.結果

樹種同定結果（針葉樹３種、広葉樹５種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）マキ科マキ属イヌマキ（*Podocarpus macropyllus* Sweet）

（遺物 270・271・274・284・290・307・313）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はゆるやかであり、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～２個ある。短冊型をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続（ストランド）をなして存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。イヌマキは本州（中･南部）、四国、九州、琉球に分布する。

２）ヒノキ科ヒノキ属（*Chamaecyparis* sp.）（遺物 312）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～２個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州(福島以南)、四国、九州に分布する。

３）ヒノキ科アスナロ属（*Thujopsis* sp.）（遺物 232・233・243・245・259・260・261・269）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナ

ロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

4）ブナ科コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）

（遺物 242・251・252・254－A）

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管（～200 μm）が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1～3細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州（宮城、新潟以南）、四国、九州、琉球に分布する。

5）ツバキ科サカキ属サカキ（*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.）

（遺物 262）

散孔材である。木口では極めて小さい道管（～50 μm）が単独ないし2～4個複合して平等に分布する。柾目では道管は階段穿孔と側壁に対列ないし階段壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、高さ～1.5mm からなる。木繊維の壁には有縁壁孔が一列に多数並んでいるのが見られる。サカキは本州 (茨城、石川以西南)、四国、九州に分布する。

6）バラ科リンゴ属ズミ節（Malus Miller Sect. Sorbomalus Zabel）（遺物 258）

散孔材である。木口では小道管（～50 μm）が単独のときに2、3個複合して分布する。年輪始めに分布密度が高め。軸方向柔細胞は散在状である。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。更にかすかにらせん肥厚が見られる。木繊維の壁は厚い。放射組織は平伏細胞からなり同性。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ～1.0mm 以下となる。ズミ節はオオウラジロノキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。

7）ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節（Sect.Prinus Loudon syn. *Diversipilosae,Dentatae*）

（遺物 254－C・255）

環孔材である。木口では大道管（～380 μm）が年輪界にそって1～3列並んで孔圏部を形

成している。孔圏外では急に大きさを減じ、薄壁で角張っている小道管が単独あるいは２～３個複合して火炎状に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織は全て平状細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ、ミズナラ、カシワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

８）ブナ科シイ属（*Castanopsis* sp.）（遺物 254 －Ｂ）

環孔性放射孔材である。木口では孔圏部の道管（～ 300 μ m）は単独でかつ大きいが接線方向には連続しない。孔圏外に移るにしたがって大きさを減じ、放射方向に火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は平状細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型で柵状の壁孔がある。板目では多数の単列放射組織が見られる。シイ属にはツブラジイとスダジイがあるが、ツブラジイに見られる集合～複合放射組織の出現頻度が低いた為区別は難しい。シイ属は本州（福島、佐渡以南）、四国、九州、琉球に分布する。

参考文献

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）
北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）
深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

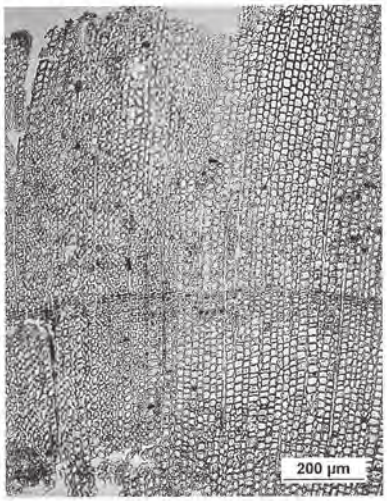
◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-Fi1

表６　樹種同定表

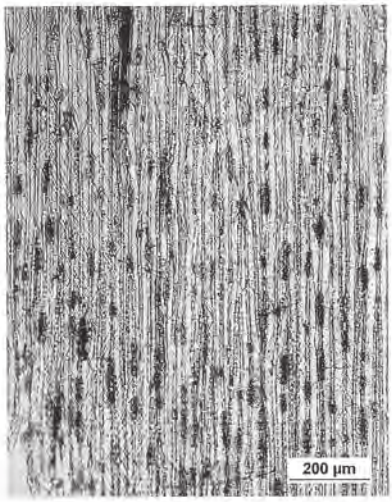
番号	品名	樹種	番号	品名	樹種
232	机	ヒノキ科アスナロ属	260	タタリ	ヒノキ科アスナロ属
233	建築部材	ヒノキ科アスナロ属	261	椅子	ヒノキ科アスナロ属
242	横槌	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	262	木錘	ツバキ科サカキ属サカキ
243	用途不明	ヒノキ科アスナロ属	269	経送具	ヒノキ科アスナロ属
245	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属	270	建築部材	マキ科マキ属イヌマキ
251	横槌	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	271	建築部材	マキ科マキ属イヌマキ
252	横槌	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	274	建築部材	マキ科マキ属イヌマキ
254 －Ａ	犂（犂床）	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	284	建築部材	マキ科マキ属イヌマキ
254 －Ｂ	犂（犂柱）	ブナ科シイ属	290	建築部材	マキ科マキ属イヌマキ
254 －Ｃ	犂（くさび）	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節	307	建築部材	マキ科マキ属イヌマキ
255	犂	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節	312	建築部材	ヒノキ科ヒノキ属
258	横槌	バラ科リンゴ属ズミ節	313	梯子	マキ科マキ属イヌマキ
259	桧扇	ヒノキ科アスナロ属			

1）マキ科マキ属イヌマキ



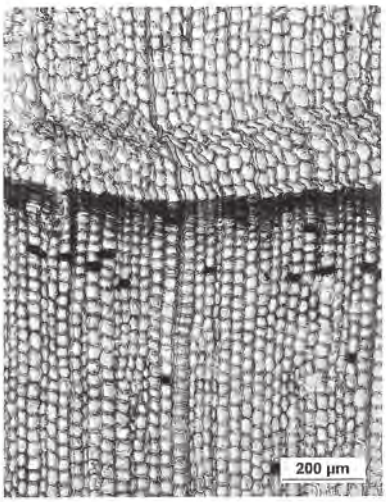
木口

柾目

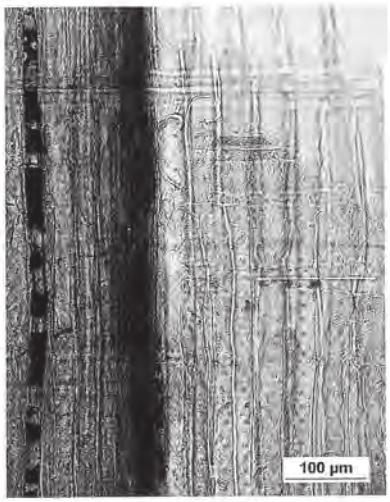


板目

2）ヒノキ科ヒノキ属



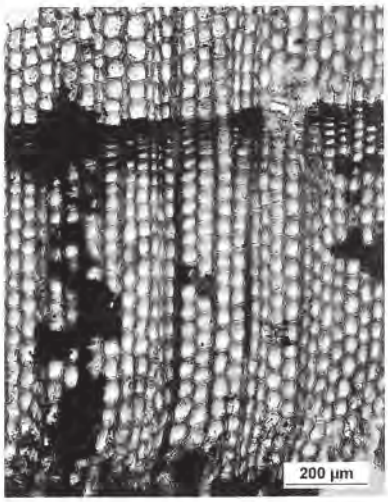
木口



柾目

板目

3）ヒノキ科アスナロ属



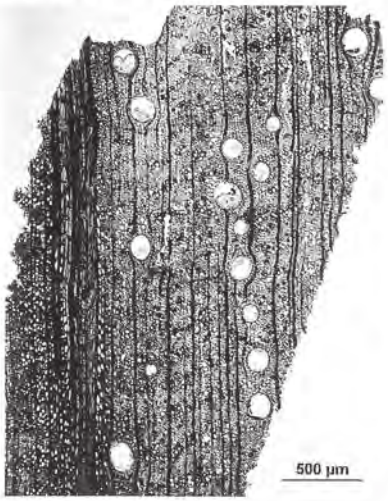
木口

柾目

板目

写真 10　木製品の樹種調査（顕微鏡写真）

4）ブナ科コナラ属アカガシ亜属

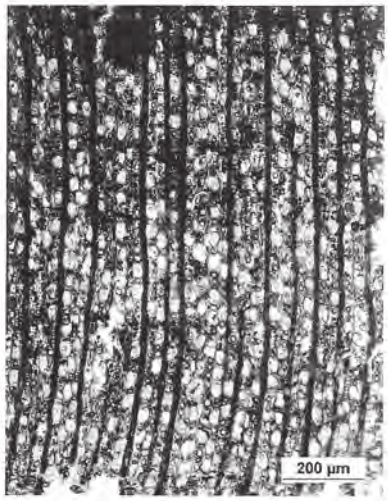


木口

柾目

板目

5）ツバキ科サカキ属サカキ



木口

柾目

板目

6）バラ科リンゴ属ズミ節

木口

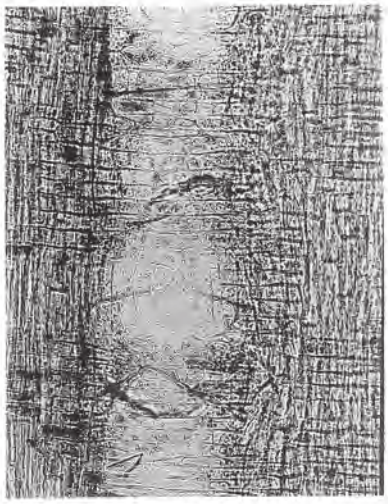
柾目

板目

写真 11　木製品の樹種調査（顕微鏡写真）

7）ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節

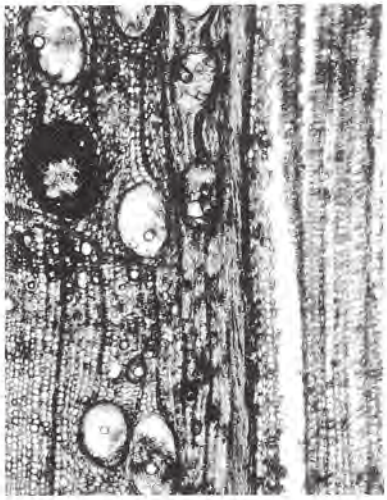
木口



柾目

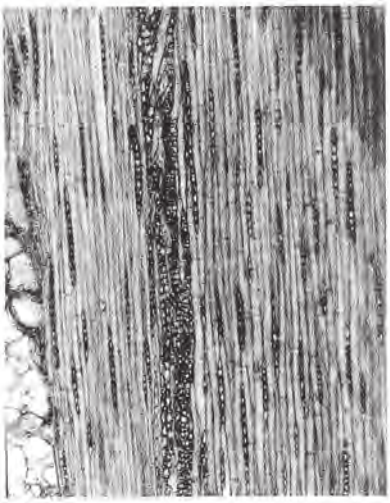
板目

8）ブナ科シイ属



木口

柾目



板目

写真 12　木製品の樹種調査（顕微鏡写真）

遺構一覧表（1）

報告書遺構番号	報告書調査区	旧番号（年度・調査区・番号）	遺構種類	規模・法量 長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	備考
Ⅰ区 1	Ⅰ－A	05・Ⅰ－A・1	溝	3.8 以上	1.0	0.4	瓦器・土師器・須恵器・陶器(1)	北東と南西側調査区域外　1980 年度５区 SD－２の延長？　江戸時代
Ⅰ区 2	Ⅰ－A	05・Ⅰ－A・2	土坑	4.2 以上	2.0 以上	0.6	土師器	西と南側調査区域外　２段落ち　最下層有機物多い　鎌倉時代
Ⅰ区 3	Ⅰ－A	05・Ⅰ－A・3	溝	2.8 以上	2.0 以上	1.0 以上	瓦器(2)　土師器	ほとんど調査区域外　遺構７と同一？　鎌倉時代
Ⅰ区 4	Ⅰ－A	05・Ⅰ－A・4	溝	4.7 以上	2.1 以上	0.8 以上	土師器(3・4)　須恵器(5) 木製品(232・233)	ほとんど調査区域外　遺構 10 と同一？布留式期
Ⅰ区 5	Ⅰ－B	06・Ⅰ・5	溝	9.5 以上	3.6	0.6	陶器(115)　青磁(114)　土師器	1980 年度４区ＳＤ－１の延長？　室町時代
Ⅰ区 6	Ⅰ－B	06・Ⅰ・6	溝	10.0 以上	4.2	0.8	瓦器(116～125)　土師器(126・127) 瓦　瓦質土器　木製品(234・235)	1980 年度４区ＳＤ－２の延長？　鎌倉時代
Ⅰ区 7	Ⅰ－B	06・Ⅰ・7	溝	14.5 以上	7.0	0.8	瓦器(128～149)　土師器(150～155) 東播系須恵器(156)　白磁(157)　青磁(158) 国産陶器　小刀(159)　木製品(236～244)	1980 年度４区ＳＤ－３の延長？　鎌倉時代　３時期
Ⅰ区 8	Ⅰ－B	06・Ⅰ・8	溝	14.5 以上	6.0	1.0	瓦器(160)　黒色土器(161・162) 土師器(163～166)　木製品(245～257)	1980 年度４区ＳＤ－４あるいは５の延長？　平安時代
Ⅰ区 9	Ⅰ－B	06・Ⅰ・9	溝	14.5 以上	3.5 以上	1.0	土師器(171～174)　須恵器(175～180) 黒色土器　木製品(258・259)	1980 年度４区ＳＤ－６あるいは７の延長？　古墳時代から平安時代
Ⅰ区 10	Ⅰ－B	06・Ⅰ・10	溝	13.0 以上	7.5	1.8	土師器(181～216)　韓式系土器(217・218) 木製品(260～318)	1980 年度４区ＳＤ－９の延長？　古墳時代前期～中期
Ⅰ区 11	Ⅰ－B	06・Ⅰ・11	溝					1980 年度４区ＳＤ－10 の延長？
Ⅰ区 12	Ⅰ－B	06・Ⅰ・12	土坑	1.7 以上	0.6 以上	0.4	木製品(269)	古墳時代中期
Ⅱ区 1	Ⅱ－A Ⅱ－C Ⅱ－D Ⅱ－E	06・Ⅱ－1・1 06・Ⅱ－3・2 06・Ⅱ－4・6 07・Ⅱ・2	溝	90 以上	0.6～1.0	0.5	瓦器(320～323)　土師器(324～328) 東播系須恵器(329)　鉄釘(330)　瓦質土器	南北方向に走る　鎌倉時代
Ⅱ区 2	Ⅱ－B	06・Ⅱ－2・1	溝	11.5 以上	3.0	0.3	瓦器　土師器　瓦質土器　須恵器	南北方向に走る　北と南側調査区域外
Ⅱ区 3	Ⅱ－B	06・Ⅱ－2・11	土坑	3.4	2.4	0.1		東側側溝で削平
Ⅱ区 4	Ⅱ－B	06・Ⅱ－2・2	土坑	1.7 以上	1.3	0.2	土師器	遺構２より新　南側調査区域外
Ⅱ区 5	Ⅱ－B	06・Ⅱ－2・8	土坑	0.75 以上	0.75	0.15		南側側溝で削平
Ⅱ区 6	Ⅱ－B	06・Ⅱ－2・9	土坑	0.5	0.3 以上	0.15	土師器	西側調査区域外
Ⅱ区 7	Ⅱ－B	06・Ⅱ－2・10	土坑	0.55	0.55	0.05		遺構２・３と重複
Ⅱ区 8	Ⅱ－B	06・Ⅱ－2・5	溝？	0.6 以上	0.3	0.08	土師器	
Ⅱ区 9	Ⅱ－B	06・Ⅱ－2・7	ピット	0.34	0.28	0.13		
Ⅱ区 10	Ⅱ－B	06・Ⅱ－2・6	ピット	0.5	0.35	0.13		２段落ち
Ⅱ区 11	Ⅱ－B	06・Ⅱ－2・4	ピット	0.3	0.25	0.08	土師器	
Ⅱ区 12	Ⅱ－B	06・Ⅱ－2・3	ピット	0.25	0.18	0.13		南側調査区域外
Ⅱ区 13	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・15	土坑	0.9 以上	0.9	0.17		北側側溝で削平
Ⅱ区 14	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・14	土坑	1.2 以上	1.25	0.18		北側側溝で削平　二段落ち
Ⅱ区 15	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・12	土坑	0.6 以上	0.45	0.14	軒丸瓦(331)	北側側溝で削平
Ⅱ区 16	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・11	土坑	2.0 以上	0.75	0.16		東側調査区域外
Ⅱ区 17	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・9	溝	1.55	0.2	0.13		
Ⅱ区 18	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・8	溝	3.05	0.65	0.13		北東側調査区域外
Ⅱ区 19	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・18	ピット	0.45	0.35	0.08		遺構 18 と重複
Ⅱ区 20	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・19	ピット	0.24	0.21	0.14	土師器	遺構 18 と重複
Ⅱ区 21	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・17	ピット	0.35	0.29	0.2	瓦器	遺構 22 と重複
Ⅱ区 22	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・10	土坑	0.95	0.65	0.08		遺構 21 と重複
Ⅱ区 23	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・13	土坑	1.5	1.3	0.15		
Ⅱ区 24	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・17	ピット	0.17	0.17	0.1	瓦器	
Ⅱ区 25	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・16	ピット	0.45	0.32	0.07		
Ⅱ区 26	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・25	ピット	0.3	0.27	0.07		
Ⅱ区 27	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・24	ピット	0.13	0.13	0.05		
Ⅱ区 28	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・7	ピット	0.31	0.3	0.22		
Ⅱ区 29	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・6	土坑	0.88	0.88	0.27	土師器	
Ⅱ区 30	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・5	土坑	0.95	0.6	0.1		
Ⅱ区 31	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・4	土坑	0.5	0.4	0.09		
Ⅱ区 32	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・23	ピット	0.2	0.17	0.08		
Ⅱ区 33	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・22	ピット	0.22	0.17	0.07		
Ⅱ区 34	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・21	ピット	0.27	0.24	0.11		
Ⅱ区 35	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・20	ピット	0.19	0.19	0.07		
Ⅱ区 36	Ⅱ－C	06・Ⅱ－3・3	溝	2.7	0.7	0.2	瓦器　土師器	
Ⅱ区 37	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・8－3	ピット	0.35 以上	0.35	0.18		
Ⅱ区 38	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・8	土坑	1.3	0.55	0.1		
Ⅱ区 39	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・8－2	ピット	0.4	0.39	0.3	瓦器　土師器　瓦	
Ⅱ区 40	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・8－1	ピット？	0.26 以上	0.24	0.08	瓦器　土師器	
Ⅱ区 41	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・7	溝	4.5 以上	0.35	0.05	瓦器	
Ⅱ区 42	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・4	溝	8.1 以上	1.3	0.2	瓦器(332)　土師器	
Ⅱ区 43	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・3	溝	8.0	0.85	0.1	瓦器　土師器　瓦	
Ⅱ区 44	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・10	ピット	0.3	0.25	0.26	瓦器　土師器	
Ⅱ区 45	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・15	土坑？	1.3 以上	0.35 以上	0.08		遺構 47 と重複
Ⅱ区 46	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・9	溝？	1.2 以上	0.25	0.1		遺構 42 と重複
Ⅱ区 47	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・5	溝	6.9 以上	0.3	0.1	瓦器(334・335)　土師器(333)	遺構 41・42・43 と重複
Ⅱ区 48	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・13	溝	5.2	0.3	0.05		
Ⅱ区 49	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・1	土坑	1.8	0.8	0.05		
Ⅱ区 50	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・12	竪穴住居	4.0 以上	0.85 以上	0.1	弥生土器(319)	弥生時代後期　直径約７mの円形住居
Ⅱ区 51	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・－	溝		0.2～0.35	0.1	弥生土器	竪穴住居 50 壁溝
Ⅱ区 52	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・－	柱穴	0.35	0.28 以上	0.35		竪穴住居 50 柱穴
Ⅱ区 53	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・－	ピット	0.35 以上	0.08 以上	0.22		竪穴住居より新しい
Ⅱ区 54	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・－	土坑？	2.0 以上	0.3 以上	0.12		竪穴住居より新しい
Ⅱ区 55	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・14	ピット	0.35	0.27	0.07		
Ⅱ区 56	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・2	土坑	1.4 以上	1.0 以上	0.07		
Ⅱ区 57	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・－	土坑	0.8	0.4	0.05		
Ⅱ区 58	Ⅱ－D	06・Ⅱ－4・11	ピット	0.35	0.35	0.14		
Ⅱ区 59	Ⅱ－E	07・Ⅱ・1	水田				瓦器　土師器　近世陶器	
Ⅱ区 60	Ⅱ－E	07・Ⅱ・3	溝	3.0	1.6	0.3	瓦器(336)	
Ⅱ区 61	Ⅱ－E	07・Ⅱ・4	土坑	0.53	0.4		瓦器	
Ⅱ区 62	Ⅱ－E	07・Ⅱ・5	土坑	1.8 以上	0.6 以上	0.09		
Ⅱ区 63	Ⅱ－E	07・Ⅱ・－	土坑	1.1 以上	0.8 以上			

遺構一覧表（2）

報告書遺構番号	報告書調査区	旧番号（年度・調査区・番号）	遺構種類	規模・法量 長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	備考
Ⅲ区 1	Ⅲ－A	07・Ⅰ・1	溝	1.4 以上	0.8	0.12	土師器	遺構 2 より新
Ⅲ区 2	Ⅲ－A	07・Ⅰ・16	土坑？	09 以上	0.6 以上	0.09		遺構 1 より古
Ⅲ区 3	Ⅲ－A	07・Ⅰ・15	土坑？	0.5 以上	0.4 以上	0.09		遺構 2 より新
Ⅲ区 4	Ⅲ－A	07・Ⅰ・17	溝	1.8 以上	0.4	0.08		
Ⅲ区 5	Ⅲ－A	07・Ⅰ・2	ピット	0.27	0.18	0.07	須恵器　瓦器	掘立柱建物の柱穴
Ⅲ区 6	Ⅲ－A	07・Ⅰ・3	ピット	0.3	0.3	0.21	瓦器　土師器	掘立柱建物の柱穴
Ⅲ区 7	Ⅲ－A	07・Ⅰ・7	ピット	0.4	0.4	0.22	瓦器　土師器	掘立柱建物の柱穴
Ⅲ区 8	Ⅲ－A	07・Ⅰ・18	ピット	0.32 以上	0.29	0.24		
Ⅲ区 9	Ⅲ－A	07・Ⅰ・4	土坑	0.66	0.3	0.13		
Ⅲ区 10	Ⅲ－A	07・Ⅰ・5	ピット	0.26	0.24	0.09	瓦器(341)	
Ⅲ区 11	Ⅲ－A	07・Ⅰ・6	ピット	0.42	0.4	0.25	瓦器　土師器	
Ⅲ区 12	Ⅲ－A	07・Ⅰ・－	土坑	0.54	0.12	0.18		
Ⅲ区 13	Ⅲ－A	07・Ⅰ・8	ピット	0.42	0.34	0.15	瓦器　土師器	
Ⅲ区 14	Ⅲ－A	07・Ⅰ・－	ピット	0.34	0.17	0.11		
Ⅲ区 15	Ⅲ－A	07・Ⅰ・－	ピット	0.36	0.26	0.1		
Ⅲ区 16	Ⅲ－A	07・Ⅰ・－	ピット	0.24	0.24	0.16		
Ⅲ区 17	Ⅲ－A	07・Ⅰ・－	ピット	0.17	0.16	0.11		遺構 18 より新
Ⅲ区 18	Ⅲ－A	07・Ⅰ・－	ピット	0.37 以上	0.31	0.11		遺構 17 より古
Ⅲ区 19	Ⅲ－A	07・Ⅰ・－	ピット	0.18	0.18	0.13		遺構 20 と重複
Ⅲ区 20	Ⅲ－A	07・Ⅰ・－	ピット	0.34	0.24	0.13		遺構 19 と重複
Ⅲ区 21	Ⅲ－A	07・Ⅰ・－	ピット	0.39	0.29	0.16		
Ⅲ区 22	Ⅲ－A	07・Ⅰ・－	ピット	0.3	0.3	0.17		
Ⅲ区 23	Ⅲ－A	07・Ⅰ・－	ピット	0.3	0.3	0.17		
Ⅲ区 24	Ⅲ－A	07・Ⅰ・10	ピット	0.38	0.25	0.15	土師器	
Ⅲ区 25	Ⅲ－A	07・Ⅰ・11	溝	3.7	1.6	0.3		
Ⅲ区 26	Ⅲ－A	07・Ⅰ・－	土坑	0.64 以上	0.22 以上	0.15		
Ⅲ区 27	Ⅲ－A	07・Ⅰ・12	溝	5.8 以上	1.2	0.5		
Ⅲ区 28	Ⅲ－A	07・Ⅰ・13	土坑	0.76	0.63	0.2		
Ⅲ区 29	Ⅲ－A	07・Ⅰ・9	溝	3.5	1.8	0.5	瓦器(344)　須恵器　軒平瓦(345)	遺構 27 より新
Ⅲ区 30	Ⅲ－B	07・Ⅰ・－	土坑	0.75	0.4 以上	0.07		東側側溝で削平
Ⅲ区 31	Ⅲ－B	07・Ⅰ・－	土坑	0.7	0.35 以上	0.09		東側側溝で削平
Ⅲ区 32	Ⅲ－B	07・Ⅰ・－	土坑	0.9	0.45 以上	0.24		西側攪乱で削平
Ⅲ区 33	Ⅲ－B	07・Ⅰ・20	土坑	2.05 以上	0.9 以上	0.29		西側攪乱で削平
Ⅲ区 34	Ⅲ－B	07・Ⅰ・19	土坑	2.35	2.0	0.68	瓦器(342・343)　土師器　平瓦	南の一部分攪乱される
Ⅲ区 35	Ⅲ－B	07・Ⅰ・－	溝	3.8 以上	0.8	0.11		
Ⅲ区 36	Ⅲ－A	07・Ⅰ・－	柱列					
Ⅳ区 1	Ⅳ	05・Ⅱ・1	落ち込み				近世陶磁器・瓦など多量	水田形成以前の谷
Ⅳ区 2	Ⅳ	05・Ⅱ・－	土坑	1.35	0.5	0.07		
Ⅳ区 3	Ⅳ	05・Ⅱ・－	土坑	1.65	0.5	0.07		
Ⅳ区 4	Ⅳ	05・Ⅱ・－	ピット	0.37	0.34	0.11		
Ⅳ区 5	Ⅳ	05・Ⅱ・5	溝	3.4	0.85	0.17	須恵器　瓦器　土師器	南東側調査区域外　北西側攪乱
Ⅳ区 6	Ⅳ	05・Ⅱ・6	ピット	0.38	0.32	0.15		
Ⅳ区 7	Ⅳ	05・Ⅱ・7	ピット	0.38 以上	0.32	0.13	土師器	
Ⅳ区 8	Ⅳ	05・Ⅱ・8	ピット	0.3	0.14 以上	0.17	土師器	東側側溝で削平
Ⅳ区 9	Ⅳ	05・Ⅱ・9	ピット	0.26	0.24	0.09	瓦器　土師器	27・10 より新
Ⅳ区 10	Ⅳ	05・Ⅱ・10	ピット	0.26	0.26	0.13	瓦器　土師器　須恵器	27 より新
Ⅳ区 11	Ⅳ	05・Ⅱ・11	ピット	0.25	0.24	0.12	瓦器　土師器	27 より新
Ⅳ区 12	Ⅳ	05・Ⅱ・12	ピット	0.3	0.28	0.11		
Ⅳ区 13	Ⅳ	05・Ⅱ・13	ピット	0.32	0.22	0.12		
Ⅳ区 14	Ⅳ	05・Ⅱ・14	ピット	0.33	0.24 以上	0.09	土師器	北側調査区域外
Ⅳ区 15	Ⅳ	05・Ⅱ・15	ピット	0.28	0.24	0.17	瓦器　土師器	
Ⅳ区 16	Ⅳ	05・Ⅱ・16	ピット	0.3	0.24 以上	0.15	瓦器　土師器　須恵器	北側調査区域外　44 より新
Ⅳ区 17	Ⅳ	05・Ⅱ・17	ピット	0.28	0.28	0.14		
Ⅳ区 18	Ⅳ	05・Ⅱ・18	ピット	0.32	0.27	0.14	瓦器　土師器	
Ⅳ区 19	Ⅳ	05・Ⅱ・19	ピット	0.32	0.31	0.17		18 より新
Ⅳ区 20	Ⅳ	05・Ⅱ・20	ピット	0.3	0.16	0.16		北側調査区域外
Ⅳ区 21	Ⅳ	05・Ⅱ・21	ピット	0.26	0.24	0.14		
Ⅳ区 22	Ⅳ	05・Ⅱ・22	ピット	0.34	0.3	0.2	瓦器　土師器	
Ⅳ区 23	Ⅳ	05・Ⅱ・23	ピット	0.35	0.32	0.23	瓦器　土師器	24 より新
Ⅳ区 24	Ⅳ	05・Ⅱ・24	ピット	0.21	0.17 以上	0.14		
Ⅳ区 25	Ⅳ	05・Ⅱ・25	土坑	0.7 以上	0.6 以上	0.09		北東調査区域外
Ⅳ区 26	Ⅳ	05・Ⅱ・26	溝	2.1 以上	0.45	0.14	土師器	南西側攪乱
Ⅳ区 27	Ⅳ	05・Ⅱ・27	溝	1.6 以上	0.6	0.1	土師器	南西側攪乱
Ⅳ区 28	Ⅳ	05・Ⅱ・28	ピット	0.22	0.22	0.16		
Ⅳ区 29	Ⅳ	05・Ⅱ・29	ピット	0.27	0.26	0.2	土師器	
Ⅳ区 30	Ⅳ	05・Ⅱ・30	ピット	0.44 以上	0.16 以上	0.21	土師器	
Ⅳ区 31	Ⅳ	05・Ⅱ・31	落ち込み	9.0 以上	8.5 以上	0.2	瓦器(351～355)　土師器(356～361) 東播系須恵器(362)　国産陶器(363) 青白磁(364)　白磁(365)　青磁(366) 瓦質土器　瓦(367)	落ち際に杭列
Ⅳ区 32	Ⅳ	05・Ⅱ・32	土坑	2.8 以上	0.55 以上	0.17	瓦器　土師器(368)	西側側溝で削平　31 の底で検出
Ⅳ区 33	Ⅳ	05・Ⅱ・33	土坑	1.15	0.75	0.23	瓦器　土師器	31 の底で検出
Ⅳ区 34	Ⅳ	05・Ⅱ・34	土坑	0.65	0.58	0.08	瓦器(369)	31 の底で検出
Ⅳ区 35	Ⅳ	05・Ⅱ・35	土坑	3.3	2.0	0.22		
Ⅳ区 36	Ⅳ	05・Ⅱ・－	ピット	0.24	0.23	0.15		
Ⅳ区 37	Ⅳ	05・Ⅱ・－	ピット	0.22	0.22	0.15		
Ⅳ区 38	Ⅳ	05・Ⅱ・－	ピット	0.32	0.26	0.3		36・37 より新
Ⅳ区 39	Ⅳ	05・Ⅱ・－	ピット	0.26	0.26	0.05		
Ⅳ区 40	Ⅳ	05・Ⅱ・－	ピット	0.32	0.3	0.15		二段落ち
Ⅳ区 41	Ⅳ	05・Ⅱ・－	ピット	0.23	0.2	0.12		
Ⅳ区 42	Ⅳ	05・Ⅱ・－	ピット	0.29	0.29	0.05		43 より新
Ⅳ区 43	Ⅳ	05・Ⅱ・－	ピット	0.22	0.2 以上	0.07		44 より新
Ⅳ区 44	Ⅳ	05・Ⅱ・－	ピット	0.3	0.22 以上	0.04		北側調査区域外　43・16 より古

※土坑とピットの区別は、長さが 0.5 m以上のものを土坑、それ未満をピットとしている

出土遺物観察表（1）

法量の（）内の数値は復元値

遺物番号	図版	調査区地区	遺構層位	種類器種	口径cm	高さcm	底径cm	残存率	色調（内・外・断面）（釉・露胎部・断面）	形態・技法	備考
1	図8	Ⅰ－A	遺構1	陶器 天目碗	(10.9)	－	－	口縁部 15%	10YR2/1(黒)・7.5YR4/2(灰褐)・10YR8/3(浅黄橙)	口縁部外反	胎土密　反転復元
2	図8	Ⅰ－A	遺構3 第3層	瓦器 椀	－	－	5.0	底部 100%	N4/(灰)・N3/(暗灰)・2.5Y7/1(灰白)	高台畳付丸い 見込み部「W」字状の暗文	胎土密
3	図8	Ⅰ－A	遺構4 i層	土師器 高杯	(14.9)	12.1	(10.6)	70%	10YR8/3(浅黄橙)・2.5YR6/6(橙)・2.5Y8/1(灰白)2.5YR7/4(淡赤橙)	裾部緩やかに外反 脚柱部内面粘土ラセン巻上げ痕 杯部内底部平坦	胎土1.5㎜以下のチャート・長石などを含む　二次焼成を受ける　一部反転復元
4	図8	Ⅰ－A	遺構4 i層	土師器 高杯	－	－	－	脚部 70%	10YR6/3(にぶい黄橙)・10YR6/3(にぶい黄橙)・10YR7/2(にぶい黄橙)	脚柱部内面粘土ラセン巻上げ痕 外面ヘラミガキ	胎土1.5㎜以下のチャートなどを多く含む
5	図8	Ⅰ－A	遺構4 i層	須恵器 壺	－	－	－	体部 30%	N6/(灰)・5Y6/1(灰)・5PB6/1(青灰)	肩部張る　体部上半カキ目のちナデ・下半平行タタキ　内面回転ナデ	胎土密　反転復元　陶質土器？
6	図8	Ⅰ－A F3・c22	堆積層 第1層	土師器 土釜	(29.1)	－	－	口縁部 5%	10YR6/3(にぶい黄橙)・10YR6/4(にぶい橙)・10GY4/1(暗緑灰)	口縁端部上方に拡張　端部は丸い	胎土1㎜大の結晶片岩・長石・チャートなどを多く含む　反転復元
7	図8	Ⅰ－A	堆積層 第2層	瓦器 椀	－	－	(5.2)	底部 30%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・5Y8/3(淡黄)	断面三角形の高台　全体的に摩滅	胎土密　反転復元
8	図8	Ⅰ－A	堆積層 第3層	瓦器 皿	(7.9)	1.9	－	25%	N5/(灰)・N4/(灰)・N7/(灰白)	内面ナデ　底部指押さえ	胎土密　反転復元
9	図8	Ⅰ－A	堆積層 第3層	土師器 小皿	(9.3)	1.5	(7.0)	30%	10YR8/3(浅黄橙)・10YR7/2(にぶい黄橙)・5YR7/6(橙)	底部平坦　回転糸切？	胎土密　0.5㎜以下のチャート粒を微量含む　反転復元
10	図8	Ⅰ－A	堆積層 第4層	瓦器 椀	(13.8)	－	－	口縁部 20%	内・外・断面とも10YR8/1(灰白)	外面一部ミガキ　内面の暗文不明	胎土密　反転復元
11	図8	Ⅰ－A	堆積層 第4層	土師器 小皿	(8.6)	1.5	－	70%	内・外・断面とも7.5YR7/3(にぶい橙)	全体的に摩滅　底部指押さえ	胎土1㎜前後のチャートなどを少し含む　反転復元
12	図8	Ⅰ－A	堆積層 第4層	土師器 小皿	(8.6)	1.3	－	30%	内・外・断面とも7.5YR7/3(にぶい橙)	底・体部の境不明瞭　ナデ　指押さえ	胎土密　反転復元
13	図8	Ⅰ－A	堆積層 第4層	白磁 碗	－	－	(7.0)	底部 50%	2.5Y7/2(灰白)・N8/(灰白)・N8/(灰白)	高台低い削り出し　体部外面整のケズリ 高台部露胎　見込み部圏線1条	胎土密　反転復元
14	図8	Ⅰ－A	堆積層 第12層	須恵器 高杯	－	－	8.8	底部 100%	5B5/1(青灰)～5B5/1(青灰)・N7/(灰白)	短脚　三角形の透かしを外方から4方向に穿つ	胎土密
15	図8	Ⅰ－A	堆積層 第13層	土師器 壺	(21.9)	－	－	口縁部 30%	7.5YR7/3(にぶい橙)・7.5YR8/2(灰白)・7.5YR6/1(褐灰)	二重口縁　口縁部直立　端部は上方に面　調整摩滅で不明	胎土1～2㎜の長石・チャートなどを多く含む　反転復元　弥生中期の壺？
16	図8 図版11	Ⅰ－A	堆積層 第13層	土師器 甕	18.1	33.0	丸底	90%	5Y8/2(灰白)・2.5Y8/3(浅黄)・N6/(灰)	長胴　口縁部緩やかに外反　口縁端部丸い 体部外面ナデ・内面ヘラケズリ	胎土3㎜までの長石・チャートなどを中量含む
17	図8 図版11	Ⅰ－A	堆積層 第13層	土師器 高杯	15.2	12.0	9.7	80%	10YR8/3(浅黄橙)・10YR8/2(灰白)・N3/(暗灰)	裾部緩やかに外反　杯部屈曲して開く 脚柱部内面ナデ	胎土1㎜前後のチャートなどを多く含む　結晶片岩微量含む
18	図8	Ⅰ－A	堆積層 第13層	土師器 高杯	－	－	9.8	脚部 100%	内・外・断面とも7.5YR7/4(にぶい橙)	裾部緩やかに外反 脚柱部内面粘土ラセン巻上げ痕	胎土1㎜までのチャートなどを多く含む
19	図8	Ⅰ－A	堆積層 第13層	土師器 高杯	－	－	－	脚柱部 90%	7.5YR7/4(にぶい橙)・7.5YR7/4(にぶい橙)・N3/(暗灰)	大型　裾部強く外反 脚柱部内面粘土巻上げ痕	胎土2㎜までの長石・チャートなどを多く含む　反転復元
20	図8	Ⅰ－A	堆積層 第13層	須恵器 高杯？	(16.0)	－	－	口縁部 5%	N7/(灰白)・N6/(灰)・N6/(灰)	杯部浅く　口縁端部上方に面 内外面回転ナデ	胎土1㎜までの長石・チャートなどを多く含む　蓋の可能性も　反転復元
21	図8	Ⅰ－A	堆積層 第13層	須恵器 高杯	－	－	11.8	40%	N6/(灰)・N6/(灰)・N8/(灰白)	長脚　2段の方形透しが4方向　杯部と脚部の境に1条の突帯　外面回転ナデ	胎土密　反転復元　陶質土器？
22	図8	Ⅰ－A	堆積層 第14層	土師器 壺	(21.3)	－	－	口縁部 30%	7.5YR8/3(浅黄橙)・7.5YR8/3(浅黄橙)・7.5YR7/1(明褐灰)	二重口縁　口縁端部拡張　内上方に面	胎土1㎜までの長石・チャートなど、微細な石英粒を多く含む　反転復元
23	図8 図版11	Ⅰ－A	堆積層 第14層	土師器小型丸底壺	－	－	丸底	90%	内・外・断面とも10YR8/3(浅黄橙)	体部下半ケズリのちナデ 体部上半強いナデ	胎土1㎜前後の長石・チャート・結晶片岩などを多く含む
24	図8 図版11-17	Ⅰ－A	堆積層 第14層	土師器 甕？	－	－	丸底	80%	7.5YR7/3(にぶい橙)・7.5YR8/3(浅黄橙)・7.5YR7/3(にぶい橙)	口縁部「く」の字に屈曲　底部やや平坦 体部粘土ラセン巻上げ痕顕著	胎土1～2㎜大の長石・チャートなどを多く含む　一部反転復元　スス付着
25	図8	Ⅰ－A	堆積層 第14層	土師器 甕	(13.6)	－	－	口縁部 25%	10YR5/4(褐灰)・10YR8/3(浅黄橙)・10YR8/3(浅黄橙)	口縁部緩やかに外反　口縁部内面・体部外面ハケ　体部内面板状工具ナデ	胎土1㎜までの長石・チャートなどを多く含む　反転復元
26	図8	Ⅰ－A	堆積層 第14層	土師器 甕	(15.4)	－	－	口縁部 45%	2.5Y7/2(灰黄)・10YR7/2(にぶい黄橙)・10GY4/1(暗緑灰)	口縁部「く」の字に屈曲　口縁端部外上方に面　体部外面ハケ	胎土1.5㎜以下の長石・チャートなどを中量含む　反転復元
27	図8 図版11	Ⅰ－A	堆積層 第14層	土師器 甕	13.2	－	－	口縁部 100%	10YR8/3(浅黄橙)・10YR8/3(浅黄橙)・2.5Y6/4(にぶい黄)	口縁部「く」の字に屈曲 体部外面不鮮明な平行タタキ	胎土1㎜以下のチャートなどを多量に含む
28	図8 図版11	Ⅰ－A	堆積層 第14層	土師器 鉢	14.9	6.7	丸底	95%	10YR8/3(浅黄橙)・10YR8/3(浅黄灰)・10YR5/1(褐灰)	口縁部緩やかに外反　体部外面粗いナデ 底部全面にスス付着	胎土1㎜前後のチャートなどを中量含む
29	図9 図版11	Ⅰ－A	堆積層 第14層	土師器 高杯	－	－	10.6	70%	2.5YR6/1(赤灰)・2.5YR7/4(淡赤橙)・N3/(暗灰)	裾部ゆるやかに外反　杯部屈曲 脚柱部内面ケズリ　二次焼成受ける	胎土1㎜前後の長石・チャートなどを多量に含む　一部反転復元
30	図9	Ⅰ－A	堆積層 第14層	土師器 高杯	－	－	12.7	脚部 100%	7.5YR8/3(浅黄橙)・7.5YR8/3(浅黄橙)・N3/(暗灰)	裾部ゆるやかに外反　脚柱部外面弱い面取り・内面強いナデ	胎土1㎜前後のチャートなどを多量に含む
31	図9	Ⅰ－A	堆積層 第14層	土師器 高杯	(14.4)	11.0	10.0	60%	7.5YR8/2(灰白)・7.5YR8/2(灰白)・10YR8/3(浅黄橙)	裾部緩やかに外反　脚柱部内面ヘラケズリ 杯部わずかに屈曲して開く	胎土0.5㎜以下の長石・チャートなどを少量含む　一部反転復元
32	図9 図版11	Ⅰ－A	堆積層 第14層	土師器 手捏鉢	10.0	6.3	丸底	90%	7.5YR5/1(褐灰)・7.5YR8/3(浅黄橙)・7.5YR5/1(褐灰)	椀形　内外面ナデ　二次焼成受ける	胎土1～2㎜大の長石・チャート・結晶片岩を多量に含む
33	図9 図版11	Ⅰ－A	堆積層 第14層	土師器 手捏鉢	7.9	4.7	丸底	80%	10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR8/2(灰白)・10YR5/1(褐灰)	椀形　内外面ナデ	胎土1㎜前後のチャートなど中量含む
34	図9 図版11	Ⅰ－A	堆積層 第14層	土師器 手捏鉢	7.2	5.3	丸底	100%	7.5YR7/2(明褐灰)・7.5YR7/2(明褐灰)	椀形　内外面ナデ　粘土巻上げ痕	胎土1㎜前後のチャートなど中量含む
35	図9	Ⅰ－A	堆積層 第14層	韓式系土器平底鉢	－	－	(8.0)	底部 20%	5YR7/3(にぶい橙)・5YR7/4(にぶい橙)・5YR7/3(にぶい橙)	平底　底部・体部外面ハケまたは平行タタキ　二次焼成を受ける	胎土1㎜前後の長石・チャートなど多量に含む　反転復元
36	図9 図版11-17	Ⅰ－A	堆積層 第14層	陶質土器 器台	19.1	45.2	(27.4)	70%	N7/(灰白)～N5/(灰白)・N7/(灰白)～N5/(灰白)・5Y7/2(灰白)	筒型　凹線・突帯で区画する5段の文様帯　上より刺突文1列＋三角形透かし・刺突文1列＋波状文1条＋方形透かし・波状文2条＋方形透かし・刺突文2列＋方形透かし・刺突文2列＋方形透かし　透かしは6方向	胎土密　一部反転復元
37	図9	Ⅰ－A	堆積層 第15・16層	土師器 甕	(15.6)	－	－	口縁部 20%	7.5YR7/3(にぶい橙)・7.5YR7/2(明褐灰)・7.5YR7/4(にぶい橙)	口縁部「く」の字に屈曲　端部外上方に面　口縁部内面・体部外面ハケ　体部内面ヘラケズリ	胎土1～2㎜大のチャートなど中量含む　反転復元
38	図9 図版12	Ⅰ－A	堆積層 第15・16層	韓式系土器平底鉢	(12.6)	9.2	8.0	80%	5YR7/6橙)・5YR6/4(にぶい橙)	平底　口縁部緩やかに外反 体部外面横ハケ・内面ヘラケズリ	胎土1.5㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む一部反転復元
39	図9	Ⅰ－A	堆積層 第15・16層	土師器 高杯	－	－	11.2	脚部 90%	10YR8/2(灰白)・10YR8/2(灰白)・2.5Y5/1(黄灰)	脚部スカート状に広がる 脚柱部内面粘土ラセン巻上げ痕	胎土1～2㎜のチャートなど中量含む

出土遺物観察表（2）

法量の（）内の数値は復元値

遺物番号	図 図版	調査区 地区	遺構 層位	種類 器種	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調（内・外・断面）（釉・露胎部・断面）	形態・技法	備考
40	図9 図版17	I－A	堆積層 第15・16層	土師器 高杯	—	—	(11.4)	脚部 70%	10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR7/2(にぶい黄橙)・10YR7/3(にぶい黄橙)	裾部緩やかに外反 脚柱部内面粘土ラセン巻上げ痕	胎土2㎜大の長石・チャートなどを少量含む 反転復元
41	図9 図版12	I－A	堆積層 第19層	土師器 壺	10.8	11.2	丸底	80%	10YR6/2(灰黄褐)・2.5Y8/2(灰白)・2.5Y7/2(灰黄)	体部球形 口縁部「く」の字に屈曲 体部内面上半ヘラケズリ	胎土1㎜以下のチャートなどを多量に含む
42	図9 図版12	I－A	堆積層 第19層	土師器 壺	14.3	—	丸底	40%	10YR6/3(浅黄橙)・10YR6/2(灰黄褐)・10YR8/3(浅黄橙)	体部卵形 口縁部「く」の字に屈曲 口縁端部丸くおさめる 体部外面平行タタキ・内面ヘラケズリ	胎土2.5㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む 一部反転復元
43	図9	I－A	堆積層 第19層	土師器 壺	(17.9)	—	—	口縁部 20%	10YR6/4(にぶい黄橙)・10YR7/4(にぶい黄橙)・10YR5/1(褐灰)	口縁部「く」の字に屈曲 口縁端部丸くおさめる 体部外面平行タタキ・内面ヘラケズリ	胎土1.5㎜以下のチャートなどを多量に含む 反転復元
44	図9	I－A	堆積層 第19層	土師器 壺	(16.0)	—	—	口縁部 60%	2.5Y6/2(灰黄)・2.5Y6/3(にぶい黄)・7.5YR5/4(にぶい褐)	口縁部「く」の字に屈曲 口縁端部内方に拡張・内上方に面 体部外面ハケ・内面ヘラケズリ	胎土0.5㎜以下の長石などを多量に含む 反転復元 色調・胎土などから搬入品？
45	図9	I－A	堆積層 第19層	土師器 壺	(14.6)	—	—	口縁部 40%	10YR8/3(浅黄橙)・10YR8/3(浅黄橙)・7.5YR5/1(褐灰)	口縁部「く」の字に屈曲 口縁端部内方に拡張 体部外面ハケ・内面ヘラケズリ	胎土1㎜前後のチャートなど多量に含む 反転復元
46	図9	I－A	堆積層 第19層	土師器 高杯	(17.2)	13.3	(11.8)	60%	2.5YR7/6(橙)+7.5YR8/4(浅黄橙)・7.5YR8/4(浅黄橙)・10YR8/3(浅黄橙)	裾部屈曲気味に外反 杯部の屈曲不明瞭 脚柱部外面ハケのち丁寧い面取り・内面ヘラケズリ	胎土1㎜以下の長石・チャート・結晶片岩などを多量に含む 一部反転復元
47	図9 図版12	I－A	堆積層 第19層	土師器 高杯	(15.8)	14.4	(11.9)	60%	5YR6/6(橙)・5YR6/6(橙)・10YR8/3(浅黄橙)	裾部屈曲して外反 杯部の口縁部わずかに屈曲して外反 脚柱部外面ヘラミガキ	胎土密 一部反転復元
48	図9	I－A	堆積層 第19層	土師器 高杯	—	—	(12.1)	60%	10YR6/3(にぶい黄橙)・10YR6/3(にぶい黄橙)・N3/(暗灰)	裾部強く外反 杯部の屈曲不明瞭 脚柱部内外面ヘラケズリ	胎土1㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む 一部反転復元
49	図9 図版12	I－A	堆積層 第19層	土師器 高杯	(13.0)	9.1	(8.4)	90%	10YR8/4(浅黄橙)+7.5YR7/6(橙)・5YR7/4(にぶい橙)・	脚部スカート状に広がる 内面粘土ラセン巻上げ痕 杯部皿形	胎土1㎜以下のチャート・クサリ礫などを中量含む
50	図10 図版12	I－A	堆積層 第20層	土師器 壺	11.4	—	—	口縁部 60%	10YR5/2(灰黄褐)・10YR7/2(にぶい黄橙)・10GY3/1(暗緑灰)	口縁部「く」の字に屈曲 口縁端部内方に拡張・上方に面 体部外面縦横のハケ ・内面ヘラケズリ	胎土1㎜以下の長石・チャートなど多量に含む 一部反転復元
51	図10	I－A	堆積層 第20・21層	土師器 壺	(24.6)	—	—	口縁部 20%	10YR4/1(褐灰)・2.5Y4/1(黄灰)・2.5Y3/1(黒褐)	二重口縁 口縁部斜め上方開く 口縁端部上方に面	胎土1.5㎜以下の長石・チャートなどを少量含む 反転復元
52	図10 図版12	I－A	堆積層 第20・21層	土師器 壺	(28.1)	—	—	口縁部 25%	10YR8/2(灰白)・10YR8/2(灰白)・N4/(灰)	二重口縁 口縁部内傾 口縁端部上方に面 外面ハケ	胎土1㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む 反転復元 四国系
53	図10 図版12	I－A	堆積層 第20・21層	土師器 壺	(11.8)	14.7	丸底	90%	10YR7/4(にぶい黄橙)・10YR7/3(にぶい黄橙)・2.5Y7/3(浅黄)	体部球形 二重口縁 口縁端部外上方に面 体部外面細かいハケ・内面指押さえ 底部スス付着	胎土0.5㎜以下の長石・チャート、3㎜大の結晶片岩を少量含む 一部反転復元
54	図10	I－A	堆積層 第20・21層	土師器 壺	(17.1)	—	—	口縁部 25%	10YR6/2(灰黄褐)・10YR8/3(浅黄橙)・10YR7/2(にぶい黄橙)	口縁部「く」の字に屈曲して直線的に開く 口縁端部は丸くおさめる 体部外面ハケ・内面ヘラケズリ	胎土1㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む 反転復元
55	図10 図版12	I－A	堆積層 第20・21層	土師器 壺	16.4	—	—	口縁部 80%	10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR8/2(灰白)・10YR3/1(黒褐)	口縁部「く」の字に屈曲して直線的に開く 口縁端部内方に拡張・上方に面 体部外面ハケ・内面ヘラケズリ	胎土1㎜以下の長石・チャートなどを中量含む 一部反転復元
56	図10	I－A	堆積層 第20・21層	土師器 壺	(13.4)	—	—	口縁部 25%	7.5YR7/4(にぶい橙)・7.5YR7/4(にぶい橙)・N3/(暗灰)	口縁部内湾ぎみ 口縁端部拡張・上方に面 体部内面ヘラケズリ	胎土1㎜以下の長石・クサリ礫などを多量に含む 反転復元
57	図10	I－A	堆積層 第20・21層	土師器 壺	(13.5)	—	—	口縁部 20%	10YR8/3(浅黄橙)・10YR8/3(浅黄橙)・10YR7/2(にぶい黄橙)	口縁部「く」の字に屈曲 口縁端部内方に拡張・上方に面 体部外面ハケ・内面ヘラケズリ	胎土1㎜以下の長石・チャートなど多量に含む 反転復元
58	図10	I－A	堆積層 第20・21層	土師器 壺	(12.1)	—	—	口縁部 30%	10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR8/3(浅黄橙)・2.5Y6/2(灰黄)	口縁部「く」の字に屈曲 口縁端部内方に拡張・内上方に面 体部内面ヘラケズリ 外面スス付着	胎土1㎜以下のチャートなどを中量含む 反転復元
59	図10	I－A	堆積層 第20・21層	土師器 高杯	(15.5)	11.5	(11.9)	40%	2.5Y8/3(淡黄)・2.5Y8/3(淡黄)・2.5GY2/1(黒)	裾部屈曲して外反 杯部浅い皿形 脚柱部内面ヘラケズリ	胎土1.5㎜以下の長石・チャートなどを中量含む 一部反転復元
60	図10	I－A	堆積層 第20・21層	土師器 高杯	(16.3)	—	—	60%	10YR8/2(灰白)・10YR7/4(にぶい黄橙)・N4/(灰)	裾部緩やかに外反 口縁部わずかに屈曲して長く延びる 脚柱部外面ハケのちナデ・内面ヘラケズリ	胎土1.5㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む 一部反転復元
61	図10 図版12	I－A	堆積層 第20・21層	土師器 高杯	(17.5)	14.0	12.2	70%	7.5YR7/6(橙)・7.5YR7/4(にぶい橙)・10YR7/4(にぶい黄橙)	裾部揺るやかに外反 杯部の体部と口縁部の境不明瞭 脚柱部内面ヘラケズリ	胎土1㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む 一部反転復元
62	図10	I－A	堆積層 第20・21層	土師器 高杯	(15.9)	—	—	60%	10YR8/3(浅黄橙)・10YR7/2(にぶい黄橙)・N3/(黒)	杯部わずかに屈曲して長く延びる 脚柱部外面ヘラミガキ・内面粘土ラセン巻上げ痕 杯体部ヘラミガキ	胎土1㎜以下の長石・チャートなどを少量含む
63	図10 図版13	I－A	堆積層 第20・21層	石器 砥石	長 20.5	幅 16.8	高 7.9			2面に使用痕 上面中央に敲打痕	砂岩製
64	図10 図版13	I－A	堆積層 第21層	土師器 壺	16.2	—	—	口縁部 95%	5YR7/6(橙)・7.5YR8/4(浅黄橙)・10YR8/3(浅黄橙)	口縁部直立したのち外反 端部外方に面 頸部刻み目を持つ突帯1条	胎土2.5㎜以下の長石・チャート・結晶片岩などを少量含む 一部反転復元
65	図10	I－A	堆積層 第21層	土師器 壺	(17.7)	—	—	口縁部 15%	10YR5/1(褐灰)・10YR5/1(褐灰)・10YR7/1(灰白)	口縁端部外に粘土帯 その上に5条の擬凹線 内面ヘラミガキ	胎土1㎜以下の長石・チャートなどを微量含む 反転復元 菊川式？
66	図10 図版13	I－A	堆積層 第21層	土師器小型丸底壺	(6.8)	8.4	丸底	90%	7.5YR6/4(にぶい橙)・7.5YR7/4(にぶい橙)・10YR7/2(にぶい黄橙)	体部球形 口縁部「く」の字に屈曲 体部外面ハケ	胎土1.5㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む 一部反転復元
67	図10 図版13	I－A	堆積層 第21層	土師器小型丸底壺	(9.1)	10.7	丸底	80%	7.5YR8/3(浅黄橙)・10YR7/3(にぶい黄橙)・7.5YR8/3(浅黄橙)	口縁部は頸部付近で屈曲して広がる 体部扁球形・外面ハケ	胎土1㎜以下の長石・チャート・クサリ礫などを中量含む 一部反転復元
68	図10	I－A	堆積層 第21層	土師器 甕	(15.8)	—	—	口縁部 25%	10YR4/1(褐灰)・10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR5/2(灰黄褐)	口縁部強く外反 口縁端部部分的に刻み目 体部外面平行タタキ	胎土1.5㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む 反転復元
69	図10	I－A	堆積層 第21層	土師器 甕	—	—	—		2.5Y7/2(灰黄)・2.5Y7/2(灰黄)・2.5YR7/3(浅黄)	口縁部内湾ぎみ 体部外面ハケ・ヘラ先による刺突文3箇所 内面ヘラケズリ	胎土1㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む 反転復元
70	図11	I－A	堆積層 第21層	土師器 壺	—	—	3.1	底部 100%	10YR5/2(灰黄褐)・10YR5/2(灰黄褐)・10YR7/2(にぶい黄橙)	底部中央大きくくぼむ スス付着	胎土0.5㎜以下の長石などを微量含む 一部反転復元
71	図11	I－A	堆積層 第21層	土師器 甕	—	—	4.2	底部 100%	10YR5/2(灰黄褐)・2.5YR5/2(暗灰黄)・10YR4/2(灰黄褐)	底部中央くぼむ 外面平行タタキ	胎土3㎜以下の長石・チャートなどを少量含む 一部反転復元
72	図11	I－A	堆積層 第21層	土師器 甕	—	—	4.6	底部 100%	7.5YR7/4(にぶい橙)・7.5YR7/4(にぶい橙)・10YR8/2(灰白)	底部中央小さくくぼむ 外面平行タタキ	胎土1㎜以下のチャートなどを少量含む 一部反転復元

出土遺物観察表（3）

法量の（）内の数値は復元値

遺物番号	図 図版	調査区 地区	遺構 層位	種類 器種	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調（内・外・断面）（釉・露胎部・断面）	形態・技法	備考
73	図11	Ⅰ－A	堆積層 第21層	土師器 甕	－	－	3.7	底部 100%	7.5YR5/2(灰褐)・10YR5/2(灰黄褐)・7.5YR6/3(にぶい褐)	底部中央大きくくぼむ　外面平行タタキ	胎土3㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む　一部反転復元
74	図11	Ⅰ－A	堆積層 第21層	土師器 製塩土器	－	－	2.6	脚台部 100%	2.5YR5/3(にぶい赤褐)・10YR5/1(褐灰)・10GY4/1(暗緑灰)	脚台部小さい　外面平行タタキ	胎土1㎜以下の長石・クサリ礫を微量含む　二次焼成　一部反転復元
75	図11	Ⅰ－A	堆積層 第21層	土師器 高杯	(16.8)	－	－	口縁部 30%	10YR8/2(灰白)・10YR7/2(にぶい黄橙)・10YR8/2(灰白)	口縁部屈曲して長く伸びる	胎土1.5㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む　反転復元
76	図11	Ⅰ－A	堆積層 第21層	土師器 高杯	－	－	－		10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR7/3(にぶい黄橙)・N3/(暗灰)	杯部屈曲　脚柱部内面粘土ラセン巻上げ痕・外面ヘラミガキ	胎土密　一部反転復元
77	図11	Ⅰ－A	堆積層 第21層	土師器 高杯	－	－	(14.7)	脚部 50%	7.5YR7/3(にぶい橙)・10YR8/3(浅黄橙)・10YR7/3(にぶい黄橙)	脚部傘状に開く　円穴5箇所？	胎土0.5㎜以下の長石・チャートなどを少量含む　一部反転復元
78	図11	Ⅰ－A	堆積層 第21層	土師器 高杯	－	－	－		10YR8/2(灰白)・10YR7/2(にぶい黄橙)・10YR7/1(灰白)	脚柱部ラッパ状に開く　下位に円穴4方向？　外面ヘラミガキ	胎土2.5㎜以下のチャートなどを少量含む　一部反転復元
79	図11	Ⅰ－A	堆積層 第21層	石器 砥石	長11.5以上	幅3.5	厚1.8		10BG5/1(青灰)		破損・剥離後も使用している。
80	図11 図版13	Ⅰ－A	堆積層 第23層	土師器 小型甕	10.8	9.0	3.4	90%	10YR6/2(灰黄褐)・7.5YR7/3(にぶい橙)・2.5GY4/1(暗オリーブ灰)	口縁部緩やかに外反　底部中央くぼむ　体部下半ヘラケズリ　体部内面板状工具によるナデ　頸部付近の内外面ハケ	胎土2.5㎜以下の長石などを中量含む
81	図11	Ⅰ－A	堆積層 第23層	土師器 高杯	－	－	－		10YR7/4(にぶい黄橙)・7.5YR7/3(にぶい橙)・N4/(灰)	中空で筒型の脚柱部　外面ヘラミガキ　裾部と脚柱部の境に円穴3箇所	胎土1.5㎜以下のチャートなどを少量含む
82	図11 図版13	Ⅰ－A	堆積層 第25層	土師器 壺	15.0	－	－	口縁部 80%	7.5YR6/4(にぶい橙)・7.5YR6/4(にぶい橙)・N4/(灰)	口縁端部垂下　外面に直線文＋竹管文を押す円形浮文　内面ヘラミガキ	胎土1㎜以下のチャートなどを中量含む　一部反転復元
83	図11	Ⅰ－A	堆積層 第25層	土師器 壺	(19.9)	－	－	口縁部 25%	10YR8/3(浅黄橙)・10YR6/3(浅黄橙)・10GY3/1(暗緑灰)	口縁部直線的に長く外頸　外面に条痕状の直線文	胎土2.5㎜以下の長石・チャートなどを少量含む　反転復元
84	図11	Ⅰ－A	堆積層 第25層	土師器 壺	(17.3)	－	－	口縁部 30%	10YR8/3(浅黄橙)・10YR8/2(灰白)・10YR8/2(灰白)	口縁部外反する　口縁端部下方にわずかに拡張	胎土5㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む　反転復元
85	図11	Ⅰ－A	堆積層 第25層	土師器 壺	12.1	－	－	口縁部 65%	5YR6/6(橙)・5YR6/6(橙)・10YR7/3(にぶい黄橙)	頸部短く直立　口縁部外反　口縁端部外方に面　口縁部内外面ヘラミガキ	胎土3㎜までの長石・チャートを少量含む　一部反転復元
86	図11 図版13	Ⅰ－A	堆積層 第25層	土師器 甕	16.4	21.8	4.5	60%	2.5Y7/3(浅黄)・7.5YR8/3(浅黄橙)・2.5Y8/3(浅黄)	口縁部「く」の字に屈曲　体部卵形　体部外面平行タタキ・内面板状工具によるナデ	胎土2㎜以下の長石・チャートなどを少量含む　一部反転復元
87	図11	Ⅰ－A	堆積層 第25層	土師器 甕	(19.1)	－	－	口縁部 20%	内・外・断面とも10YR7/2(にぶい黄橙)	口縁部「く」の字に屈曲　体部外面平行タタキ	胎土2.5㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む　反転復元
88	図11 図版13	Ⅰ－A	堆積層 第25層	土師器 甕	12.2	15.7	3.7	80%	10YR7/3(にぶい黄橙)・7.5YR7/4(にぶい橙)・7.5YR6/3(にぶい褐)	口縁部「く」の字に強く屈曲　底部中央くぼむ　体部外面平行タタキ	胎土2.5㎜以下の長石・チャートなどを少量含む
89	図11	Ⅰ－A	堆積層 第25層	土師器 甕	(16.9)	－	－	口縁部 25%	10YR8/3(浅黄橙)・10YR4/1(褐灰)・2.5Y8/2(灰白)	口縁部ゆるやかに外反して長くのびる　体部外面平行タタキ	胎土2㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む　反転復元
90	図11	Ⅰ－A	堆積層 第25層	土師器 甕	－	－	4.7	底部 100%	10YR7/3(にぶい橙)・10YR7/3(にぶい橙)・10GYR3/1(暗緑灰)	底部中央くぼむ　外面平行タタキ　内面板状工具によるナデ	胎土3㎜以下の長石・チャートなどを少量含む
91	図11	Ⅰ－A	堆積層 第25層	土師器 甕	－	－	4.2	底部 100%	10YR7/2(にぶい黄橙)・10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR8/2(灰白)	外面平行タタキ　内面板状工具によるナデ	胎土2.5㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む
92	図11 図版13	Ⅰ－A	堆積層 第25層	土師器 高杯	(22.7)	－	－	80%	10YR8/2(灰白)・2.5Y8/3(淡黄)・10YR8/2(灰白)	口縁部屈曲して長くのびる　脚部中実　杯・脚部ヘラミガキ　円穴2箇所	胎土2.5㎜大の長石・チャートなどを少量含む
93	図11	Ⅰ－A	堆積層 第25層	土師器 高杯	(18.5)	－	－	杯部 30%	10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR7/3(にぶい黄橙)・N4/(灰)	杯部屈曲して外反　口縁部内面ヘラミガキ	胎土密　反転復元
94	図11	Ⅰ－A	堆積層 第25層	土師器 高杯	(24.5)	－	－	杯部 20%	10YR7/4(にぶい黄橙)・2.5Y6/2(灰黄)・5GY4/1(暗オリーブ灰)	杯部浅く口縁部わずかに屈曲して外反	胎土2㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む　反転復元
95	図11	Ⅰ－A	堆積層 第25層	土師器 高杯	－	－	－	脚部 70%	10YR7/2(にぶい黄橙)・10YR7/2(にぶい黄橙)・10YR8/2(灰白)	脚柱部中実　裾部円穴4箇所	胎土2㎜以下のチャートなどを微量含む　一部反転復元
96	図11	Ⅰ－A	堆積層 第25層	土師器 高杯	－	－	－		7.5YR7/2(にぶい橙)・10YR6/4(にぶい橙)・N4/(灰)	中空で筒型の脚柱部　外面ヘラミガキ	胎土2㎜以下の長石・チャートなどを少量含む
97	図11	Ⅰ－A	堆積層 第25層	土師器 高杯	(12.6)	11.1	(19.0)	50%	内外ともN4/(灰)、10YR8/3(浅黄橙)・断面N5/(灰)、10YR8/2(灰白)	杯部椀形　口縁部外面直線文　杯部内面ヘラミガキ　脚柱部短く裾部大きく広がり上段2箇所、下段4箇所の円穴　脚部外面ヘラミガキ	胎土1㎜以下のチャートなどを微量含む　一部反転復元　庄内系短脚椀形高杯
98	図11 図版14	Ⅰ－A	堆積層 第25層	土師器 高杯	－	－	(9.9)	70%	2.5Y7/2(灰黄)・2.5Y6/3(にぶい黄)・N4/(灰)	杯部椀形　脚部短くスカート状に開く　4箇所に円穴	胎土3㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む
99	図11	Ⅰ－A	堆積層 第25層	土師器 大型鉢	－	－	－		N4/(灰)・10YR8/2(灰白)・10YR8/2(灰白)	体部から口縁部に内湾気味に続く　粗製　外面平行タタキ	胎土5㎜以下のチャートなどを少量含む
100	図12	Ⅰ－A	堆積層 第26層	土師器 甕	(19.5)	－	－	口縁部 20%	10YR7/2(にぶい黄橙)・2.5Y7/3(浅黄)・10YR7/2(にぶい黄橙)	口縁部「く」の字に強く屈曲　体部外面平行タタキ・内面ハケ状工具によるナデ	胎土5㎜以下の長石・チャートなどを少量に含む　一部反転復元
101	図12	Ⅰ－A	堆積層 第26層	土師器 壺	－	－	8.1	脚台部 100%	10YR6/4(にぶい黄橙)・10YR6/2(灰黄褐)	脚台部「ハ」の字に開く	胎土2㎜以下の長石・チャートなどを少量含む　東海のS字壺に類似
102	図12	Ⅰ－A	堆積層 第27層	土師器 壺	(22.6)	－	－	口縁部 10%	2.5Y7/2(灰黄)・2.5Y8/2(灰白)・2.5Y8/2(灰白)	口縁端部を上下に拡張　外方の面に直線文・竹管文を押す円形浮文　口縁部内面に同心円を利用した雑な波状文	胎土密　反転復元
103	図12 図版14	Ⅰ－A	堆積層 第27層	土師器 壺	16.9	－	－	口縁部 70%	10YR8/4(浅黄橙)・10YR8/4(浅黄橙)・5YR6/6(橙)	口縁端部外面に垂下する粘土帯　その外方面に浅い擬凹線　頸・体部外面ヘラミガキ　体部内面ハケ状工具によるナデ	胎土4㎜以下の長石・チャートなどを少量含む　菊川式？
104	図12 図版14	Ⅰ－A	堆積層 第27層	土師器 壺	11.7	16.5	3.9	80%	10YR7/4(にぶい黄橙)・10YR8/2(灰白)・10YR7/6(明黄褐)	口縁部「く」の字に屈曲　底部中央くぼむ　体部外面平行タタキ	胎土2㎜大のチャートなどを少量含む
105	図12 図版14	Ⅰ－A	堆積層 第27層	土師器 壺	(16.2)	－	(4.3)	20%	10YR3/1(黒褐)・2.5Y6/3(にぶい黄)　2.4Y 4/1(黄灰)・2.GY5/1(オリーブ灰)	口縁部「く」の字に屈曲して外反　底部中央くぼむ　体部外面平行タタキ・内面上部板状工具によるナデ	胎土5㎜以下の長石などを多く含む　反転復元
106	図12 図版14	Ⅰ－A	堆積層 第27層	土師器 壺	(19.1)	－	－	口縁部 75%	2.5Y6/2(灰黄)・5Y6/1(灰)・10YRY8/3(浅黄橙)	口縁部「く」の字に屈曲して外反	胎土5㎜以下の長石などを多量に含む　反転復元
107	図12	Ⅰ－A	堆積層 第21層	弥生土器 壺	(12.3)	－	－	口縁部 30%	5YR6/6(橙)・5YR6/6(橙)・10GY4/1(暗緑灰)	口縁端部上下に拡張　外面に凹線文　頸部に板状工具による櫛状文	胎土1㎜以下の長石・チャートなどを中量含む　反転復元
108	図12	Ⅰ－A	堆積層 第25層	弥生土器 壺	－	－	7.3	底部 100%	10YR6/2(灰黄褐)・7.5YR7/3(にぶい橙)・2.5GY4/2(暗オリーブ灰)	底部付近ヘラケズリ　底部中央焼成後円穴	胎土1㎜以下の長石・チャートなどを多量に含む
109	図12	Ⅰ－A	トレンチ	土師器 壺？	－	－	6.8～7.4	底部 100%	N3/(暗灰)・7.5YR8/3(浅黄橙)・7.5YR7/4(にぶい橙)	底部外方へ拡張　外面指押さえ	胎土密　5㎜までのチャートなどを微量含む
110	図12	Ⅰ－A	堆積層 第14層	土師器 鉢？	－	－	2.4	底部 100%	N3/(暗灰)・10YR8/2(灰白)・10YR8/2(灰白)	底部中央円穴　外面平行タタキ	胎4㎜までの長石・チャートなどを中量含む
111	図12	Ⅰ－A	トレンチ	土師器 壺	8.6	11.0	3.2	80%	10YR5/2(灰黄褐)・2.5Y7/2(灰黄)・10YR7/2(にぶい黄橙)	体部扁球形・ヘラミガキ　ドーナッツ底　口縁部「く」の字に屈曲して短く外傾	胎土密

出土遺物観察表（4）

法量の（）内の数値は復元値

遺物番号	図 図版	調査区 地区	遺構 層位	種類 器種	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調（内・外・断面）（釉・露胎部・断面）	形態・技法	備考
112	図12	I－A	トレンチ	土師器小型丸底壺	8.4	8.8	丸底	95%	10YR8/3(浅黄橙)・10YR8/3(浅黄橙)・N3/(暗灰)	口縁部直立気味に立ち上がる 体部外面ハケ・内面板状工具によるナデ	胎土 1.5mmまでのチャートなどを中量含む
113	図12	I－A	トレンチ	土師器小型丸底壺	－	－	丸底	80%	内・外・断面とも 7.5YR7/3(にぶい橙)	体部外面ヘラケズリ・内面強い指ナデ 口縁部ヨコナデ	胎土 1mmまでのチャートなどを多量に含む
114	図15	I－B F3・c17	遺構5 上層	青磁 碗	(16.8)	－	－	口縁部 15%	釉 7.5GY7/1(明緑灰) 胎土 10Y7/1(灰白)	口縁部外反	胎土密 釉光沢あり 反転復元
115	図15	I－B F3	遺構5 上層	備前焼 擂鉢	－	－	－	－	7.5YR4/1(褐灰)2.5YR6/4(にぶい橙)・2.5YR6/6(橙)・2.5YR6/6(橙)7.5YR4/1(褐灰	口縁部を上方へ大きく拡張	胎土 1mm前後の長石などを少量含む
116	図15 図版14	I－B F3・c 16	遺構6 中層	瓦器 椀	11.2	4.3	4.3	90%	N4/(灰)・10Y8/1(灰白)・10Y8/1(灰白)	断面三角形の高台 外面ミガキなし 内面同心円状暗文	胎土密
117	図15	I－B F3・c 17	遺構6 中層	瓦器 椀	(13.4)	4.9	4.2	50%	N4/(灰)・N4/(灰)・N8/（灰白）	断面三角形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状暗文	胎土密 一部反転復元
118	図15 図版14	I－B F3・c 17	遺構6 下層	瓦器 椀	13.4	4.8	5.3	80%	N4/(灰)・N4/(灰)N 7/（灰白）・N7/（灰白）	断面台形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状暗文	胎土密 少し歪む
119	図15	I－B F3・c 17	遺構6 下層	瓦器 椀	(13.5)	4.5	5.3～5.9	60%	N4/(灰)・N4/(灰)N 7/2（灰黄）・N7/（灰白）	断面台形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状暗文	胎土密 高台歪む 一部反転復元
120	図15 図版14	I－B F3・c 17	遺構6 下層	瓦器 椀	12.3～13.7	4.7	5.3～5.6	95%	N4/(灰)・N4/(灰)・N8/（灰白）	断面台形～三角形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状暗文	胎土密 歪みが大きい
121	図15	I－B F3・c 17	遺構6 下層	瓦器 椀	(11.6)	4.0	5.7	30%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・5Y8/1（灰白）	断面三角形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状暗文	胎土密 一部反転復元
122	図15	I－B F3・c 17	遺構6 最下層	瓦器 椀	(13.0)	3.7	5.1	55%	N4/(灰)・N4/(灰)・10Y7/1(灰白)	断面台形～三角形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状暗文	胎土 1mmまでの砂粒微量含む 一部反転復元
123	図15	I－B F3・c 17	遺構6 最下層	瓦器 椀	(13.0)	3.95	(6.4)	25%	N4/(灰)・N4/(灰)・N8/（灰白）	断面三角形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状暗文	胎土 1mmまでの砂粒微量含む 反転復元
124	図15 図版14	I－B F3・c 17	遺構6 最下層	瓦器 椀	13.3～13.6	4.6	5.1～5.3	100%	N4/(灰)・N4/(灰)・N8/（灰白）	断面三角形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状の暗文	胎土密
125	図15	I－B F3・c 17	遺構6 最下層	瓦器 皿	7.6～7.9	2.0	6.3	100%	N4/(灰)・N4/(灰)・N8/（灰白）	内外面ミガキなし	胎土密 少し歪む
126	図15	I－B F3・c 18	遺構6 最下層	土師器 皿	(12.8)	3.7		60%	内・外・断面とも 5YR7/4(にぶい橙)	外面指押さえ 顕著 内面雑なナデ	胎土密 部分的にスス付着 反転復元
127	図15	I－B F3・c 17	遺構6 下層	土師器 小皿	(8.0)	1.35		20%	内・外・断面とも 7.5YR7/4(にぶい橙)	底部指押さえ	胎土 1mmまでの砂粒微量含む 反転復元
128	図16	I－B F3・b 17	遺構7 中層	瓦器 椀	(13.8)	4.6	(5.1)	40%	N4/(灰)・N4/(灰)・N 8/（灰白）	断面台形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状暗文？	胎土密 反転復元
129	図16	I－B F3・b 17	遺構7 中層	瓦器 椀	14.1	5.0	(5.7)	50%	5Y8/1（灰白）・N3/(暗灰)・5Y8/1（灰白）	断面台形～三角形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状暗文	胎土密 一部反転復元
130	図16 図版14	I－B F3・b 17	遺構7 中層	瓦器 椀	14.7～15.7	5.3	5.5	70%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・N8/（灰白）	断面三角形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状暗文	胎土密 歪みが大きい
131	図16 図版14	I－B F3・c 19	遺構7 中層	瓦器 椀	14.4	4.7	4. 7	70%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・5Y8/1（灰白）	断面三角形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状暗文	胎土密
132	図16 図版14	I－B F3・c 18	遺構7 中層	瓦器 椀	13.7～14.0	4.9	5.4	70%	N4/(灰)・N4/(灰)・N 8/（灰白）	断面台形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状暗文	胎土密
133	図16	I－B F3・b 17	遺構7 中層	瓦器 椀	(15.0)	5.45	(5.0)	35%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・5Y8/1（灰白）	断面三角形の高台 外面ミガキなし 内面同心円状・見込み部分割ループ状の暗文	胎土密 反転復元
134	図16 図版15	I－B F3・b 17	遺構7 中層	瓦器 椀	15.0～15.2	5.25	5.3	100%	5Y8/1（灰白）・N3/(暗灰)・5Y8/1（灰白）	断面台形～三角形の高台 外面ミガキなし 内面同心円状・見込み部分割平行線の暗文	胎土密
135	図16 図版15	I－B F3・b 17	遺構7 中層	瓦器 椀	(15.5)	－	－	70%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・2.5Y8/ I（灰白）	外面部分的なミガキ 内面同心円状・見込み部分割平行線暗文	胎土密
136	図16	I－B F3・c 18	遺構7 中層	瓦器 椀	(15.4)	5.25	(4.9)	50%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・5Y8/1（灰白）	断面三角形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状暗文？	胎土密 反転復元
137	図16	I－B F3・c 19	遺構7 中層	瓦器 椀	(15.0)	4.55	(5.0)	30%	N6/(灰)・N6/(灰)・10YR8/1(灰白)	断面三角形のしっかりした高台 内外面ミガキ 見込み部斜格子状暗文	胎土密 反転復元
138	図16	I－B F3・c 19	遺構7 中層	瓦器 椀	(13.3)	4.7	(5.1)	25%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・5Y8/1（灰白）	断面台形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状暗文	胎土密 反転復元
139	図16 図版15	I－B F3・b 17	遺構7 中層	瓦器 椀	(15.6)	5.3	5.2	60%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・5Y8/1（灰白）	断面三角形の高台 外面ミガキなし 内面同心円状・見込み部分割平行線の暗文	胎土密 反転復元
140	図16 図版15	I－B F3・b 17	遺構7 下層	瓦器 椀	14.2	4.9	6.1	60%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・5Y8/1（灰白）	断面三角形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状暗文	胎土 1mm前後の砂粒微量含む
141	図16 図版15	I－B F3・b 17	遺構7 下層	瓦器 椀	14.4～15.0	5.2	5.2	95%	内・外とも N3/（暗灰）10Y7/1(灰白） 断面 N8/(灰白)	断面台形の高台 口縁部内面に沈線 外面ミガキ 内面同心円状・見込み部分割ループ状の暗文	胎土 1～2mmの砂粒微量含む
142	図16	I－B F3・d 19	遺構7 下層	瓦器 椀	(13.6)	5.5	(4.7)	40%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・2.5Y8/ I（灰白）	断面台形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状暗文	胎土密 反転復元
143	図16 図版15	I－B F3・e18	遺構7 下層	瓦器 椀	15.9	5.7	4.8	70%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・5Y8/1（灰白）	断面三角形のしっかりした高台 外面ミガキ 内面同心円状・見込み部分割ジグザグ線の暗文	胎土 1～2mmの砂粒微量含む
144	図16 図版15	I－B F3・b 17	遺構7 下層	瓦器 椀	14.4～15.1	4.1～5.6	4.8	100%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・N8/（灰白）	断面三角形の高台 外面ミガキなし 内面同心円状の暗文・見込み部分割ループ状暗文？	胎土密 歪みが大きい
145	図16 図版15	I－B F3・c 18	遺構7 最下層	瓦器 椀	14.6	6.2	6.0	70%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・5Y8/1（灰白）	外に広がる断面三角形の高台 内外面密なミガキ 見込み部アトランダムなループ状の暗文	胎土 1mmまでの砂粒を微量含む
146	図16	I－B F3・c 17	遺構7 上層	瓦器 皿	(8.2)	1.5		60%	N6/(灰)・N4/(灰)・2.5Y8/3（淡黄）	底体部の境不明瞭 内外面ミガキなし	胎土密 反転復元
147	図16	I－B F3・b 17	遺構7 中層	瓦器 皿	(9.2)	1.3		30%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・5Y8/1（灰白）	底体部の境不明瞭 内外面ミガキなし	胎土密 反転復元
148	図16	I－B F3・b 17	遺構7 中層	瓦器 皿	(9.2)	2.0		30%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・5Y8/1（灰白）	内面見込み部平行線・体部同心円状の暗文	胎土密 反転復元
149	図16	I－B F3・c 19	遺構7 最下層	瓦器 皿	10.0	2.5		50%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・5Y8/1（灰白）	底体部の境不明瞭 内面ミガキ 外面ミガキなし	胎土密 反転復元
150	図16 図版15	I－B F3・b 17	遺構7 上層	土師器 小皿	7.6	1.7		100%	内・外・断面とも 7.5YR7/4(にぶい橙)	底部指押さえ 内面・体部外面ヨコナデ	胎土 1mmまでの砂粒微量含む

出土遺物観察表（5）

法量の（）内の数値は復元値

遺物番号	図 図版	調査区 地区	遺構 層位	種類 器種	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調（内・外・断面）（釉・露胎部・断面）	形態・技法	備考
151	図16	Ⅰ－B F3・c 18	遺構7 最下層	土師器 小皿	(9.0)	1.4	(7.2)	45%	内・外・断面とも7.5YR7/3（にぶい橙）	底部静止糸切り	胎土1㎜までの砂粒微量含む　反転復元
152	図16	Ⅰ－B F3・c 18	遺構7 下層	土師器 台付皿	(10.8)	2.4	5.0	60%	7.5YR7/4（にぶい橙）・7.5YR7/4（にぶい橙）・7.5YR7/2（明褐灰）	浅い小皿に直立気味の高い高台 調整回転ナデ	胎土1㎜までの砂粒微量含む　反転復元
153	図16	Ⅰ－B F3・c 19	遺構7 上層	土師器 皿	—	—	9.2	底部60%	内・外・断面とも10YR6/3（にぶい黄橙）	底部回転糸切り　ほか回転ナデ	胎土1㎜までの砂粒を微量含む　反転復元
154	図16	Ⅰ－B F3・b 17	遺構7 下層	土師器 椀	—	—	7.1	高台部100%	7.5YR5/1（褐灰）・7.5YR7/4（にぶい橙）・7.5YR7/2（明褐灰）	「ハ」の字に開くしっかりした高台	胎土2㎜以下の長石・チャートなどを少量含む　二次焼成を受ける　反転復元
155	図17	Ⅰ－B F3・c 18	遺構7 下層	土師器 羽釜	(28.0)	—	—	口縁部10%	内・外・断面とも7.5YR5/2（灰褐）	口縁部「く」の字に屈曲　口縁端部内方に拡張・外上方に面　鍔断面三角形	胎土1㎜までの長石・結晶片岩などを多量に含む　外面スス多量に付着　反転復元
156	図17	Ⅰ－B F3・c 18	遺構7 下層	東播系 擂鉢	(33.0)	(12.5)	(11.0)	30%	内・外・断面とも2.5Y7/1（灰白）	口縁端部わずかに拡張・外方の面はややくぼむ	胎土3㎜までの長石・チャートなどを少量含む　反転復元
157	図17	Ⅰ－B F3・b 17	遺構7 下層	白磁 椀	(15.6)	(6.0)	(7.0)	20%	釉・露胎・断面とも5Y8/1（灰白）	口縁部玉縁状　高台は低い削り出し 高台部露胎	胎土密　反転復元
158	図17	Ⅰ－B F3・c 19	遺構7 中層	青磁 椀	—	—	—	口縁部10%	釉7.5Y5/2（灰オリーブ） 断面N7/（灰白）	内外面に片切彫の文様	胎土密
159	図17 図版15	Ⅰ－B F3・b 17	遺構7 中層	鉄器 小刀	長27.1	幅2.3	厚0.6	100%		柄に目釘穴	刃こぼれが著しい
160	図17	Ⅰ－B F3・c 18	遺構8 上層	瓦器 椀	(16.0)	(6.4)	(6.0)	20%	N3/（暗灰）・N4/（灰）・N8/（灰白）	しっかりした高台　口縁部内面に沈線　外面ミガキ　内面細かい密なミガキ・見込み分割斜格子状の暗文	胎土密　反転復元
161	図17 図版15	Ⅰ－B F3・c 18	遺構8 下層	黒色土器 椀	15.2	6.25	8.0	95%	N 2/（黒）・5YR6/3（にぶい橙）・5YR6/1（褐灰）	A類　高台「ハ」の字に開く 内外面ミガキ　見込み部はループ状	胎土2㎜までの長石・チャートなどを微量含む
162	図17 図版15	Ⅰ－B F3	遺構8	黒色土器 椀	(15.6)	6.2	6.4	70%	N 2/（黒）・5YR6/3（にぶい橙）・7.5YR8/2（灰白）	A類　高台「ハ」の字に開く 内外面ミガキ	胎土微砂粒含む　焼成良　トレンチ出土
163	図17 図版15	Ⅰ－B F3・c 18	遺構8 底直上	土師器 椀	13.2～14.1	3.9～4.6	6.5	95%	内・外・断面とも7.5YR7/3（にぶい橙）	高台「ハ」の字に開く	胎土1㎜前後のチャートなどを微量含む
164	図17 図版15	Ⅰ－B F3・c 19	遺構8 下層	土師器 小椀	10.7	3.7	5.9	70%	内・外・断面とも7.5YR6/3（にぶい橙）	高台「ハ」の字に開く	胎土密
165	図17 図版15	Ⅰ－B F3・c 18	遺構8 下層	土師器 杯	(14.6)	3.6	7.0	80%	内・外・断面とも7.5YR6/3（にぶい橙）	底部回転ヘラ切り未調整 ほか回転ナデ	胎土1㎜前後の砂粒含む　反転復元
166	図17 図版15	Ⅰ－B F3・c 18	遺構8 底直上	土師器 台付皿	17.5	6.5	10.1	100%	7.5YR6/4（にぶい橙）・N5/（灰）・N5/（灰）	「ハ」の字に開く高い高台 皿部は浅い	胎土1～3㎜の白色砂粒を少量含む
167	図17 図版16	Ⅰ－B F3・b 17	遺構8 下層	土師器 皿	10.4	2.4		70%	内・外・断面とも7.5YR7/3（にぶい橙）	底体部の境不明瞭　底部指押さえ 体部内外面ヨコナデ	胎土1㎜までの砂粒少量含む
168	図17 図版16	Ⅰ－B F3・b 17	遺構8 下層	土師器 皿	9.7～10.0	2.3		95%	内・外・断面とも7.5YR8/3（淡黄橙）	底体部の境不明瞭　底部指押さえ 体部内外面ヨコナデ	胎土1㎜までの砂粒少量含む
169	図17	Ⅰ－B F3・c 18	遺構8 下層	土師器 皿	(10.0)	2.2		60%	5YR8/2（灰白）・5YR8/4（淡橙）・5YR8/2（灰白）	底体部の境不明瞭　底部指押さえ 体部内外面ヨコナデ	胎土1㎜までの砂粒微量含む 反転復元
170	図17	Ⅰ－B F3・c 18	遺構8 下層	土師器 皿	(10.0)	2.5	6.4	50%	内・外・断面とも7.5YR7/3（にぶい橙）	底部指押さえ　体部内外面ヨコナデ	胎土1㎜までの砂粒微量含む　焼成良 歪みが大きい　反転復元
171	図17 図版16	Ⅰ－B F3・b 18	遺構9 上層	土師器 椀	12.9～13.1	4.25	6.6	95%	内・外・断面とも10YR5/1（褐灰）7.5YR6/2（灰褐）	高台「ハ」の字に開く　外面ヨコナデ	胎土1㎜前後の砂粒微量含む 部分的にスス付着
172	図17	Ⅰ－B F3・c 18	遺構9 下層	土師器 杯	(14.4)	4.3	(10.4)	30%	内・外・断面とも10YR7/3（にぶい黄橙）	口縁端部を内方に拡張 底体部の境明瞭でない	胎土1㎜までの長石などを微量含む 反転復元
173	図17	Ⅰ－B F3・C19	遺構9 下層	土師器 杯	(15.4)	3.1	(8.6)	口縁部25%	10YR6/2（灰黄褐）・10YR6/2（灰黄褐）・7.5YR6/4（にぶい橙）	口縁部わずかに外反する 体部内外面ヨコナデ	胎土密　反転復元
174	図17	Ⅰ－B F3・b 18	遺構9 下層	土師器 皿	(10.8)	2.4	(8.0)	40%	内・外・断面とも7.5YR7/4（にぶい橙）	口縁部やや内湾	胎土微砂粒多く含む　歪みが大きい 反転復元
175	図17	Ⅰ－B F3・b 18	遺構9 下層	須恵器 杯身	(14.2)	3.9	(10.8)	20%	内・外・断面とも2.5Y8/1（灰白）	外底部ヘラ切未調　ほか回転ナデ	胎土微砂粒多く含む　焼成やや不良 反転復元
176	図17	Ⅰ－B F3・c 16	遺構9	須恵器 杯身	(16.0)	5.5	(11.6)	30%	内・外・断面とも2.5Y7/1（灰白）	底部端に外方に張るしっかり高台 外底部回転ヘラケズリ　ほか回転ナデ	胎土2㎜までの砂粒微量含む　反転復元
177	図17	Ⅰ－B F3・c 18	遺構9 下層	須恵器 杯蓋	(11.2)	3.5	—	70%	7.5YR6/2（灰褐）・7.5YR6/2（灰褐）・7.5YR5/3（にぶい褐）	外面摩滅調整不明　内面回転ナデ	胎土1㎜までの砂粒多い　反転復元
178	図17	Ⅰ－B F3・c 18	遺構9 下層	須恵器 杯蓋	(12.0)	3.5	—	45%	内・外・断面とも10YR6/4（にぶい黄橙）10R5/3（赤褐）	天井部回転ヘラケズリほか回転ナデ 天井部ヘラ記号	胎土2㎜までの長石などを中量含む 二次焼成を受ける　反転復元
179	図17 図版16	Ⅰ－B F3	遺構9	須恵器 杯身	(10.6)	3.6		65%	内・外・断面とも7.5YR6/4（にぶい橙）	口縁部の立ち上がり低い 底部回転ヘラ切り未調	胎土5㎜までの長石などを多量に含む 反転復元
180	図17	Ⅰ－B F3	遺構9	須恵器 高杯	—	—	(10.2)	脚部20%	N4/（灰）・N6/（灰）・5RP4/1（暗紫灰）	短脚　方形透かし4方向？ 外面カキ目	胎土密　反転復元
181	図18 図版16	Ⅰ－B F3・b 17	遺構10 下層	土師器 壺	20.9	30.8	丸底	95%	10YR6/2（灰黄褐）・10YR7/2（にぶい黄褐）・7.5YR6/4（にぶい橙）	体部扁球形　二重口縁　口縁部外面櫛描直線文・円形浮文　頸部櫛描直線文 体部平行タタキのちヘラミガキ	胎土1㎜までのチャートなどを少量含む
182	図18 図版16	Ⅰ－B F3・b 17	遺構10 下層	土師器 壺	14.4	34.3	丸底	70%	N3/（暗灰）・10YR8/3（浅黄橙）・10YR8/3（浅黄橙）＋N3/（暗灰）	体部球形　二重口縁　口縁部直立　口縁端部内方に拡張　体部・底部外面全体にハケ　内面ヘラケズリ	胎土4㎜までの長石・チャートなどを多量に含む　一部反転復元
183	図18 図版16	Ⅰ－B F3・c 18	遺構10 下層	土師器 壺	(17.1)	30.4	丸底	80%	10YR7/3（にぶい黄橙）・10YR7/3（にぶい黄橙）・N4/（灰）	体部球形　口縁外面わずかに屈曲・内面を強くヨコナデすることで二重口縁状　体部外面部分的なハケ　内面ナデ・ケズリ	胎土3㎜までの長石・チャートなどを多量に含む
184	図18	Ⅰ－B F3・c 19	遺構10 下層	土師器 壺	12.4	—	—	口縁部80%	10YR7/3（にぶい黄橙）・10YR7/3（にぶい黄橙）・N4/（灰）	口縁部「く」の字に屈曲して直線的に長くのびる　口縁端部丸い　口縁部内面ヘラミガキ　体部外部分的なヘラミガキ	胎土密 1.5㎜以下の長石・チャートなどを微量含む　一部反転復元
185	図18 図版16	Ⅰ－B F3・c 17	遺構10 中層	土師器 壺	10.7	13.3	丸底	80%	7.5YR6/3（にぶい褐）・2.5YR5/4（にぶい赤褐）・7.5Y5/1（黄灰）	体部扁球形　口縁部「く」の字に屈曲して外傾　口縁部ヘラ描の線刻	胎土1㎜までの長石・チャートなどを多量に含む　二次焼成を受ける　一部反転復元
186	図18 図版16	Ⅰ－B F3・b 18	遺構10 上層	土師器 壺	11.2	10.8	丸底	95%	10YR6/4（にぶい橙）・10YR7/3（にぶい黄橙）・10YR6/3（にぶい黄橙）	体部扁球形　底部平坦気味　口縁部「く」の字に屈曲して外傾　口縁内外面ハケ	胎土1㎜までの長石・チャートなどを中量含む　外面スス多く付着　二次焼成を受ける　内面底炭化する
187	図18	Ⅰ－B F3・c 19	遺構10 下層	土師器 壺	—	—	丸底	50%	10YR6/3（にぶい黄褐）・5YR7/4（にぶい橙）・10YR8/2（灰白）	体部扁球形　外面ハケ	胎土密 2㎜以下の長石・チャートなどを中量含む　スス付着　二次焼成を受ける　一部反転復元
188	図18 図版16	Ⅰ－B F3・c 18	遺構10 下層	土師器小型丸底壺	8.5	7.9	丸底	95%	内・外・断面とも10YR7/3（にぶい黄橙）	体部球形　口縁部ヨコナデ 体部下半ヘラケズリ	胎土密　0.5㎜以下の長石・チャートなどを中量含む
189	図18 図版17	Ⅰ－B F3・c 18	遺構10 下層	土師器小型丸底壺	(6.8)	8.2	丸底	90%	10YR7/2（にぶい黄橙）・10YR7/2（にぶい黄橙）・10YR7/1（灰白）	体部扁球形　口縁部ヨコナデ 体部下半ヘラケズリ・上半ハケ	胎土1㎜までの長石・チャートなどを中量含む

出土遺物観察表（6）

法量の（）内の数値は復元値

遺物番号	図 図版	調査区 地区	遺構 層位	種類 器種	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調（内・外・断面）（釉・露胎部・断面）	形態・技法	備考
190	図18	Ⅰ－B F3・c 19	遺構10 下層	土師器小型丸底壺	(9.9)	(6.9)	丸底	30%	2.5Y7/2(灰黄)・2.5Y6/2(灰黄)・2.5GY4/1(暗オリーブ灰)	体部扁球形　口縁部ヨコナデ 体部下半ヘラケズリ	胎土3㎜までのチャートなどを中量含む 反転復元
191	図18 図版17	Ⅰ－B F3・c 18	遺構10 下層	土師器小型丸底壺	10.5	8.4	丸底	90%	10YR7/4(にぶい黄橙)・10YR8/3(浅黄橙)・10YR8/3(浅黄橙)	体部扁球形　口縁部ヨコナデ 体部ナデ　底部ヘラケズリ	胎土2㎜までの長石・チャート・結晶片岩などを多量に含む
192	図18	Ⅰ－B F3・c 19	遺構10 下層	土師器小型丸底壺	(9.5)	6.5	丸底	60%	10YR7/4(にぶい黄橙)・10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR5/1(褐灰)	体部扁球形　口縁部ヨコナデ 体部上半ハケのち指押さえ	胎土1㎜までの長石・チャートなどを多量に含む　一部反転復元
193	図18 図版17	Ⅰ－B F3・c 19	遺構10 下層	土師器小型丸底壺	9.3	7.8	丸底	95%	10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR8/2(灰白)	体部扁球形　口縁部ヨコナデ 体部ナデ　底部ヘラケズリ？	胎土1㎜までの長石・チャートなどを中量含む
194	図18	Ⅰ－B F3・c 19	遺構10 下層	土師器小型丸底壺	(9.9)	8.3	丸底	40%	10YR8/2(灰白)・10YR7/2(にぶい黄橙)・10YR7/2(にぶい黄橙)	体部扁球形　口縁部ヨコナデ 体部ナデ　底部木の葉の圧痕	胎土1㎜までのチャートなどを中量含む 反転復元
195	図18 図版17	Ⅰ－B F3・c 17	遺構10 中層	土師器小型丸底壺	9.9	7.4	丸底	95%	10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR6/2(灰黄褐)・N3/(暗灰)	体部扁球形　口縁部ヨコナデ 体部ナデ・部分的ハケ	胎土1㎜までの長石・チャートなどを多量に含む
196	図18	Ⅰ－B F3・c 18	遺構10 下層	土師器小型丸底壺	(7.9)	－	－	30%	10YR5/2(灰黄褐)・10YR7/2(にぶい黄橙)・10YR7/2(にぶい黄橙)	体部球形　口縁部ヨコナデ 体部指押さえ・ナデ	胎土1㎜までのチャートなどを少量含む 反転復元
197	図18	Ⅰ－B F3・c 18	遺構10 下層	土師器小型丸底壺	(9.8)	－	丸底	35%	10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR7/4(にぶい黄橙)・10YR3/1(黒褐)	体部球形　口縁・体部外ヨコナデ	胎土密 1.5㎜までの長石・チャート少量含む　反転復元
198	図19	Ⅰ－B F3・c 18	遺構10 下層	土師器甕	(15.9)	－	－	口縁部20%	10YR6/3(にぶい黄橙)・2.5Y7/3(浅黄)・10YR5/1(褐灰)	口縁部強く屈曲　口縁端部内方に肥厚・上方に面　体部内面ヘラケズリ	胎土1㎜までの長石・チャートなどを多量に含む　反転復元
199	図19	Ⅰ－B F3・b 19	遺構10 上層	土師器甕	(12.8)	－	－	口縁部10%	7.5YR7/4(にぶい橙)・10YR8/3(浅黄橙)・7.5YR7/4(にぶい橙)	口縁部強く屈曲　口縁部内方に肥厚・上方に面　体部内面ヘラケズリ？	胎土1㎜までの長石・チャートなどを多量に含む　反転復元
200	図19	Ⅰ－B F3・b 17	遺構10 上層	土師器甕	(14.7)	－	－	口縁部20%	10YR7/2(にぶい黄橙)・10YR7/3(にぶい黄橙)・N4/(灰)	口縁部強く屈曲 体部内面ヘラケズリ	胎土1㎜までの長石・チャートなどを中量含む　反転復元
201	図19	Ⅰ－B F3・b 17	遺構10 下層	土師器甕	(13.8)	－	－	口縁部50%	10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR6/4(にぶい黄橙)・10YR8/3(浅黄橙)	口縁部緩やかに外反　端部丸くおさめる 頸部外面ハケ　体部内面ヘラケズリ	胎土1㎜までのチャートなどを少量含む 反転復元
202	図19	Ⅰ－B F3・c 18	遺構10 下層	土師器甕	(15.0)	－	－	口縁部8%	10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR7/2(にぶい黄橙)	口縁部強く屈曲　端部まるくおさめる 体部外面右下がり平行タタキ 体部内ヘラケズリ	胎土密3㎜までのチャートなどを少量含む　反転復元
203	図19	Ⅰ－B F3・c 19	遺構10 下層	土師器甕	(15.2)	－	－	口縁部80%	10YR6/2(灰黄褐)・2.5Y7/3(浅黄)・N2/(黒)	口縁部ゆるやかに外反 粘土接合痕が目立つ	胎土3㎜までのチャートなどを中量含む 歪みが大きい　一部反転復元
204	図19	Ⅰ－B F3・c 19	遺構10 上層	土師器甕	(15.6)	－	－	口縁部10%	7.5YR7/2(明褐灰)・7.5YR7/2(明褐灰)・N3/(暗灰)	口縁部段をなす	胎土3㎜までの長石・チャートなどを少量含む　反転復元　S字甕類似
205	図19	Ⅰ－B F3・c 18	遺構10	土師器鉢	(12.6)	7.0	丸底	60%	内・外・断面ともN3/(暗灰)	口縁部屈曲　体部内面ハケ 外面平行タタキ	胎土1㎜前後の結晶片岩など多く含む 反転復元
206	図19 図版17	Ⅰ－B F3・c 19	遺構10 下層	土師器台付鉢	9.5	－	－	80%	2.5Y7/3(浅黄)・2.5Y7/3(浅黄)・N4/(灰)	口縁部短く屈曲　脚柱部粘土巻上げ痕 鉢内面板状工具によるナデ	胎土2㎜までの長石・チャートなどを中量含む　一部反転復元
207	図19 図版17	Ⅰ－B F3・b 17	遺構10 下層	土師器高杯	(14.4)	11.4	(10.1)	50%	10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR4/1(褐灰)	裾部・杯部にぶい稜をなして屈曲 脚柱部外面弱い面取り・内面ヘラケズリ	胎土0.5㎜までのチャートなどを多量に含む　一部反転復元
208	図19	Ⅰ－B F3・c 17	遺構10 下層	土師器高杯	－	－	(14.5)	脚部70%	内・外・断面とも10YR7/3(にぶい黄橙)	裾部緩やかに広がる 脚柱部内面ヘラケズリ	胎土2㎜までの長石・チャートなどを少量含む　一部反転復元
209	図19	Ⅰ－B F3・b 17	遺構10 下層	土師器高杯	－	－	(11.6)	脚部70%	10YR6/2(灰黄褐)・10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR6/1(褐灰)	裾部屈曲　脚柱部内面粘土巻上げ痕	胎土0.5㎜までのチャートなどを微量含む　一部反転復元
210	図19	Ⅰ－B F3・c 19	遺構10 上層	土師器高杯	－	－	(11.1)	脚部60%	7.5YR7/4(にぶい橙)・7.5YR7/4(にぶい橙)・2.5Y4/1(黄灰)	脚部スカート状に広がる　内面ハケ＋ヘラケズリ	胎土1.5㎜までの長石・チャートなどを多量に含む　一部反転復元
211	図19	Ⅰ－B F3・b 17	遺構10	土師器高杯	－	－	(11.3)	脚部80%	7.5YR7/3(にぶい橙)・10YR7/2(にぶい黄橙)・N6/(灰)	脚部スカート状に広がる　脚柱部内面 粘土ラセン巻上げ痕	胎土3㎜までのチャートなどを少量含む 一部反転復元
212	図19	Ⅰ－B F3・c 18	遺構10 下層	土師器高杯	－		10.4	脚部95%	10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR8/3(浅黄橙)・10YR7/3(にぶい黄橙)	脚部スカート状に広がる　脚柱部内面 ヘラケズリ	胎土1.5㎜以下の長石・チャートなどを中量含む
213	図19	Ⅰ－B F3・b 17	遺構10 下層	土師器高杯	－	－	(12.3)	脚部70%	2.5Y7/3(浅黄)・2.5Y7/3(浅黄)・2.5Y6/2(灰黄)	裾部屈曲して横方向に開く　脚柱部内面粘土巻上げ痕＋ヘラケズリ	胎土1㎜までの長石・チャートなどを中量含む　一部反転復元
214	図19	Ⅰ－B F3・c 17	遺構10 下層	土師器高杯	－	－	－	脚部70%	2.5Y7/3(浅黄)・2.5Y7/3(浅黄)・2.5Y8/2(灰白)	裾部屈曲して横方向に開く　脚柱部外面ハケ・内面粘土巻上げ痕	胎土1㎜以下の長石・チャートなどを少量含む　一部反転復元
215	図19	Ⅰ－B F3・c 18	遺構10 下層	土師器手捏鉢	(6.2)	5.4		40%	10YR5/3(にぶい黄褐)・10YR6/3(にぶい黄褐)・10YR6/2(灰黄褐)	コップ形　内面ハケ　外面指押さえ＋ナデ	胎土密　1.5㎜までの長石・チャートなどを多量に含む　反転復元
216	図19	Ⅰ－B F3・c 17	遺構10 下層	土師器製塩土器	－	－	2.1	脚部90%	7.5YR7/2(明褐灰)・2.5YR6/6(橙)・7.5YR7/2(明褐灰)	脚部小さい・指押さえ　体部平行タタキ	胎土0.5㎜までの長石・チャートなどを多量に含む　一部反転復元　搗台Ⅳ式
217	図19	Ⅰ－B F3・c 17	遺構10 下層	土師器甑	－	－	－	－	2.5Y6/3(にぶい黄)・2.5Y5/2(暗灰黄)・2.5Y5/2(暗灰黄)	体部から口縁部にかけて直線的　口縁端部上方に面	胎土密1㎜までのチャートなどを中量含む
218	図19	Ⅰ－B F3・c 17	遺構10 下層	土師器甑	－	－	－	－	2.5Y7/3(浅黄)・2.5Y7/3(浅黄)・2.5Y4/1(黄灰)	底部円穿孔2箇所以上	胎土1㎜までのチャートなどを中量含む
219	図19	Ⅰ－B F3・c 19	遺構10 上層	縄文土器深鉢	－	－	－	－	10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR7/2(にぶい黄橙)・10YR4/1(褐灰)	沈線のよる曲線状の文様	胎土粗　3㎜までのチャート・砂岩などを多量に含む　縄文後期
220	図19	Ⅰ－B F3・c 19	トレンチ2	弥生土器壺	－	－	(12.6)	底部20%	N2/(黒)　10YR8/2(灰白)・10YR4/1(褐灰)	底部外ヘラケズリ	胎土1㎜まで長石・チャートなどを中量含む　反転復元　弥生中期
221	図19	Ⅰ－B F3・c 19	トレンチ2	弥生土器高杯	(26.2)	－	－	口縁部10%	10YR6/2(灰黄褐)・10YR6/2(灰黄褐)・10YR7/3(にぶい黄橙)	外面3条の凹線文	胎土1㎜までのチャートなどを中量含む 反転復元　弥生中期
222	図19	Ⅰ－B F3・b 19	遺構10 上層	弥生土器回転台形土器	(20.3)	－	－	台部20%	5YR7/4(にぶい橙)・7.5YR7/3(にぶい橙)・10GY4/1(暗緑灰)	上端面平坦ヘラミガキ　側面ヘラケズリ・ヘラミガキ	胎土密　1.5㎜までの長石・チャートなどを中量含む　反転復元　弥生中期
223	図19	Ⅰ－B F3・c 19	トレンチ2	土師器壺	(18.0)	－	－	口縁部70%	7.5YR7/4(にぶい橙)・2.5Y8/2(灰白)・N4/(灰)	口縁部「く」の字に屈曲　口縁端部内側に肥厚・上方に面　体部外面ハケ 内面ヘラケズリ	胎土1㎜までの長石・チャートなどを多量含む　反転復元　布留式期
224	図19	Ⅰ－B F3・c 17	遺構6 最下層	土師器甕	(17.0)	－	－	口縁部15%	7.5YR7/4(にぶい橙)・7.5YR7/4(にぶい橙)・N5/(灰)	二重口縁　内外面ヨコナデ	胎土2㎜までのチャートなどを中量含む 反転復元　布留式期
225	図19	Ⅰ－B F3・c 19	遺構9 下層	土師器壺	(15.2)	－	－	口縁部40%	内・外・断面とも10YR6/3(にぶい黄橙)	口縁部外反　口縁端部外方に面・擬凹線	胎土密　反転復元　庄内式併行期
226	図19	Ⅰ－B F3・c 19	トレンチ2	土師器小型丸底壺	－	－	丸底	体部100%	7.5YR3/3(暗褐)・5YR6/6(橙)・10YR3/1(黒褐)	体部扁球形　外面ナデ　内面ヨコナデ・ヘラケズリ	胎土密　0.5㎜までの長石・チャートなどを多量に含む　布留式期
227	図19	Ⅰ－B F3・c 18	遺構9 下層	土師器小型丸底壺	－	－	丸底	体部100%	10YR7/2(にぶい黄橙)・10YR7/2(にぶい黄橙)	体部扁球形　内部板状工具によるナデ	胎土密　0.6㎜までの長石・チャートなどを多量に含む　布留式期
228	図19	Ⅰ－B F3・c 18	遺構9 下層	土師器甕	(13.0)	－	－	口縁部25%	内・外・断面とも10YR7/3(にぶい黄橙)	口縁部「く」の字に屈曲　口縁端部下に浅い沈線	胎土1㎜までの長石・チャートなどを中量含む　反転復元　布留式期

出土遺物観察表（7）

法量の（）内の数値は復元値

遺物番号	図 図版	調査区 地区	遺構 層位	種類 器種	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調（内・外・断面）（釉・露胎部・断面）	形態・技法	備考
229	図19	Ⅰ－B F3・c 19	遺構8 下層	土師器 器台	(10.2)	－	－	受部 30%	5YR6/4(にぶい橙)・5YR6/4(にぶい橙)・7.5YR5/1(褐灰)	受部は浅く口縁部は短く立ち上がる	胎土微細な雲母・チャートなどを含む 反転復元　色調・胎土から搬入品？ 庄内併行期
230	図19	Ⅰ－B F 3	遺構10 下層	土師器 壺	－	－	5.6	底部 100%	5Y4/1(灰)・2.5Y7/2(灰黄)・N3/(暗灰)	体部外面平行タタキのちナデ 内面板状工具によるナデ	胎土0.5mmまでのチャートなどを微量含む 一部反転復元　弥生土器？
231	図19	Ⅰ－B F3・c 18	遺構8 下層	土師器 製塩土器	－	－	2.8	脚部 70%	N4/(灰)・10YR7/3(にぶい黄橙)・N3/(暗灰)	脚部端を「ハ」の字に開く	胎土5mmまでの長石・チャートなどを中量含む　反転復元　脚台Ⅳ式
232～318は木製品											
319	図33	Ⅱ－D F4・e 16	遺構50	弥生土器 高杯	－	－	－	脚部の 50%	7.5YR8/3(浅黄橙)・7.5YR8/4(浅黄橙)・N5/(灰)	脚柱部から裾部にかけてラッパ状に開く 円穴4方向	胎土3mmまでのチャートなどを中量含む 反転復元
320	図33	Ⅱ－D F4・d 16	遺構1	瓦器 椀	12.8	4.4	5.0	60%	N 5/(灰)・N 5/(灰)・10YR8/1(灰白)	断面三角形の高台　外面ミガキなし 内面暗文	胎土密
321	図33	Ⅱ－D F4・d 16	遺構1	瓦器 椀	(14.4)	4.6	5.2	80%	2.5Y4/1(黄灰)・2.5Y5/1(黄灰)・10YR7/2(にぶい黄橙)	断面三角形の高台　外面ミガキなし 内面暗文不明	胎土密　反転復元
322	図33	Ⅱ－C F4・d 13	遺構1	瓦器 椀	(16.0)	5.2	(7.6)	20%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・2.5Y8/Ⅰ(灰白)	断面三角形～台形の高台 外面ミガキなし　内面暗文	胎土密　反転復元
323	図33	Ⅱ－A F 4・c 2	遺構1	瓦器 椀	13.8	4.8	4.8	70%	内・外・断面とも10YR7/1(灰白)	断面三角形の高台　外面ミガキなし 表面摩滅内面暗文不明	胎土密
324	図33	Ⅱ－A F 4・c 2	遺構1	土師器 小皿	(8.3)	2.0		40%	内・外・断面とも7.5YR8/3(浅黄橙)	底体部の境不明瞭　表面摩滅	胎土密　反転復元
325	図33	Ⅱ－C F4・d 11	遺構1	土師器 小皿	(8.8)	2.0		25%	10YR8/3(浅黄橙)・10YR8/2(灰白)・7.5YR8/4(浅黄橙)	体部・口縁部ヨコナデ　底部ナデ	胎土密　反転復元
326	図33	Ⅱ－C F4・d 12	遺構1	土師器 小皿	7.5	1.2		65%	10YR8/2(灰白)・10YR8/2(灰白)・7.5YR8/3(浅黄橙)	体部・口縁部ヨコナデ　底部ナデ	胎土密 1.5mmまでのチャートなどを微量含む
327	図33	Ⅱ－D F 4・e16	遺構1	土師器 小皿	(8.1)	1.5		40%	内・外・断面とも5YR7/4(にぶい橙)	体部・口縁部ヨコナデ 外底部指押さえ	胎土密　反転復元
328	図33	Ⅱ－A F 4・c 2	遺構1	土師器 羽釜	(28.0)	－	－	口縁部 30%	7.5YR6/3(にぶい褐)・5YR5/2(灰褐)・5YR5/2(灰褐)	口縁部「く」の字に屈曲 口縁端部内方へ拡張　断面三角形の鍔	胎土1mmまでの長石・チャートなどを多量に含む　反転復元
329	図33	Ⅱ－C F4・d 13	遺構1	東播系 捏鉢	(27.0)	－	－	口縁部 20%	2.5Y5/2(暗灰黄)・2.5Y6/1(黄灰)・2.5Y8/1(灰白)	口縁端部わずかに肥厚　外上方に面	胎土密　反転復元
330	図33	Ⅱ－C F4・d 12	遺構1	鉄釘	長6.1	幅0.8	厚0.7	100%		頭部を片方に折り曲げ	木質わずかに遺存
331	図33	Ⅱ－C F4・d 10	遺構15	軒丸瓦	－	－	－	瓦頭面 30%	内・外・断面とも10Y5/1(灰)	三巴　外圏線と内圏線の間に径の小さな珠文 巴の尾は長く内圏線に接する	胎土密
332	図33	Ⅱ－D F 4・c17	遺構42	瓦器 皿	(7.2)	1.7	(5.6)	30%	N5/(灰)・N5/(灰)・2.5Y2/1(灰白)	体部外面から内面ヨコナデ	胎土密　反転復元
333	図33	Ⅱ－D F 4・c16	遺構47	土師器 小皿	(7.6)	1.9	(6.6)	50%	2.5Y6/6(橙)・2.5Y6/6(橙)・2.5YR5/4(にぶい赤褐)	全体的に摩滅	胎土密　反転復元
334	図33	Ⅱ－D F 4・c16	遺構47	瓦器 椀	(14.2)	3.7	－	口縁部 40%	N4/(灰)・N4/(灰)・N8/(灰白)	断面三角形の高台　外面ミガキなし 内面暗文不明	胎土密　反転復元
335	図33	Ⅱ－D F 4・c16	遺構47	瓦器 椀	(13.3)	4.85	5.2	30%	N5/(灰)・N5/(灰)・N8/(灰白)	断面三角形の高台　外面ミガキなし 内面暗文不明	胎土密　反転復元
336	図33	Ⅱ－E F 4・e 20	遺構60	瓦器 椀	(14.4)	4.65	4.6	40%	10YR5/1(褐灰)・10YR5/1(褐灰)・10YR6/2(灰黄褐)	断面三角形の高台　外面ミガキなし 内面暗文不明	胎土密　反転復元
337	図33	Ⅱ－C F4・d 12		土師器 高杯	(18.0)	－	－	口縁部 25%	7.5YR7/6(橙)・5YR7/4(にぶい橙)・2.5YR4/1(灰赤)	杯部屈曲　口縁部外反	胎土2mmまでのチャートなどを多量に含む 反転復元
338	図33	Ⅱ－C F4・c 12		須恵器 杯蓋	(12.8)	3.9	－	25%	N6/(灰)・N6/(灰)・7.5YR6/1(褐灰)	口縁端部下方に面　天井部平坦・4/5以上回転ヘラケズリ	胎土密　2mmまでの長石などを微量含む 反転復元
339	図33	Ⅱ－C F4・b 10		陶器 天目碗	(11.2)	－	－	口縁部の 15%	2.5YR3/3(暗赤褐)・2.5YR3/3(暗赤褐)・10YR7/2(にぶい黄褐)	口縁部外反	胎土密　焼成良　反転復元
340	図33	Ⅱ－C F4・b 10	側溝内	青磁 碗	－	－	4.2	底部 100%	2.5Y4/3(オリーブ褐)・2.5Y4/3(オリーブ褐)・7.5YR7/3(にぶい橙)	見込み2条の圏線　施釉雑 高台内露胎	胎土密　焼成良
341	図35	Ⅲ－A F 4・a 20	遺構10	瓦器 椀	(11.0)	4.55	(5.2)	15%	N5/(灰)・N5/(灰)・N 8/(灰白)	断面台形の高台　口縁薄い 外面ミガキなし　内面暗文不明	胎土密　反転復元
342	図35	Ⅲ－B F 5・b 4	遺構34	瓦器 椀	(13.8)	3.8	(5.8)	20%	10Y8/1(灰白)・10Y6/1(褐灰)・10Y8/1(灰白)	三面三角形の高台　外面ミガキなし 内面ループ状暗文	胎土密　反転復元
343	図35	Ⅲ－B F 5・b 4	遺構34	瓦器 皿	6.8～9.4	1.8	8.6	60%	N4/(灰)・N4/(灰)・N 8/(灰白)	見込み部に板状工具による放射状圧痕(ナデ) ミガキなし	胎土密　歪みが大きい
344	図35	Ⅲ－A F 4・b 24	遺構29	瓦器 椀	－	－	(5.2)	底部 25%	N4/(灰)・N4/(灰)・N 7/(灰白)	断面台形の高台　内面暗文	胎土密　反転復元
345	図35	Ⅲ－A F 4・b 24	遺構29	軒平瓦	－	－	－	－	N 3/(暗灰)	圏線内に唐草文状の文様 隅部に竹管文	胎土密2～5mm大のチャート粒少量含む 離れ砂付着
346	図35	Ⅲ－A F 4・a23	整地土	土師器 高杯	－	－	－	脚部 70%	5YR4/1(褐灰)・2.5YR7/3(淡赤橙)・5YR8/2(灰白)	脚柱部内面粘土ラセン巻上げ痕	胎土1mmまでのチャートなどを多量に含む　反転復元　二次焼成を受ける
347	図35	Ⅲ－B F 5・b 4	撹乱	瓦器 椀	－	－	6.0	25%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・N 8/(灰白)	断面三角形の高台　外面ミガキなし 内面連結輪状の暗文	胎土密　一部反転復元
348	図35	Ⅲ－A F 4・a23	落ち込み	瓦器 椀	－	－	5.4	20%	10Y5/1(灰)・10Y5/1(灰)・N8/(灰白)	断面三角形の高台　外面ミガキなし 内面連結輪状のミガキ	胎土密　反転復元
349	図35	Ⅲ－B F 5・c 4	落ち込み	土師器 皿	(14.0)	2.4		20%	内・外・断面とも10YR7/1(灰白)	口縁部肥厚	胎土密　反転復元
350	図35	Ⅲ－B F 5・c4	落ち込み	土師器 土釜	(24.5)	－	－	口縁部 10%	7.5YR7/4(にぶい橙)・7.5YR7/4(にぶい橙)・7.5YR8/2(灰褐)	口縁部「く」の字に屈曲 口縁端部上方に拡張	胎土0.5mmまでの長石・チャートなどを多量に含む　反転復元
351	図38	Ⅳ F 5・b17	遺構31 上層	瓦器 椀	(11.6)	4.5	(5.2)	20%	N2/(黒)・N3/(暗灰)・N8/(灰白)	断面三角形の高台　外面ミガキなし 内面渦巻状の暗文	胎土密　反転復元
352	図38	Ⅳ F 5・a18	遺構31 上層	瓦器 椀	(10.6)	4.4	(4.9)	50%	N5/(灰)・N4/(灰)　2.5 Y 7/2(灰黄)・2.5GY7/1(暗オリーブ灰)	断面三角形の高台　外面ミガキなし 内面連結輪状の暗文	胎土密　反転復元
353	図38	Ⅳ F 5・a18	遺構31 下層	瓦器 椀	(11.6)	4.3	(5.1)	30%	N4/(灰)・N3/(暗灰)・N8/(灰白)	断面台形の高台　外面ミガキなし 内面渦巻状の暗文	胎土密　反転復元
354	図38	Ⅳ F 5・a17	遺構31 上層	瓦器 皿	(7.8)	1.8		80%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・N8/(灰白)	底・体部の境不明瞭 内外面指押さえ　暗文なし	胎土密　一部反転復元
355	図38	Ⅳ F 5・b18	遺構31 下層	瓦器 皿	8.0	2.0		100%	N4/(灰)・N4/(灰)・N7/(灰白)	底・体部の境不明瞭　底・体部外面指押さえ　暗文なし　見込み部放射状ナデ	胎土密
356	図38	Ⅳ F 5・a18	遺構31 下層	土師器 皿	(12.1)	3.2		20%	10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR6/2(灰黄褐)	底・体部の境不明瞭　底・体部外面指押さえ　口縁部外面から内面ヨコナデ	胎土密　反転復元
357	図38	Ⅳ F 5・b18	遺構31 下層	土師器 台付皿	(13.7)	3.9	(8.6)	20%	2.5Y8/2(灰白)・2.5Y8/2(灰白)　2.4 Y 8/3(淡灰)	「ハ」の字に開く高台　口縁部内外・高台部ヨコナデ　ほか指押さえ・ナデ	胎土密　反転復元

出土遺物観察表（8）

法量の（）内の数値は復元値

遺物番号	図 図版	調査区 地区	遺構 層位	種類 器種	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調（内・外・断面）（釉・露胎部・断面）	形態・技法	備考
358	図38	Ⅳ F5・a17	遺構31 下層	土師器 小皿	(7.3)	1.5		30%	10YR7/2(にぶい黄橙)・N6/(灰)・2.5Y8/1(灰白)	体部・口縁部短い 内外面指押さえ・ナデ	胎土1㎜までのチャートなどを微量含む 反転復元
359	図38	Ⅳ F5・a17	遺構31 上層	土師器 土釜	(27.7)	—	—	口縁部5%	7.5YR6/2(灰褐)・7.5YR7/4(にぶい橙)・10YR3/1(黒褐)	口縁部強く外反 口縁端部を内方に拡張	胎土1㎜までのチャート・結晶片岩などを多量に含む 反転復元
360	図38	Ⅳ F5・b17	遺構31 上層	土師器 土釜	(25.1)	—	—	口縁部5%	10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR7/3(にぶい黄橙)・10GY6/1(緑灰)	口縁部強く外反 口縁端部を内上方に拡張 頸部内面ハケ	胎土0.5㎜までのチャートなどを少量含む 反転復元
361	図38	Ⅳ F5・b17	遺構31 上層	土師器 羽釜	(25.7)	—	—	口縁部25%	10YR5/2(灰黄褐)・10YR4/1(褐灰)・N5/(灰)	体部・口縁部が直立 口縁部直下に鍔 口縁端部を内方に拡張・上方に面	胎土1㎜までのチャート・結晶片などを多量に含む 反転復元
362	図38	Ⅳ F5・a17	遺構31 下層	東播系 揺鉢	(29.4)	—	—	口縁部10%	N5/(灰)2.5Y4/1(黄灰)・N4/(灰)・N5/(灰)	口縁端部を上下に拡張・外方に面	胎土密・微細な長石などを多く含む 反転復元
363	図38	Ⅳ F5・b17	遺構31 上層	陶器 壺	—	—	(11.6)	底部20%	2.5R4/4(にぶい赤褐)・10R4/3(赤褐)・N5/(灰)	外面指押さえ ハケ	胎土1.5㎜までの長石などを中量含む 反転復元 常滑焼？
364	図38	Ⅳ F5・b17	遺構31 上層	青白磁 合子	(4.1)	1.9	(2.4)	20%	釉10G7/1(明緑灰)・胎土N8/(灰白)	受部短く立ち上がる 口縁部・高台部露胎	胎土密 反転復元
365	図38	Ⅳ F5・b17	遺構31 下層	白磁 皿	(10.6)	1.8	(7.1)	25%	釉2.5GY7/1(暗オリーブ灰)・胎土N8/(灰白)	平底 口縁内端部釉を削り取る	胎土密 反転復元
366	図38	Ⅳ E5・y17	遺構31 下層	青磁 皿	(11.7)	2.6	—	10%	釉10GY6/1(緑灰)・胎土N8/(灰白)	口縁部横方向に屈曲 釉厚く貫入生じる	胎土密 反転復元
367	図38	Ⅳ E5・y17	遺構31 上層	軒丸瓦				瓦頭面20%	内外2.5Y7/3(浅黄)・10YR5/1(褐灰)・断面10YR8/3(浅黄橙)	巴文 外圏線と内圏線の間に径の大きい珠文 周縁狭く高い	胎土1㎜までのチャートなどを少量含む
368	図38	Ⅳ F5・b18	遺構32	土師器 小皿	(8.1)	2.0		25%	2.5Y8/3(淡黄)・10YR7/3(にぶい黄橙)・2.5Y8/3(淡黄)	底部厚い 底部外面指押さえ・ナデ ほかヨコナデ	胎土密 反転復元
369	図38	Ⅳ F5・b18	遺構34	瓦器 皿	(7.9)	2.0		70%	N3/(暗灰)・N4/(灰)・N8/(灰白)	内面暗文なし	胎土密 一部反転復元
370	図38	Ⅳ F5・a17	低地 下層	瓦器 椀	(14.7)	—	—	20%	N4/(灰)・N4/(灰)・N8/(灰白)	断面三角形の高台 外面ミガキなし 内面渦巻状？の暗文	胎土密1㎜までのチャートなどを微量含む 反転復元
371	図38	Ⅳ F5・a18	低地 上層	瓦器 椀	(11.4)	4.7	(4.5)	20%	N3/(暗灰)・N3/(暗灰)・N8/(灰白)	断面三角形の高台 外面ミガキなし 内面渦巻状の暗文	胎土密 反転復元
372	図38	Ⅳ E5・y18	低地 上層	瓦器 椀	(12.3)	4.7	(5.2)	25%	N4/(灰)・N4/(灰)・N8/(灰白)	断面三角形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状の暗文	胎土密 反転復元
373	図38	Ⅳ	低地 下層	瓦器 椀	(13.1)	4.8	(5.1)	40%	N4/(灰)・N4/(灰)・N7/(灰白)	断面三角形の高台 外面ミガキなし 内面連結輪状の暗文	胎土密 反転復元
374	図38	Ⅳ E5・y18	低地 上層	土師器 小皿	8.5	2.1		50%	10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR7/3(にぶい黄橙)・10YR7/2(にぶい黄橙)	底・体部の境不明瞭 口縁部内外ヨコナデ ほか指押さえ・ナデ	胎土1.5㎜までのチャートなどを微量含む 焼き歪み大きい
375	図38	Ⅳ	低地 下層	土師器 小皿	(8.6)	2.2		40%	10YR8/3(浅黄橙)・10YR7/3(にぶい黄橙)・7.5YR8/3(浅黄橙)	底部厚い 口縁部内外ヨコナデ ほか指押さえ・ナデ	胎土1.5㎜までのチャートなどを微量含む 一部反転j復元
376	図38	Ⅳ	低地 下層	土師器 小皿	(7.9)	1.7		25%	10YR7/3(にぶい黄橙)・2.5Y7/3(浅黄)・2.5Y6/1(黄灰)	底・体部の境不明瞭 口縁部内外ヨコナデ ほか指押さえ・ナデ	胎土密 反転復元
377	図38	Ⅳ F5・a19	低地 下層	土師器 小皿	(8.0)	1.2		25%	7.5YR7/3(にぶい橙)・7.5YR7/3(にぶい橙)・7.5YR7/4(にぶい橙)	底・体部の境不明瞭 口縁部内外ヨコナデ ほか指押さえ・ナデ	胎土0.5㎜までのチャートなどを微量含む 反転復元
378	図38	Ⅳ F5・a19	低地 下層	土師器 皿	(13.9)	2.3	(7.9)	15%	10YR4/1(褐灰)・10YR5/1(褐灰)・10YR8/2(浅黄橙)	底・体部の境不明瞭 口縁部内外ヨコナデ ほか指押さえ・ナデ	胎土密 反転復元
379	図38	Ⅳ F5・a17	低地	土師器 台付皿	(8.8)	3.4	(6.6)	70%	10YR8/2(灰白)・10YR8/2(灰白)・2.5Y8/1(灰白)	高台「ハ」の字に開く 体部と口縁部の境に段を有する	胎土0.5㎜までのチャートなどを少量含む 一部反転復元
380	図38	Ⅳ F5・a19	低地 上層	土師器 土釜	(23.2)	—	—	口縁部5%	2.5Y6/2(灰黄)・2.5Y7/4(浅黄)・2.5Y7/3(浅黄)	口縁部ほぼ横方向に外反 口縁端部上方へわずかに拡張・外方に面 体部内面ハケ 体部外面スス付着	胎土1㎜までのチャート・結晶片岩などを中量含む 反転復元
381	図38	Ⅳ E5・y17	低地	土師器 土釜	(20.8)	—	—	口縁部10%	2.5Y5/2(暗灰黄)・2.5Y7/3(浅黄)・2.5Y6/1(黄灰)	口縁部外反 口縁端部上方へ拡張 外方に面 体部外面スス付着	胎土1.5㎜までの長石・チャート・結晶片岩などを多量に含む 反転復元
382	図38	Ⅳ F5・a19	低地 上層	東播系 揺鉢	(28.2)	—	—	口縁部10%	N5/(灰)・N6/(灰)・N5/(灰)	口縁端部上方に拡張・外方に面	胎土3㎜大のチャート、0.5㎜までの長石などを微量含む 反転復元
383	図38	Ⅳ F5・a16	水田H	陶胎染付 碗	—	—	(4.2)	底部100%	釉7.5GY8/1(明緑灰)・胎土2.5YR4/3(にぶい赤褐)	見込み蛇ノ目釉剥ぎ 畳付露胎 高台内染付による文字	胎土密 一部反転復元
384	図38	Ⅳ E5・y19	水田K	唐津焼 鉢	(26.8)	—	—	口縁部5%	釉5Y8/3(淡黄) 5Y4/3(暗オリーブ) 胎土5RP3/1(暗紫灰)	口縁部ほぼ横方向に屈曲 体部外面白土・緑釉によるハケ	胎土密 反転復元
385	図38	Ⅳ F5・a17	遺構31 上層	須恵器 杯蓋	—	—	—		N6/(灰)・N5/(灰)・N6/(灰)	天井部平坦 扁平な宝珠つまみ	胎土密 一部反転復元
386	図38	Ⅳ F5・b 17	遺構31 上層	須恵器 壺	—	—	—	底部30%	N6/(灰)・N6/(灰)・N7/(灰白)	底部端に外方に張り出すしっかりした高台	胎土密 反転復元
387	図38	Ⅳ F5・a17	遺構31 下層	須恵器 壺	(22.1)	—	—	口縁部10%	N6/(灰)・N4/(灰)・N6/(灰)	口縁部強く屈曲 口縁端部外上方に面 体部外面カキ目・内面同心円文タタキ	胎土密 反転復元
388	図38	Ⅳ F5・b 18	遺構31 下層	土師器 製塩土器	(12.8)	—	—	口縁部15%	2.5Y4/1(黄灰)・2.5Y4/1(黄灰)・2.5Y6/3(にぶい黄)	体部から口縁部にかけて内湾する 内外面指押さえ	胎土0.5㎜までのチャートなどを微量含む 反転復元
389	図36	Ⅲ F4・a 22	整地土	銭貨	直径 1.00	短径 0.98	厚 0.12	100%		熙寧元寶 篆書	銭文不鮮明 裏外縁・方孔の縁なし 模鋳銭？

木製品一覧表（1）

（）内の数値は、残存値　φは直径

報告書番号	図	図版	調査区	遺構	種類	器種	長さ cm	幅 cm	厚 cm	保存処理	備考
232	20	18	Ⅰ－A	4	家具	机天板	(61.0)	(20.5)	1.2	○	脚をはめ込む平行する２条の溝は蟻溝　裏面の周辺部は薄く仕上げる　補修孔あり
233	20	18	Ⅰ－A	4	建築部材	板材	(129.0)	8.6～10.2	2.2～2.4	○	片端欠損　丁寧な仕上げ　部分的に加工痕認められる
234	20		Ⅰ－B	6		ヘラ状製品	15.1	2.3	0.7		木製　両端を丸く仕上げる　ちゅう木？
235	20		Ⅰ－B	6		ヘラ状製品	18.7	1.7～2.2	0.6		竹製　両端を丸く仕上げる　ちゅう木？
236	20		Ⅰ－B	7		ヘラ状製品	14.5	1.9	0.8		木製　両端を丸く仕上げる　ちゅう木？
237	20		Ⅰ－B	7		ヘラ状製品	20.5	2.1	0.5		竹製　両端を丸く仕上げる　ちゅう木？
238	20		Ⅰ－B	7	容器	椀	口径 14.2	高さ 5.0	底径 6.6		挽物　漆塗布　平底
239	20		Ⅰ－B	7	容器	円形曲物	直径 13.0	(6.3)	0.8		底板　釘結合　側面２箇所に結合孔
240	20		Ⅰ－B	7	容器	円形曲物	直径 15.1	(8.7)	0.6		底板　釘結合　側面３箇所に結合孔 片面漆？塗布
241	20		Ⅰ－B	7	容器	円形曲物	直径約 27.1	(3.9)	0.7～0.9		底板　釘結合　側面２箇所に結合孔 表面に刃物キズ
242	20	18	Ⅰ－B	7	農具	横槌	30.5	7.0	6.4	○	身部円筒状　身・柄部の境明瞭 柄部真直ぐに延びる
243	20	18	Ⅰ－B	7		用途不明	24.5	1.3	0.5	○	箸状で片端が尖る　中央に突起　丁寧な加工
244	20	18	Ⅰ－B	7	工具	木針	26.5	0.3～1.6	0.2～0.6		片端尖る　片端太くなり小さな抉りあり　丁寧な加工
245	21	18	Ⅰ－B	8	容器	楕円形曲物	36.5	(16.5)	0.6	○	底板　樺皮結合　樺皮紐が残る結合孔２箇所残　補修孔あり　削り痕顕著　刃物傷多い 柿渋？を両面に塗布
246	21	18	Ⅰ－B	8	容器	方形曲物	36.0	(7.1)	0.5～0.8		底板　樺皮結合　結合孔３箇所残る
247	21	19	Ⅰ－B	8	容器	方形曲物	33.0	14.7	0.3～0.8		底板　樺皮結合　樺皮紐が残る結合孔１箇所残
248	21		Ⅰ－B	8	容器	方形曲物	56.8	(8.2)	0.3		底板　樺皮結合　結合孔５箇所 １箇所は樺皮紐残る　丁寧な加工
249	21	18	Ⅰ－B	8	容器	円形曲物	(43.6)	(9.8)	0.7～0.9		底板　樺皮結合　結合孔１箇所 矧合わせあるいは補修の孔３箇所
250	21	19	Ⅰ－B	8		用途不明	(18.4)	1.6			丁寧に面取りした３本の棒を樺皮紐で緊縛
251	21	19	Ⅰ－B	8	農具	横槌	34.6	7.0	6.6	○	身部円筒状　身・柄部の境明瞭　柄基部太くなる 使用痕顕著
252	21		Ⅰ－B	8	農具	横槌	(25.4)	7.7	7.1	○	身部円筒状　身・柄部の境明瞭　柄基部欠損
253	21	19	Ⅰ－B	8	服飾具	下駄	19.7	(5.3)	0.6～2.3		後壺の穿孔がない　歯が磨り減る
254	22	19	Ⅰ－B	8	農具	犂				○	本文別記
255	22	19	Ⅰ－B	8	農具	犂				○	本文別記
256	22	19	Ⅰ－B	8	農具	犂					本文別記
257	22		Ⅰ－B	8	農具	犂					本文別記
258	23	19	Ⅰ－B	9	農具	横槌	39.1	9.0	7.8	○	身部円筒状　身・柄部の境明瞭 柄基部太くなる
259	23	20	Ⅰ－B	9	服飾具	桧扇	24.2	2.0～2.2	0.1	○	10枚？で１個体　それぞれの大きさはほぼ同一で先端は片切り　要孔は１箇所 綴紐孔は２あるいは３箇所
260	23	20	Ⅰ－B	10	紡織具	タタリ	28.6	23.4	6.6	○	台部　隅丸方形の円盤状　中央に5.5cm×3.4cmの方形孔　裏面は孔に沿って抉り
261	23	20	Ⅰ－B	10	家具	椅子	(16.0)	14.0	2.3	○	脚部　指物　枘差し
262	23		Ⅰ－B	10	農具	木鍾	14.3	7.8	5.7	○	丸太材中央に細い溝を巡らす　樹皮残る
263	23		Ⅰ－B	10	農具	横槌	(15.8)	10.0	8.7		柄部欠損
264	24		Ⅰ－B	10		用途不明	15.9	6.0	0.1～1.6		切り欠きのある板材　丁寧な加工
265	24	20	Ⅰ－B	10		用途不明	19.1	3.1	0.45		板状　側面両側から抉り 片端に直径 1mm程度の穿孔２箇所
266	24		Ⅰ－B	10		用途不明	27.3	9.9	1.0		板状　片端両側面から矢板状に削る 片端枘状の突起
267	24	20	Ⅰ－B	10		用途不明	39.9	(4.3)	1.3		板状　片端細くなる　片端破損が激しいが抉りが認められる　丁寧な加工　鳥形？
268	24		Ⅰ－B	10	容器	木樋	(54.5)	(3.6)	(3.7)		おおきく破損する
269	24	20	Ⅰ－B	12	紡織具	経送具	73.8	27.5・28.8	1.1	○	板状　長側面端が突出する 補修孔２箇所　一方には樺皮紐が残る
270	25	21	Ⅰ－B	10	建築部材	柱（高床式）	(349.6)	φ 7.8～11.4		○	床上部半截　床下部面取り　床下 1.78 m
271	25	21	Ⅰ－B	10	建築部材	柱（高床式）	277.4	φ 13.0～14.0		○	床上部半截　床下 1.4m 柱頭は半截側の反対側に抉り
272	25		Ⅰ－B	10	建築部材	柱（高床式）	83.7	10.2	5.3		床上部半截　部分的に炭化
273	25	21	Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(259.5)	φ 4.2～6.6			片端（根側）抉り　片端欠損

木製品一覧表（2）

（）内の数値は、残存値　φは直径

報告書番号	図	図版	調査区	遺構	種類	器種	長さ cm	幅 cm	厚 cm	保存処理	備　考
274	25	21	Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(324.0)	φ 3.6～6.0		○	片端二股になる　片端が杭状に尖る 中ほどで半截する程度に削る　部分的に炭化
275	25	21	Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(366.5)	φ 5.1～7.4			片端木の折利用してをＬ字状に加工 片端杭状に尖る　腐食が著しい
276	25	21	Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(319.3)	φ 6.6～7.5			片端欠損　抉り？　片端杭状に尖る　炭化が著しい　杭状に尖る方の60cmのみ炭化せず腐食　地面に埋まっていた柱の可能性も
277	26		Ⅰ－B	10	建築部材	柱	(270.1)	φ 8.4～10.6			片端杭状に尖る　片端欠損するが枘穴状の抉り
278	26		Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(251)	φ 6.4～7.4			片端杭状に尖る　近くに抉り　片端欠損
279	26		Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(253.5)	φ 6.1～7.8			片端杭状に尖る　片端欠損
280	26		Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(211.4)	φ 6.0～7.0			片端杭状に尖る　片端欠損
281	26	22	Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(221.6)	φ 8.0			片端杭状に尖る　片端欠損　端近くに抉り 中ほどに半截する程度に削る
282	26		Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(228.5)	φ 4.8～5.8			片端杭状に尖る　片端欠損　腐食著しい
283	26		Ⅰ－B	10	建築部材	小舞？	(212.5)	φ 3.2～3.8			片端杭状に削る　近くに抉り　片端欠損
284	27	22	Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(188.4)	φ 6.2～8.0		○	片端欠損　片端抉り
285	27		Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(173.4)	φ 6.8～8.0			両端欠損　部分的に枝切断等の削り痕 炭化著しい
286	27		Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(163.0)	φ 4.2～7.2			両端欠損
287	27		Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(72.5)	φ 6.6～8.2			片端欠損　もう一方の端近くに抉り
288	27		Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	83.9	φ 6.4～7.2			片端に抉り
289	27		Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(69.7)	φ 6.4～6.9			片端欠損　片端半截され欠損
290	27	22	Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(73.0)	φ 5.7～6.3		○	片端を乳頭状に丸く削る　もう一方は欠損
291	28	22	Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(192.5)	φ 4.0～5.0			片端尖る　片端欠損
292	28		Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(172.0)	φ 4.0～5.0			両端欠損
293	28		Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(168.8)	φ 4.2～4.8			両端欠損
294	28		Ⅰ－B	10	建築部材	小舞？	(161.6)	φ 2.0～4.0			両端欠損　片端両側から削る
295	28		Ⅰ－B	10	建築部材	小舞？	(176.5)	φ 3.4～4.2			両端欠損
296	28		Ⅰ－B	10	建築部材	小舞？	(170.5)	φ 3.6～4.6			両端欠損
297	28		Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(154.8)	φ 4.3～4.8			両端欠損　部分的に面取り
298	28		Ⅰ－B	10	建築部材	小舞？	(146.0)	φ 3.2			片端杭状に尖る　片端欠損
299	28		Ⅰ－B	10	建築部材	小舞？	(147.5)	φ 2.4～2.7			片端杭状に尖る　片端欠損
300	29		Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(158.0)	φ 3.8～4.2			両端欠損
301	29		Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(147.7)	φ 5.6～6.0			片端杭状に尖る　片端欠損
302	29	22	Ⅰ－B	10	建築部材	小舞？	(131.5)	φ 3.6～4.8			片端杭状に尖る　片端欠損
303	29	22	Ⅰ－B	10	建築部材	小舞？	123.0	φ 3.4～4.0			片端両側から削る　片端鈍く尖らす
304	29		Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(101.1)	φ 5.9			
305	29	22	Ⅰ－B	10	建築部材	小舞？	114.8	φ 3.6～4.2			両端杭状に尖る
306	29		Ⅰ－B	10	建築部材	小舞？	(104.3)	φ 1.8～3.0			片端杭状に尖る　片端欠損
307	29	22	Ⅰ－B	10	建築部材	小舞？	(88.3)	φ 1.9～2.3		○	片端を乳頭状に丸く削る　もう一方は欠損
308	29		Ⅰ－B	10	建築部材	小舞？	(57.0)	φ 2.7			片端丸い　片端欠損
309	29		Ⅰ－B	10	建築部材	垂木？	(76.5)	φ 5.6～6.6			片端杭状に尖る　片端欠損
310	29		Ⅰ－B	10	建築部材	小舞？	(77.9)	φ 2.2～2.8			片端を削る　片端欠損
311	29		Ⅰ－B	10	建築部材	小舞？	86.9	φ 1.8～2.3			片端杭状に尖らす 片端一文字に切断芯部分に穿孔
312	30	22	Ⅰ－B	10	建築部材	屋根押え？	95.6	16.8	6.5	○	台形状に加工　裏面抉り　片端細く削りだす 加工痕顕著に残る
313	30	22	Ⅰ－B	10	建築部材	梯子	(82.3)	11.2	(4.0)	○	段を削りだす　２段分残存
314	30		Ⅰ－B	10	建築部材	板材	48.1	25.5	1.4		
315	30		Ⅰ－B	10		未成品	(42.5)	φ 10.5～12.5			両端欠損
316	30		Ⅰ－B	10		未成品	(35.9)	6.4	3.0		みかん割り材
317	30		Ⅰ－B	10		未成品	(27.0)	6.4	2.6		みかん割り材
318	30		Ⅰ－B	10		未成品	82.8	12～13.8	5.5～6.7		半截　削り痕

報告書抄録

ふりがな	のだちくいせき
書名	野田地区遺跡
副書名	高速自動車国道近畿自動車道松原那智勝浦線建設に伴う発掘調査報告書
編著者名	川崎雅史
編集機関	財団法人和歌山県文化財センター
所在地	〒640－8246　和歌山県和歌山市湊571－1　TEL073-433-3843
発行年月日	西暦2009年10月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
野田地区遺跡（のだちくいせき）	和歌山県（わかやまけん）有田郡（ありだぐん）有田川町（ありだがわちょう）野田（のだ）	303666	38	34° 03′ 54″	135° 12′ 02″	第1次調査 20060111～20060320 第2次調査 20060427～20060731 第3次調査 20070502～20070629	1,478㎡	高速自動車国道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野田地区遺跡	寺院跡ほか	弥生時代	竪穴住居	弥生土器	
		古墳時代	溝（自然流路）、土坑	土師器、木製品（建築部材・家具・農具・紡織具）	高床式建物の建築部材
		奈良時代 平安時代	溝（自然流路）	土師器、黒色土器、須恵器、木製品（農具・服飾具・容器）	平安時代の桧扇や犂など木製品
		鎌倉時代 室町時代	溝（自然流路）、土坑、柱穴	瓦器、土師器、須恵器、国産陶器、輸入磁器、木製品（容器・工具）など	瓦器の変遷を追える資料

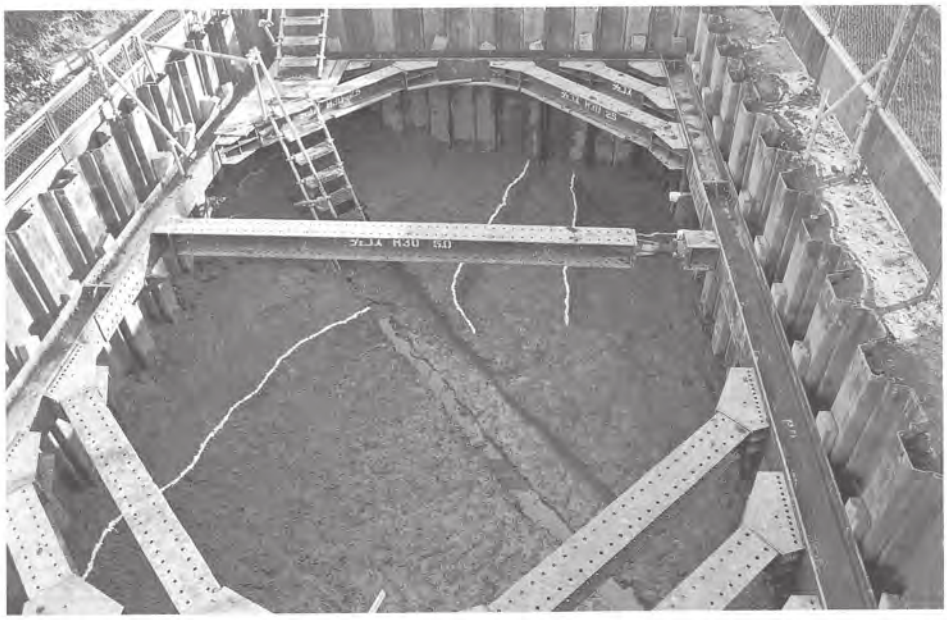
要約

沖積地から河岸段丘にかけての地点でおこなった3箇年にわたる発掘調査において、弥生時代から中世にかけての各期の遺構・遺物がみつかった。沖積地では古墳時代初頭から室町時代にかけての溝（自然流路）が確認され、保存状態のよい豊富な木製品や土器類が出土した。古墳時代の高床式建物の建築部材や家具・紡織具、平安時代の犂・桧扇などは、県下的には唯一あるいは希少な資料である。また、弥生時代末から古墳時代中期にかけての土器類や、中世の瓦器には変遷を追える資料が揃っている。既往の調査では、平安時代の形代や中世の笹塔婆なども出土しており、調査区付近は神聖な場所であった可能性がある。段丘上では弥生時代後期の竪穴住居や中世の溝・柱穴が検出された。弥生時代の住居は、高地性集落の存続時期と併行しており、当時の社会背景を考える上で興味深い。段丘上には南北朝時代の宝篋印塔があり、付近にあったとされる観音寺との関係が指摘されている。調査ではお寺に関る遺構は見つかっていないが、出土した輸入磁器や瓦、瓦器椀あるいは既往の調査で出土している笹塔婆などは寺との関わりが考えられる。

1. 遺跡遠景（東上空から）

2. 調査地近景（上空から）

1. Ⅰ－A区　第２層上面
（北から）



2. Ⅰ－A区　第12層上面
（北から）

3. Ⅰ－A区　第27層上面
（南から）

1. Ⅰ－A区　遺構１（北西から）

2. Ⅰ－A区　遺構２（北から）

3. Ⅰ－A区　遺構３（南東から）

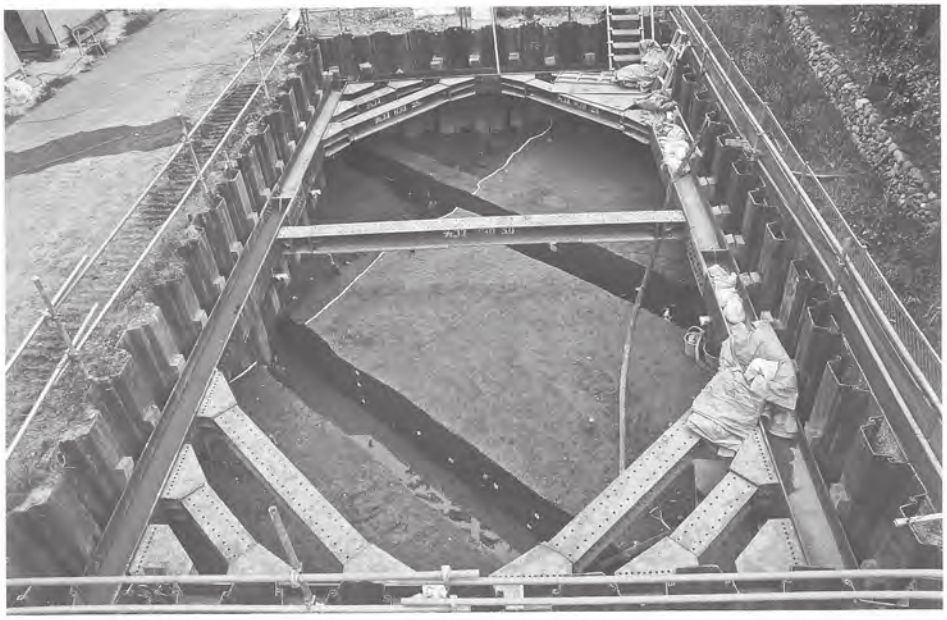
4. Ⅰ－A区　遺構４（南東から）

5. Ⅰ－A区　第13層土器出土状況

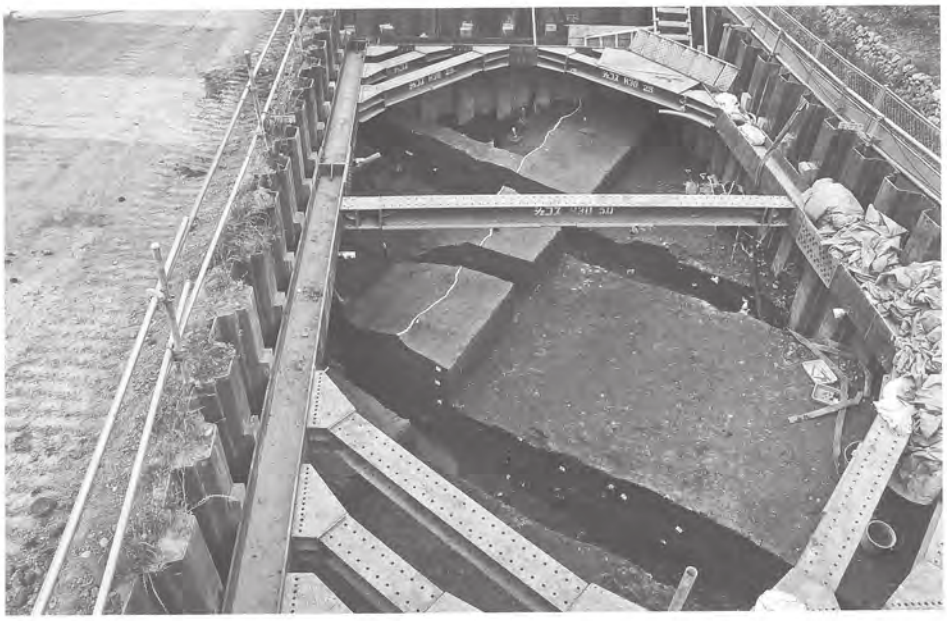
6. Ⅰ－A区　遺構４木製品出土状況（南東から）

7. Ⅰ－A区　第25層土器出土状況（北西から）

8. Ⅰ－A区　段丘崖（北から）



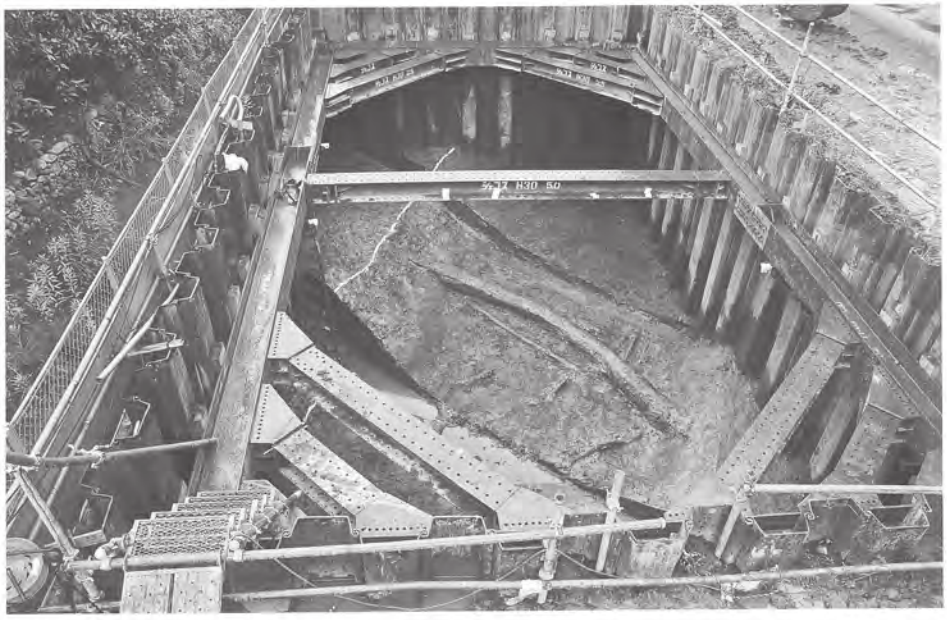
1. Ⅰ－Ｂ区　遺構５
（南から）



2. Ⅰ－Ｂ区　遺構６
（南から）

3. Ⅰ－Ｂ区　遺構７
（北から）

1. Ｉ－Ｂ区　遺構８
（南から）



2. Ｉ－Ｂ区　遺構９
（北から）

3. Ｉ－Ｂ区　遺構 10
（北から）

1. Ⅰ－Ｂ区　遺構８横槌出土状況

2. Ⅰ－Ｂ区　遺構８犂出土状況

3. Ⅰ－Ｂ区　遺構８土器出土状況

4. Ⅰ－Ｂ区　遺構９横槌出土状況

5. Ⅰ－Ｂ区　遺構 10 木製品出土状況（北東から）

6. Ⅰ－Ｂ区　遺構 10 土器・木製品出土状況（南西から）

7. Ⅰ－Ｂ区　遺構 12 木製品出土状況（南西から）

8. Ⅰ－Ｂ区　遺構 10 完掘状況（北東から）

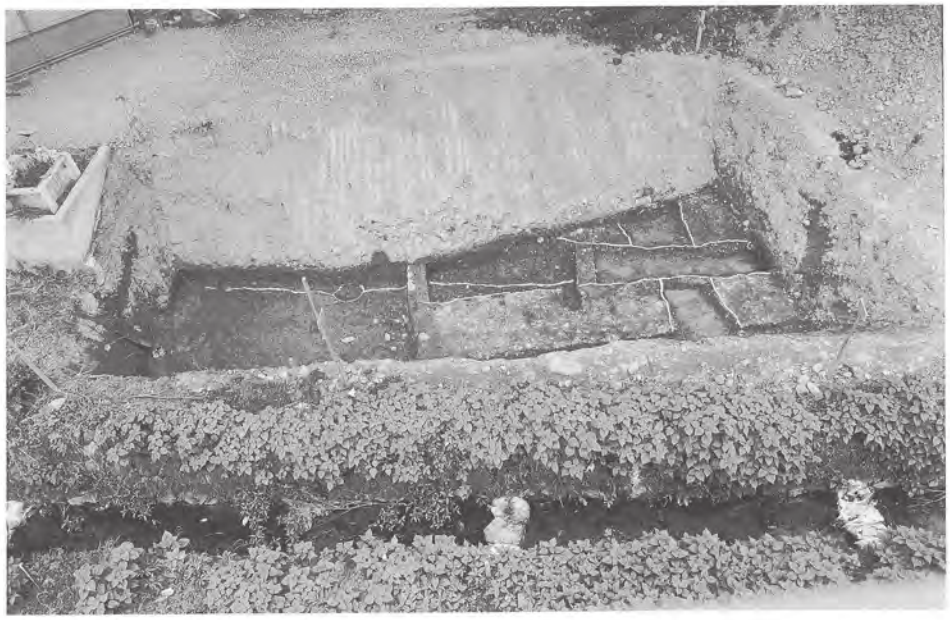
1. Ⅱ－A区
（北から）

2. Ⅱ－B区
（北から）

3. Ⅱ－C区
（北から）

1. Ⅱ－Ｄ区
（北から）

2. Ⅱ－Ｄ区　遺構 50
（西から）



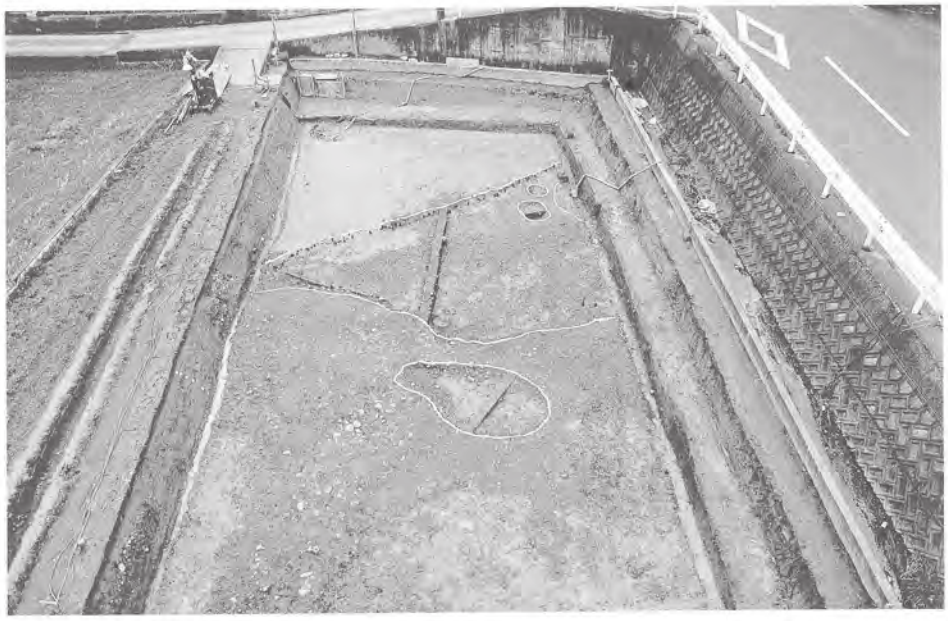
3. Ⅱ－Ｅ区
（東から）

1. Ⅲ－Ａ区
（南から）

2. Ⅲ－Ｂ区
（北から）

3. Ⅲ－Ａ区　遺構 36 柱列
（西から）

1. Ⅳ区北半
（南から）



2. Ⅳ区南半
（北から）

3. Ⅳ区北東部　柱穴群
（西から）

16

17

23

24

27

28

29

36

32

33

34

Ⅰ－Ａ区出土遺物

38

42

41

47

49

50

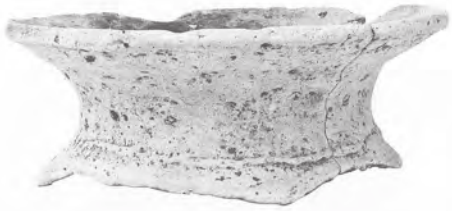
52

55

53

61

63



64

66

67

80

86

82

92

88

Ⅰ－Ａ区出土遺物

98

103

104

111

116

112

118

120

124

130

131

132

134

135

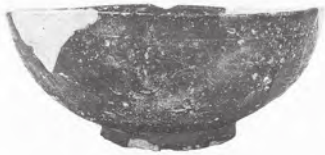
139

140

141

143

144


145

150

159

161

162

163

164

165

166

Ⅰ－Ｂ区出土遺物

167

168

171

179

181

182

183

185

186

188

189

191

193

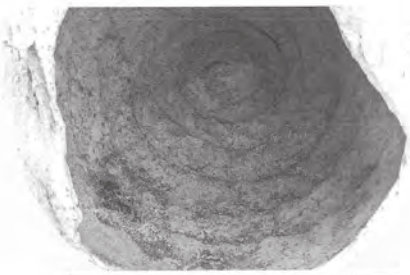
195

206

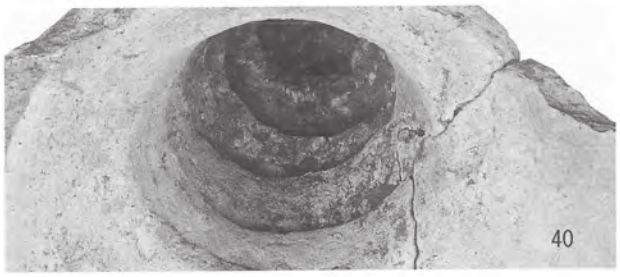
207

320

323



24



40

36

181

Ⅰ－Ａ・Ｂ区、Ⅱ区出土遺物

232

233

242

243

245

246

244

249

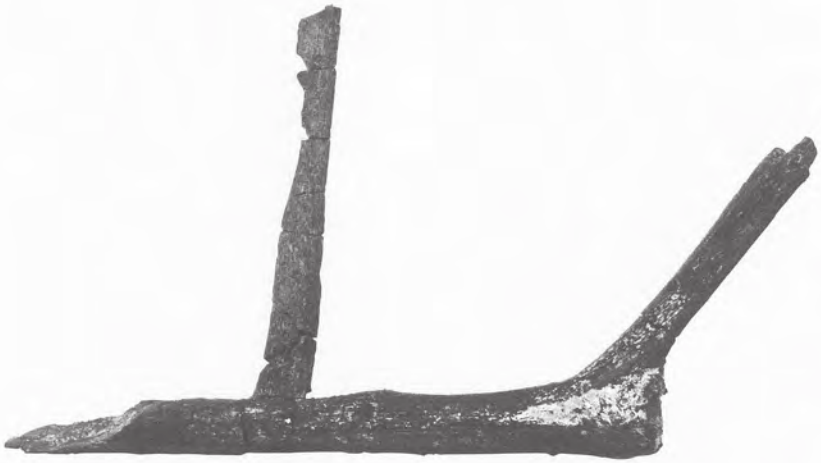
I 区出土木製品

247

251

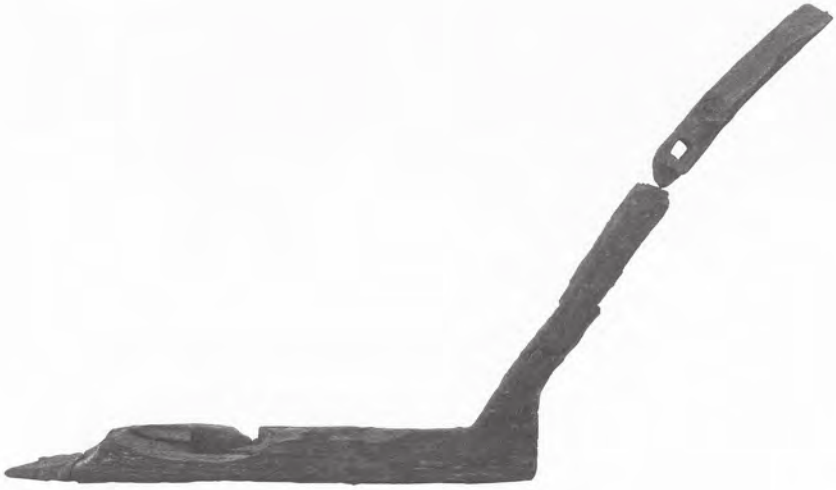
250

253



254

256



255

258

I 区出土木製品

259

265

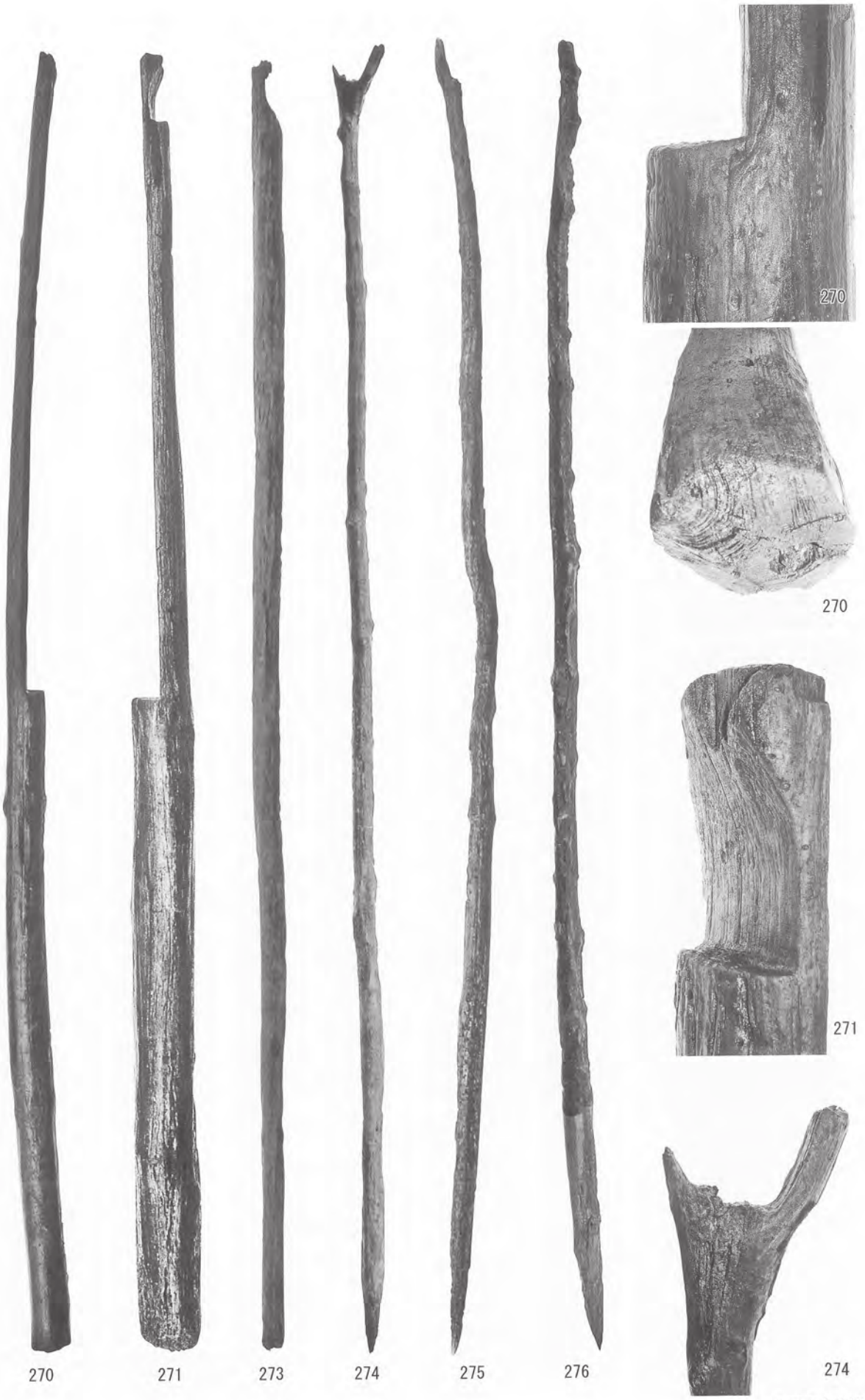
260

261

267

269

I 区出土木製品



Ⅰ区出土木製品

281

284

291

307

305

302

303

281

281

284

290

312

313

I 区出土木製品

野田地区遺跡

—高速自動車国道近畿自動車道松原那智勝浦線建設に伴う発掘調査報告書—

2009年10月30日

編集・発行　財団法人　和歌山県文化財センター

印刷・製本　株式会社　協和